
超リリカル銀魂 S t r i k e r S ~大次元鎮魂歌~

支配者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超リリカル銀魂 S t r i k e r s 〈大次元鎮魂歌〉

【Nコード】

N 7 8 4 8 U

【作者名】

支配者

【あらすじ】

リリカル銀魂の番外編『リリカル剣魂スペシャル侍達と魔法少女』の最終章！このシリーズは銀魂メンバーだけでなく数多くのアニメキャラが大活躍する超多重クロスオーバー作品です！魔人王ゾーグとの激戦から数カ月後伝説の白夜叉こと坂田銀時、そしてこの世界では紅夜叉と呼ばれている緋村剣心は知り合いに誘われフェイト達の世界へと向かうそこで狂乱の貴公子こと桂小太郎をはじめ、神楽、新八、エリザベス、月詠、この世界の万事屋のメンバー、セイバー、シャナ、ヤミ、そして数多くの仲間達と共に源外の転送装

置でフエイトの世界に向かうのであるがとあるトラブルによって間違えて10年後の世界に飛ばされてしまうのであった。そこで銀時達は火事の中、1人の少女に出会い、救助する。その少女はスバル・ナカジマ。後に銀時と剣心に憧れ、侍の強さを知り、銀時と剣心に追いつくために刀を持ち、剣術を学びだす魔剣士少女。そして裏の舞台で、かつて攘夷戦争で銀時と桂、そして剣心と共に天人の侵入を阻止する為に侍の国を守る為に共に戦った友。そして攘夷戦争の中で最も過激で危険な男であり、武装集団『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋助、そして超銀魂世界では史上最強の攘夷浪士と恐れられている志々雄真実。江戸の世界を潰す為、高杉と志々雄はゾーグを裏で操りフエイト達の次元世界を滅ぼそうとしていた全宇宙最強の軍事国家『宇宙帝国アークス』と手を組み、フエイト達の世界を潰す計画を進める。そしてアークス帝国の皇帝が持つ究極の暗黒のロストロギア『ヘルダーク』の力とは一体？そして…恩師松陽の死にかかわるあの人物も…。かつてない史上最強の敵『宇宙帝国アークス』。全世界の存亡をかけた大決戦の幕がっいに開かれる！！注意！この小説はキャラ崩壊が激しかったりしますのでご注意下さい。登場作品銀魂、るろうに剣心、リリカルなのは、灼眼のシャナ、ハヤテのごとく、Fate/stay night、To LOVEる、とある魔術の禁書目録、護君に女神の祝福を！、デジモン、NEEDLESS、うえきの法則、緋弾のアリア作品は増え次第追加いたします。

第一訓 リリカル銀魂の最終章の始まりは悪の談話から（前書き）

支配者「ついに『リリカル剣魂スペシャル』の最終章スタートです」

銀時「ほぉーそうかついにスタートか！」

剣心「どんな内容なんでござるか？」

支配者「残念ですがネタばらしは出来ません」

銀時「おいおい、せめて軽く教えてやっただって良いんじゃない——」

支配者「超リリカル銀魂 Strikers ～大次元鎮魂歌～ 始まります！」

銀時「オイイイ！！無視しなくたって良いんじゃない！？銀さん泣いちゃいますよ——」

第一訓 リリカル銀魂の最終章の始まりは悪の談話から

ここは銀魂がさらに進化した『超銀魂』の世界。

この世界には銀魂のキャラだけではなく他のアニメや漫画のキャラクターもたくさん存在している……というか暮らしている。

アニメ好きにとっては結構嵌る世界かもしれない。

そして、その世界の江戸の上空に浮かんでいるとある巨大な戦艦。
深夜の中、そこには何人もの人間がいた。

???

「本当にやるでござるか、晋助？ 真実？」

と、ヘッドホンで曲を聞きながら言いだしたのは鬼兵隊の幹部、人斬りと恐れられ策略家でもある河上万斎。

???

「今更何を言っているのです万斎さん？このアークス帝国の科学者が作った移動装置で坂田銀時や緋村剣心達が行った異世界に行けば、我らの目的が果たせるかもしれないですよ？」

万斎にそう言ったのは、武市変平太。

鬼兵隊の謀略家。ちなみに本人はフェミニストと言っているが、ロリコンの疑いがある。
実際にロリコンだし

???

「全くだ万斎。もうすぐ志々雄様と高杉様のご計画が完遂されるのだぞ。もつと喜ばんか」

変平太に続いて万斎にそういったのは方治。鬼兵隊の参謀で志々雄と高杉を崇拜している鬼兵隊一真面目な参謀。念の為に言って置くがこいつはフェミニストでもロリコンでもないよ。決して

???'「そうね。志々雄様達のご計画にはこの計画は絶対だわ」

そういつて着物を着た丸で花魁の様な容姿をした女性、由美。志々雄の愛人である。

???

「先輩達の言うとおりです。晋助様達の目的を果たす為にもこの計画はぜったいじゃないっすか！」

???

「そうですね、また子さん。もうすぐ僕以外の他の十本刀の方たちも集結する頃ですしね」

武市に続いて言いだしたのは金髪で赤い着物姿の女性。
来島また子。

「紅い弾丸」と恐れられる拳銃使いである。

そしてもう一人まるで、少年のような容姿に水色の着物を着た男
瀬田宗次朗。

鬼兵隊一の剣術使いで「天剣」や「音越」の異名を持つ志々雄配下の最強の特攻部隊『十本刀』の総隊長。

そして……何よりも恐ろしい気配を放っているのがこの二人の男

???

「くくく……いよいよド派手な祭りが出来そうだ。腐った世界を潰す
為の最大の血祭りになりそうだ。なあ真実」

???

「ああ、全くだぜ晋助。もうすぐ俺達のくだらねえ世界が消えるか
と思うと笑いが止まらねえな」

不気味な笑いをして二人の男は楽しみに待っていた。

自分達が腐ったと称している自分達の世界の終わりを
雲に隠れていた月が出てきた。

月明りが二人の男の顔を照らした。

一人は左目に包帯を巻き、派手な着物を着ている男。

もう一人は全身がやけどに覆われており包帯で体全体を包み腰に紫色の着物をかけた男。

攘夷浪士の中で最も過激で危険な男。攘夷志士武装集団の最大派閥
である『鬼兵隊』のリーダー。

そしてこの世界では鬼兵隊のもう一人のリーダーでもあり『獄炎』
と呼ばれる究極の火炎系能力を持ち剣心や銀時よりも遥かに敵、味

方に恐れられ『攘夷戦争の恐怖の象徴』『悪魔や妖魔すらも逃げ出す獄鬼』とまで謳われた幕府で最も危険視されている『超銀魂世界』の歴史上最強最悪の攘夷志士。

高杉晋助。そして志々雄真実。

黒き獣を内に飼い、世界の破壊を望む男。

地獄の炎をその身に宿し世界を灰とする事を望み真の弱肉強食を理想とする男

高杉

「……で、アンタはどう思うんだい？」

志々雄

「アンタの意見も聞かせてもらいたいな……皇帝さんよお」

煙管きせるを加えたまま高杉と志々雄は後ろにいる、一人の男がいた。

皇帝と呼ばれたその男は黒いローブを全身にかぶっており、首に黒く邪悪に光る宝石をかけ空中に浮かぶ玉座に座っていた。そのローブの中の姿は全く見えない。しかし……その人物は高杉と志々雄をも比較にもならない程の信じられない量の恐ろしい邪気と狂気を放っていた。この男こそがこの超銀魂世界に存在する宇宙海賊春雨すら手玉に取る全宇宙最強最悪の軍事国家の皇帝にして、『ジューエルシード・魔人族事件』・『闇の書・魔人王ゾーグ事件』の全てを裏で仕組んでいた黒幕であり『全宇宙最強の男』と呼ばれている『宇宙帝国アークス』の支配者、暗黒王のダークワンである。

ダークワン

「全くもってお前たちの言うとおりだ……この世界には正義だの秩序だのくだらない物が多すぎる。他の世界にもな……どいつもこいつも綺麗事ばかり並べおって、春雨の豚共も同じだよ。強者でない物が人の上に立つなどと言う事があってはならんだ。……それにしても……私の計画にこうもあっさりと乗るとは人間にしておくにはもっ

たいない奴らだ…お前達には私が新たに創造する新世界を幾つか与え王の座を約束しよう。なあ……ヘルダークよ」

ヘルダーク

『ソウダナワガルジ。コノモノドモニハミコミガアル。ワガチカラヲミタシテクレルジャキヲハナツテイルカラナ』

二人の行動に興味があるダークワンは二人の考えに感心したように高杉と志々雄に声をかけた。そしてどういっわけか皇帝と呼ばれたそのダークワンが首にかけているヘルダークと呼ばれた黒い宝石が声を発した。そして二人は煙管を離して、ふーっと煙を吐いた。

志々雄

「別に俺達はそんなもんには興味はねえよ。作るんだったら自分の手で作る。まあ…今のこの腐った世界よりあんたの作るうとしていゝる新世界のほうがよっぽど俺好みだな」

高杉

「お前さんの力とその首にかけている『ヘルダーク』ってロストロギアってもとその計画があれば、腐った世界も何もかも全部潰せるからな……せいぜい仲良くしようぜ…ダークワン皇帝陛下…」

獲物を睨みつけるその恐怖の瞳には人間とは思えない高杉と志々雄の邪氣と怒氣にダークワンはますます興味を持った。

ダークワン

「高杉晋助…志々雄真実…ククク…ますます見込みがある奴らだ…素晴らしいぞ。これ程の心を踊る邪氣を持つ人間を見たのは始めてかも知れんなあ…クハハハハ……」

想像するだけで楽しくなるほど、高杉と志々雄が危険な男であるとダークワンは確信するとダークワンは夜を照らし出す満月を見て、

クククツと不気味に笑う。
その時高杉が声を発した。

高杉

「…だけどよお、その『ヘルダーク』ってロストロギアまだ完成してねえって聞いたが？」

ダークワン

「ああ…確かにこれはまだ欠片だがそれでも力は凄まじいぞ？そうだろう、ヘルダーク」

ヘルダーク

『アア…ダガ、マダウマクチカラヲコントロールデキヌ。シカシワレガカンセイスレバ、モハヤナニモノモワレヲトメルコトハデキヌ。スベテノクサツタセカイヲホロボスコトナドタヤスイイコトダ。リソウキヨウノソウゾウモナ』

高杉

「そうかい…そりゃ楽しみだな」

ヘルダークは自身満々でそう言い高杉もにやけた顔を見せながらそう返した

すると今度は志々雄が声を発した

志々雄

「そっちの話もいいけどよ…あんたが他の世界から連れて来たっていう連中はどうしたんだ？姿がみえねえが…」

ダークワン

「なあに…我が居城でのんびりして貰っている。それに奴らも私の計画には賛同してくれているさ。我が『二十の盾』トゥエンティ・ガードも全員呼び寄せているしな」

高杉

「そうかい。あの夜兎でもまるで歯が立たないっていうバケモン連

中をな…ますます楽しみなってきたぜ。クックク…」

志々雄

「全くだぜ…。こりゃ攘夷戦争の時以上の血の雨が降るかもしれねえなあ…クククク…ハハハハハ…」

高杉・志々雄

『さあ……世界の終焉をかけた祭りと行こうじゃねえか』

アークス帝国と手を組んだ超銀魂世界の『鬼兵隊』の新たな計画。
闇は静かに動き出した。そしてその闇はあらゆる世界を飲み込もう
としていた…。

第一訓 リリカル銀魂の最終章の始まりは悪の談話から（後書き）

ついに本格的に動き出す高杉と志々雄

そして宇宙帝国アークス！

支配者「と言う訳で赤夜叉さんや黒神さん達の許可をもらって僕の大好きな『リリカル銀魂 Strikers』のもう1つの物語、リリカル剣魂スペシャルの最終章『超リリカル銀魂 Strikers S 〜大次元鎮魂歌〜』いよいよ始まります。次の更新は少し遅れますが」

銀時「次回、『事故の際には新しい出会いがあるのはリリカル銀魂の常識』テイクオン……いや、間違えた。テイクオフ。」

第二訓 『事故の際には新しい出会いがあるのはリリカル銀魂の常識』 (前書き

支配者「ちょっと遅くなりましたが、第2回です」

銀時「もつと早く更新しろよ」

支配者「すいませんね。後今回はヒロイン・スバルの登場です」

剣心「他のと一緒に言う訳でござるな」

支配者「そう言うことです。それにしても早くもお気に入り10件突破とは嬉しい限りです」

銀時「そうだな」

支配者「皆さんありがとうございます。これから頑張ります。後、今回は意外な事が起こりますよ」

神楽「なにアルか？」

支配者「それは見てのお楽しみです。というわけ超リリカル銀魂始まります」

第二訓 『事故の際には新しい出会いがあるのはリリカル銀魂の常識』

ここは超銀魂世界

江戸のかぶき町。

万事屋のオーナー・坂田銀時と緋村剣心、宇宙最強の戦闘種族『夜兔族』の神楽とこの作品では天人によって作られた人造生命体という事になっているシャナとヤミ、そして、銀時に呼び出されてしまったイングランドの騎士王の英霊セイバーは、暇を持て余していた魔人王・ゾーグとの闘いから数カ月。一応平和な毎日を過ごしている。相変わらず依頼はあんまり来ないが、装置を使つてたまにフェイト達が遊びに来る。

銀時達ははため息をついた。

剣心「暇でござるな……」

銀時「そうだな……」

神楽「そうアル……」

シャナ「仕事するのも面倒くさいしね」

ヤミ・セイバー「そうですね……」

ボソツと小さく呟いた。

???「おはようございまーす」

そう言つて現れたのは、万事屋の働き者・志村新八である。

地味な存在、95%が眼鏡と言われてしまう男かつメガネ掛け機、その上ツツコミ役という悲しい役につけられた悲劇の人物である。

新八「余計なお世話じゃ!!!つか、僕の扱い酷くない!?!」

アアアアアア！！！！！」

そして

全員（新八以外）「はあゝ」

再び銀時達のため息をついた。
どうしたものか考えた。
そんな時である

???「おい銀時いるか？」

???「銀さゝん、剣さゝん」

銀時「ん？今の声は…」

突然扉を開けて数人の男女が入ってきた。それはナギとハヤテとヴ
イルヘルミナと御坂美琴と高須綾子と吉村護と植木浩介と神崎・H・
アリアとブレイドとイヴとセツナと未央と梶とクルスと一方通行と
当麻とインデックスとディスクと内田だった。

照山「内田じゃねえ！照山最次だ！！」

内田…もとい、照山が文中に叫んだ。

剣心「おや、ナギ殿に皆の衆」

銀時「なんか用かあ？」

ナギ「用があつてきたに決まっているだろうが、どうせお前達のことだから暇をもてあましてたんだろ？だったら一緒に『リリカルなのは』の世界にでも行こうと思つてな。誘いに來たんだよ」

ナギはこんな事を言った。

剣心「あゝなるほど」

銀時「確かにこうゆう時はなのは達の世界に行ったほうがいいな。今度はお前らもくんのか？」

インデックス「私もなのは達の世界に行ってみたいかも！」

デイスク「私も、なんか面白そうじゃない、異世界なんて」

照山「俺も魔導師って連中に興味があんだよ」

当麻「俺も暇だしな」

一方通行「ツたくなんで俺まで…」

植木「俺、公園の掃除があるんだけど…」

ナギ「ぶつくさ言うな、バカ共」

一方通行と植木だけが面倒くさそうに文句を言ったのでナギが怒った。

シヤナ「そうね。久しぶりになのはたちにも会いたいし」

セイバー「じゃあ決まりですね」

銀時達は椅子から立ち上がり、ジャンプを片手に歩きだした。剣心も刀を背負って歩き出した。そして神楽も傘を持ち出す。他の皆も玄関を出て、目指すは源外の工場。

桂「む…銀時達とリーダーではないか」

源外の工場へ向かう途中、後ろから声をかけられた。

銀時達は立ち止まって、振り返った。

そこにいたのは、攘夷志士の集団を収める1人であり、『狂乱の貴公子』&『電波男』こと桂小太郎とペット（！？）のエリザベスだった。

神楽「あ…ツラとエリー」

ナギ「何だツラとペンギンお化けか」

桂「ツラじゃない桂だ」

エリザベス『ペンギンお化けじゃないエリザベスだ』

神楽とナギにツラ呼ばわりされて突っ込む桂とペンギンお化け扱いされてプラカードでツツコムエリザベス。そして銀時と剣心に話しかける。

桂「銀時、剣心、これから何処に向かうんだ？」

銀時「ああ、ちよいと暑くて暇だからフェイト達の世界に向かうんだよ」

ナギ「おい。誘ったのは私だぞ」

と銀時は軽く答える。ナギが突っ込んできたが銀時は無視した。

桂「なら……俺とエリザベスも連れて行ってくれないか？」

エリザベス『お願いします』

全『は？』

銀時達は片眉を上げた。

桂「向こうの世界に行けば、しばらくの間は真選組や真女組の追っ手から身を隠す事ができるからな」

剣心「別にいいが小太郎。雪路殿はどうするのでござるか？」

剣心が桂にこういう。この世界では雪路と桂は姉と弟という関係であり、一緒に攘夷志士の集団を率いているのである。

桂「姉上だったら、マージョ・リー殿と懸賞に当たった世界美酒巡りツアーに行っていてな。1ヶ月は戻ってこない」

銀時「あゝなるほど、あの飲兵衛魔術師とか」

などと言う桂雪路がないのも当然という理由であった。因みにこの世界のマージョ・リーは唯の酒癖の悪い魔術師である。と言っても、裏家業で猿飛あやめのように始末屋をやっているらしいが、因みにマルコシアスもいるのだ。珍しい喋る魔術書らしい。そしてマージョ・リーは雪路の酒飲み仲間である。声も一緒だしね。どうせこいつらの事だから断つてもしつこくついて来るだろうな。断るのも面倒くさくなったのか、桂の動向を許した。まあ居ても邪魔になるわけでもないし。桂とエリザベスを加え、源外の工場へ向かう。

一方通行「おい、こんな犯罪者野郎連れてっていいのか？」

ナギ「別に大丈夫だよ。一応こいつ向こうじゃ英雄扱いだから」

アリア「ふん、こんなヅラがねえ……」

桂「ヅラじゃない桂だ」

すると、

銀時「月詠？」

剣心「おろ？月詠殿」

月詠「銀時、剣心」

銀時達の前に、一人の女性が現れた。

顔に傷があり、口に煙管をくわえていて、黒い着物を着ている。かつて夜兎族の王といわれた夜王・宝仙に支配されていた地下都市『吉原』の自警団『百華』の頭・月詠である。

神楽「偶然アル！！どうしたあるか、こんな所で？」

月詠「いや、日輪に”少しは外で休んできたなら”と言われてな」
ヤミ「ああ、そうなんですか」

月詠「必要ないといったんだがな…」

確かに月詠は、ほとんど休まず吉原を見回っている。

そんな月詠に日輪が休みを与えるのもわかる。

銀時と剣心がそんな事を思っていると、月詠は桂とエリザベスに氣付いた。

月詠「そっちの男と天人は誰だ？」

銀時「俺達の知り合いのツラとエリザベスだ」

桂「ツラじゃない桂だ」

桂が銀時の言葉を訂正する。

月詠「わっちは月詠でありんす。以後よしなに」

桂「俺は桂小太郎。好物は蕎麦だ」

ナギ「いちいち好物を言うなー!!」

桂「グホオッ！」

好物を言い出す桂にナギの突っ込みの拳が炸裂して、桂は血を吐いて倒れる。

苦い顔で哀れみする月詠にエリザベスがプラカードを出して挨拶する。ちなみに月詠はナギ達のことは知っていたことにする。紹介するの面倒くさいんで

エリザベス「初めまして、エリザベスです」

月詠「……ああ、こちらこそよろしく」

不気味そうにエリザベスを見て挨拶する月詠。月詠との挨拶を済ませ、桂は銀時に小さく声をかけた。

桂「銀時、貴様も随分と罪な男になったものだ。なのは殿以外にもこんな可憐な娘と付き合って…」

銀時「オーイ。誤解を招く発言はやめてくれ、ツラ君」

桂「ツラ君じゃない桂だ」

銀時達は源外の工場の前に到着した。なんやかんやで、月詠も一緒に来る事になった。中には、何やら機械を弄ってる老人がいる。ちなみにララはいません。今はナナやモモと一緒に故郷に里帰り中らしい。

銀時「おい、じーさん」

ナギ「じじいー」

神楽「生きているアルか、老いぼれ」

銀時とナギと神楽が老人を呼んだ。

???「ん？ああ、おめえらか」

老人が振り返った。

赤いゴーグルを付け、白髭をたくわえた老人は、平賀源外。江戸一番の機械技師であるが、ある事件を起こして今は指名手配されている。

ちなみにあの後もつと大人数が移動できるようにとナギの依頼で装置を大きくしたらしい

銀時「ちよいと装置動かしてくんねーか？」

神楽「なのはちゃん達に久し振りに会いたいアル」

未央「未央も会たーい」

源外「そりゃ構わねーが……」

源外は桂とエリザベスと月詠を見た。

銀時が源外に近づいて、小声で話し掛けた。

銀時「ツラとエリザベスはじーさんと同じ指名手配犯だから安心しな」

源外「そうか？まあそれならいいんだが、あの娘っ子は誰だ？また別品連れてきたな」

月詠を見ながら言った。

顔に傷があるとは言え、月詠はなかなかの美人である。

源外「まさか銀の字、お前の…」

銀時「違ーよ」

源外「んじゃ剣の字の…」

剣心「違うでござる」

即座に銀時と剣心は否定した。

銀時「んな事より、とつとと装置動かしてくれ」

ナギ「さつさと動かせクソ爺」

源外「わかったよ。でもクソ爺はねえだろ譲ちゃん」

ナギにツツコミながらも源外は移動した。

銀時達は装置の中に入った。

初めて装置の中に入った月詠とインデックスとディスクは、珍しそうに中を見ている。

一方通行や植木、アリアは特に興味なさそうだった
向こうに行くのは久しぶりだな。

銀時と剣心がそう思っていると、装置の中が赤くなった。
すると、スピーカーから源外の声が聞こえた。

源外「銀の字。剣の字、装置の中に赤いボタンがあるだろ？そのボタンを押すと」

銀時と剣心は嫌な予感がした。

そして予感は的中した。何も知らない月詠が、ボタンを押した。

月詠「ん？これか？」

ポチッ

ビーツ！ビーツ！！

源外「装置の出力が最大になって一切の制御が出来なくなる。絶対に今は押すな！」

銀時「ジジイイイー！そっちを先に言えエエエ！それに何でオメーがボタン押してんだー！？」

ナギ「誰がこんなボタン付けろといったんだクソジジー！！！！それにお前も余計なことするなー！！」

源外に向かって怒鳴った後、月詠にも怒鳴った。ナギも怒鳴った。

月詠「いや、すまん……つい気になってしまつて……」

月詠は素直に謝った。

銀時「つーかこんなボタン、前までなかったぞ！第二章にもなかったぞ！これ、『リリカル銀魂 Strikers』白夜叉鎮魂歌』や『リリカル銀魂 Strikers』攘夷戦争鎮魂歌』とかと同じ展開になつちまつたじゃねえか！！」

銀時が怒鳴っていると、装置内の赤い色は濃くなり、電気がビリビ

りする。

源外「まあ行き先は、なのはの世界だから大丈夫だろ」

装置の外にいる源外は、呑気にそう言った。

ナギ「何のん気な事いっとるんだくそジジイ！！もう金出さんぞ！！」

当麻「不幸だああああああ！！」

綾子「どうして私までこんな目に！！」

護「綾子さん！落ち着いてください！僕がいますから！！」

綾子「護…」

護「綾子さん…」

綾子「護…」

銀時「こんな時にいちやついてんじゃねー！！」

クルス「またこんな展開ですか」

新八「余計な物ばかりくつつけないでくださいよ！！」

セツナ「なに考えてんのよ！」

ハヤテ「お嬢様まで巻き込まないでください！！」

ブレイド「こんのクソ爺！！マジでぶっ殺すぞ！！」

ソルヴァ「そうだコラァ！！」

イヴ「マジで判決するぞ！！」

照山「つか、暇潰しでついでにきただけなのになんで俺までこんな目にあつてんだよ！！」

セト「僕達を殺す気かー！！」

インデックス「いにやー！！」

一方通行「このクソ爺！バラバラにされてえのか！！」

みんなはそれぞれ源外に文句を言う。イチヤつき始めた護と綾子に銀時が怒鳴る。

神楽「ヘルペス！ヘルペスミーシー！！」

セイバー「ヘルフェス！ヘルフェスタミー！！」

神楽が頭を抱えて叫ぶ。セイバーもだ。

シャナ「ヘルプミーよ神楽」

ヤミ「セイバーまでおかしいこといわないでください」

神楽に突っ込むシャナ。セイバーに突っ込むヤミ。

桂「武士たる者どんな状況でアレ、常に冷静でなければならぬ」

エリザベス「うむ、その通り！」

梶「慌てても仕方ない」

未央「だよな」

月詠「慌てても何にも起きぬから落ち着け」

ヴィルヘルミナ「その通りであります」

ヤミ「無駄に慌てても疲れるだけです」

植木「だよな。何とかなんだろ」

シャナ「まあ、なるようになる」

ディスク「慌てても疲れるだけだしね」

アリア「武偵はいつも死と隣り合わせだし…」

剣心「毎度の事でござる。いまさら慌てても仕方のない」

桂、エリザベス、梶子、未央、月詠、ヴィルヘルミナ、ディスク、
植木、シャナ、ヤミ、アリア、剣心は冷静だった。

他の皆「『落ち着けるかアアアア！！！！』」

ありったけの声で、他の皆は怒鳴った。

直後、赤い光は強くなり、バチツと強烈な閃光を放った。
光が収まり、源外は装置の扉を開けて中を見た。銀時達の姿はなかった。

源外「まあアイツらなら大丈夫だろ。そんな事より腹減ったな…」

そして相変わらず無責任な発明老人、源外なのであった。

0071年4月29日。

ミッドチルダ臨海第8空港。

ロストロギアによる大火災が起こっていた。オレンジ色の炎が空港を包み込む。消防隊が消火活動をしているが、炎が収まる気配はない。

「ダメだ！これ以上は無理だ！引き上げよう！」

一人の消防隊が叫んだ。

「だが、まだ中に子供がいるんだぞ！」

仲間に振返りながら、消防隊が叫んだ。

目の前に広がるのは、赤い空。

——アレ？なんだコレ？空が真っ赤だ。

彼は床に倒れていて、うつすらと開けた片目で、真っ赤な空を見ている。

——アレ？なんか蒸し暑くねえ？

彼の周りの風景には火に包まれている壁や窓、つまり火事の光景である。

——アレ？何で俺、こんなことになってんだっけ？アレ？こんな第一章の時も、やらなかったっけ？アレ？

銀時「ん……？」

銀時は両目を開けて、ゆっくりと上体を起こした。頭を、くしゃくしゃと掻く。

銀時は周りを見回した。どこかの建物の中のような。しかも炎に囲まれていて、幾つか柱が倒れて、壁も崩れて道を塞いでいる。しかもその近くにはナギと剣心がいた。

銀時「何だ？火事か？つか、どこだ此处？」

剣心「さあ？分からんでござる……」

ナギ「ていうかなんで私達こんなところにいるんだ？ハヤテ達はここだ？」

銀時、剣心、ナギは記憶を辿る。

確か源外の転送装置に乗って、変な赤いボタンを月詠が押して、そしたら訳分からなく転送して………気がついたら此处にいた。

銀時「よっこいしょう。」

とりあえず、銀時と剣心とナギは立ち上がった。

座って考えていても、何もわからないし、解決策も思いつかない。

銀時「神楽ー、新八ー、シャナー、セイバー、ヤミー、ヅラー、エリザベスー、月詠ー、不幸バカー、インデックスー、おーい」

ナギ「ハヤテー、ヴィルヘルミナー、綾子ー、山田ー、イヴー、ブレイドー、セトー、ソルヴァー、ディスクー、植木ー、内田ー、三人娘ー、アリアー、一方通行ー」

剣心「……誰もおらんでござるな」

銀時「とりあえず此处から出るか。このまま此处にいたら、丸焼きになっちまうからな」

ナギ「お前、こんな時でも呑気だな……」

銀時達は出口を求めて、適当に歩き出した。

出口を求めて、炎が燃え盛る建物の中を歩き回る。炎の勢いが増していき、建物内の暑さが増していく。大量の汗を流しながら、取りで通路を進んでいく。

銀時「そろそろ出口、見つけねーと……マジでヤバイんだけど……」
剣心「そうでござるな……さすがにこれ以上は……」

ナギ「暑い…疲れた…。ハヤテエ、ヴィルヘルミナア」

危険な状況に達すると、途中で銀時達は足を止めた。暑さのせいで3人の体力はどんどん奪われていた。その飢え体力0で軟弱で漫画バカで根性なしのお嬢様であるナギは今にもバタンキュウ寸前であった。

ナギ「誰が体力0で軟弱で漫画バカで根性なしだ!!」

ナギが文中に突っ込んだ。

まあ、無視だけど

いい加減どこかに出口はないかとキョロキョロと周りを見る。すると・・・

銀時「!?!?…今、声が聞こえたような……」

剣心「何?」

ナギ「は?こんな所に人なんかいるか!」

銀時は、声がしたと思われる方へ歩き出す。

剣心「銀時!」

ナギ「おい待てコラ!」

少し歩くと、広い場所に出た。その中心辺りにある石像の前に、女の子がいた。顔を俯きながら、シクシクと泣いている。

???「お父さん…お姉ちゃん…!」

泣きながら父親と姉を呼ぶ女の子。

顔や服は、すでに所々黒くなっている。炎の熱さで大量の汗をかき、

息苦しそうになっている。

銀時「親とはぐれたのか？」

剣心「これは不味いでござるな」

ナギ「ん？あいつどこかで見たような……」

銀時達が呟いた時だった。

女の子「…痛いよ……怖いよ……こんなの嫌だよ……帰りたいよ……」

顔を俯きながら、泣き続ける。

ピシッ！

その時、女の子の後ろにある石像にヒビが入った。ヒビは広がり、僅かに石像が前にズレた。

女の子は後ろを振り返った。

石像が、女の子に向かって前に倒れる。

ナギ「っておい！あれ崩れそうだぞ！」

剣心「不味い銀時！」

銀時「おう！」

剣心と銀時はその光景に不味いと思いおもわず走り出す。

女の子は振り返って、自分に向かって倒れてくる石像に気付く。

女の子「ひい……！！」

女の子は短い悲鳴を上げて、目を硬く閉じて頭を抱えた。

もう助からない。女の子がそう思った時だった。

銀時「待て待て待て待て待て待て待てエエエエー!!」

剣心「ストップでござる!!」

銀時が叫びながら、全速力で女の子の元へ向かう。

剣心もだ。

石像が落ちる直前で、銀時は急いで女の子を抱えて、その場から走り去り、剣心は逆刃刀を抜いて素早く振り、

剣心「飛天御剣流!“龍巻閃”!!」

龍巻閃の一撃で石像を粉々に砕いた。

銀時「おい、お前…大丈夫か？」

剣心「怪我はないでござるか!?お主!」

ナギ「もう大丈夫だぞ!」

銀時達が、女の子に声をかけた。

声を聞いて女の子は、ゆっくりと目を開けて顔を上げる。緑色の瞳をしている女の子は、銀時と剣心とナギの顔を見た。

女の子「……おじさん達とお姉ちゃん……誰……?」

銀時「おじ……!？」

おじさん、と呼ばれて銀時はショックを受けた。

剣心は別に気にしていなかったが

銀時は自分の右腕の匂いを嗅いだ。

女の子は、不思議そうな顔で銀時を見つめている。

剣心は全くなんとも思っていないようだが

銀時「あのさ……俺、加齢臭とかする？」

右腕から顔を離して、やや落ち込みぎみに女の子に尋ねた。
すると女の子は突然、驚愕の表情を浮かべる。

銀時「……あのさ、『おじさん』って呼ぶのやめてくんない？せめて『お兄さん』って呼んでくんない？まだ20代だし」
女の子「あ……ごめんなさい……」

真顔で銀時が言った。

そして女の子が銀時に謝った。

銀時の年齢は、まだ二十代前半……いや、二十代後半……あれ？どつちだっけ？まあとりあえず二十代なので、おじさんと呼ばれるのは、まだ早い……かな？

銀時「おい、何だよ『かな？』って」

無視

銀時「オiiiiiiii!!」

そして今度はナギが

ナギ「そうか？剣心はともかくお前は誰がどう見てもおっさんだろ」
銀時「俺はおっさんじゃねえ!!お兄さんだお兄さん!!!」

ナギにまでおっさん呼ばわりされ銀時はナギに突っ込んだ。
おじさんと呼ばれるのが納得いかず、小さくブツブツ文句を呟きながら、銀時は、再び女の子を抱き上げた。

銀時達は周りを見回して、どこか外に出れそうな通路を探す。この通路も瓦礫の山に塞がれている。

ナギ「おい、あそこ通れそうだぞ」

剣心、銀時『ん？』

ナギは一箇所の通路に目を付けた。その通路も瓦礫の山に塞がれているが、周りに比べたら軽い方だった。

ソコから出る事に決めて、銀時達は女の子に顔を向けた。

ナギ「今からあそこを吹っ飛ばすから、そいつにしっかり捕まってる」

女の子は頷くと、銀時の体を強く抱いた。

ナギ「リロード。グレイモン」

ナギは自分のクロスローダーを掲げてグレイモンを呼び出した。

女の子「かつ、怪獣!？」

ナギ「心配するな。こいつは無害だ」

銀時「おいおい。こんなところでデジモンを呼び出したりしていいのか？」

ナギ「うるさい。そんなこと言ってる場合じゃないだろうが」

女の子はグレイモンを見て驚くがナギは大丈夫だと女の子を落ち着かせた。

銀時はナギがグレイモンを呼び出した事で突っ込んだがナギはうるさいといって銀時を黙らせた。

グレイモン「お嬢様。何の御用で？」

ナギ「ここから出るからあそこを吹っ飛ばせ」

グレイモン「御意」

グレイモンはナギの言葉に了解すると壁に近付いて尻尾を突き出した。

グレイモン「『ブラスターテイル』！！」

ドカアアアアアン！！

グレイモンは尻尾の一撃で壁をバラバラに吹っ飛ばした。

女の子「す…凄い……」

女の子は目の前の光景に唯驚いた。

吹き飛ばした通路の先に、出口と思われる穴を見つけて、銀時達は走る。

炎の中を駆け抜け、建物の外へと出た。

銀時「ふう……どうやら外に出れたみてエだな」

剣心「ああ」

ナギ「あゝ、疲れた。」

銀時「グレイモンの背中に乗ってたくせになに言ってたんだテメーは」
ナギ「やかましい！私はお前ら人外と違ってか弱いんだ！！」

剣心「ははは…」

外に出たのを確認して、銀時は女の子を床に降ろした。

その時グレイモンの背中に乗っていたナギが疲れたといったので銀時はナギに突っ込んだ。

女の子「お兄さん達とお姉ちゃん。助けてくれて、ありがとう!」

銀時「おお」

剣心「無事でよかったでござるな」

ナギ「ああ」

女の子のお礼に、銀時達は短く応えた。

火災はおさまってないので、四人と一匹は建物から離れた。

離れた所から見て、燃えているのが空港である事がわかった。

銀時は、これからどうするか、ぱりぱりと頭を掻きながら考える。

剣心とナギも腕を組んで考えた。

すると、銀時達を見つめながら女の子が言った。

「……お兄さん達とお姉ちゃん、凄いなア」

銀時「ん?」

剣心「おろ?」

ナギ「凄い?私達がか?」

銀時は考えを中断して、女の子に顔を向けた。

「私……弱虫で……ずっと泣いてばっかで……何にもできなかった
……」

自分の情けなさや悔しさで、女の子は泣き出す。

泣いている女の子を見て、銀時と剣心とナギは溜め息をついた。

銀時「んなことねエよ」

剣心「そうでござるよ」

ナギ「そうだ。別にお前は情けくないぞ」

「え?」

女の子は、涙を流しながら銀時達を見る。

銀時「オメーは家族見つける為に、あの炎の中を歩き回ったんだろ？」

言つと銀時は、女の子の頭に手を乗せた。

銀時「泣きながらでもいい。ボロボロでみつともなくても、諦めねエで進み続けたんだ。恥じる事なんてねーぜ」

剣心「そうでござるよ。あのような危険な場所にしながら家族の事を一番に考えられるお主は立派でござるよ」

ナギ「そうだぞ。お前は子供の癖にちゃんと皆の事も考えてたじゃないか。私よりお前の方がよっぽど立派だ」

銀時と剣心とナギは優しく微笑んだ。

女の子は、いつの間にか涙が止まっていた。

銀時「オメーの家族も、きつと無事さ」

剣心「ああ、きつと大丈夫でござるよ。そんなに落ち込む事はないでござる」

女の子「お兄さん達……」

また女の子は、涙を流す。

今度は悔しさや情けなさからではなく、嬉しさで涙が出てくる。

スバル「私、スバル・ナカジマって言うんだよ。お兄さん達の名前は？」

ナギ（ほう……こいつやっぱりスバルだったか……）

少女の名はスバルと言った。その時ナギが意味深にスバルを見つめた。

ナギ（あれ？でも待てよ。確かスバルを助けるのってなのはじゃ…）

ナギは一瞬こんな事を考えるが

ナギ（ま、いつか）

と、簡単に開き直った。おいおい…いいのかよ。そして銀時達も自分の名を言い出す

銀時「俺は坂田銀時」

剣心「拙者は緋村剣心」

剣心・銀時

「『侍』だ（でござる）。」

スバル「侍？」

スバルは聞いた事のないその単語を聞いて首をかしげた。

ナギ「私は三千院ナギだ。言っとくが私は一般人だぞ」

スバル「でもお姉ちゃん。あの怪獣さんはなんだったの？」

ナギ「ああ。あいつはグレイモン。『デジモン』だよ」

スバル「『デジモン』？」

ナギ「まあ、私の頼りになる護衛というか友達だよ。ああ、そうだ」

ナギはそう言うクロスローダーを掲げてそこから一つの大きな卵とデジヴァイスを出した。

ナギ「これお前にやるよ」

スバル「え？」

ナギはそう言うのと卵とデジヴァイスをスバルに渡した。

銀時「お…おいおい。言いのかよナギ」

剣心「彼女に『デジタマ』を渡したりして大丈夫なんでござるか？」

ナギ「いいんだよ。これで面白い事になるから」

銀時「どう言う事だよそれ？」

ナギ「細かい事は気にするな。おいスバル」

スバル「何？お姉ちゃん」

ナギ「そこから生まれる生き物を大事にしてやれよ。きつとお前の友達になってくれるからな」

スバル「うん！分かった」

四人が話で話し合っていると、空に誰かの声が聞こえたのか、スバルが振り向いて空を見上げた。

こちらに向かってくる、白い点を見つけた。段々近づいてきて、白い点が人である事がわかった。杖を持って、白い衣装に身を包んでいる。

スバル「お兄さん達！お姉ちゃん！助けが来たよ！」

スバルは後ろを振り返った。

スバル「……あれ？」

だが、そこに銀時達の姿はなかった。

今さっきまで居たのに、忽然と消えてしまった。辺りを見回すが、やはりいない。

スバルは、少し淋しげな表情になるが、すぐにそれは消えた。そして決心する。

私も、あのお兄さん達のように、強くて誰かを助けられる人になる。そして4年後に銀時と剣心とナギ、そしてスバルは再会することになる。

第二訓 『事故の際には新しい出会いがあるのはリリカル銀魂の常識』

(後書き

支配者「いかがでしたか？ 今回のお話」

銀時「おいおい…スバルにデジモンもたせるって本気かよ……」

支配者「本気ですよ。後スバルのデジモンはオリジナルにしたいと思っていますので『名前』を募集したいと思っています」

ナギ「マジか!？」

支配者「マジですよ。出来れば侍みたいな感じの名前のデジモンでお願いしたいですね。僕の小説のスバルも魔剣士にする予定なのでデジモン小説が好きな方達にも考えてもらえたら嬉しいです。後、技やどんな見た目かなのか詳しく教えていただけたら嬉しいです。期限はとりあえず今日から十日位までで、と言う訳で如何かよろしくお願い致します」

剣心「次回、『大変な事は連続して起こるもの』テイクオフでござる」

第三訓 大変な事は連続して起こるもの（前書き）

支配者「しばらく更新を停止していて申し訳ありませんでした。次からはもっと早く使用と思います」

剣心「超リリカル銀魂、始まるでござるよ」

第三訓 大変な事は連続して起こるもの

0075年。5月。

ミッドチルダ。第3起動高層ビル。

そこで数多くのガジェット達が大暴れしているという奇妙な事件が発生している。幸いにも閉店してあった為か誰一人もいなかった。そんな中でツインヘアの栗色の髪の女性が多くのガジェットと戦っている。

高町なのは。19歳。機動六課の教導官を務めている。

レイジングハートを構えて、そこから大量の魔力を収束して一気に放つ。

なのは「デバババババ・バスターー！！！！」

桜色の閃光が放たれ、無数のガジェットたちが一斉に消えた。これで大抵数多くのガジェット達を倒したにもかかわらず、まだ山ほど存在する中、もう3時間近く戦っている為、魔力の限界を感じた。そしてパスを通してフェイトに援護要求を求める。

なのは フェイトちゃん、そっちはどう？出来れば救援のを頼みたいんだけど…

なのははフェイトにパスを通して話しかけると、フェイトのほうも苦しそうな状況であった。敵の数が多すぎるのだ。

フェイト『ダメ、こっちのほうのガジェットたちも異常なまでの多さに苦戦している！シグナム達とフォワード部隊の皆で戦っているから、もう少し時間がかかる！悪いけどそれまで辛抱して』

なのは『うん、わかった』

フェイト『本当にごめん、なのは』

パスを終え、フェイト達のほうも苦しい状況に追い込まれている。ガジェット達が襲来して来たのは2ヶ月前であり、それまでは大した数は無かった上にそんなに強いわけじゃなかった。しかし、今回のガジェットの数は異常なまでに多かった。その上なぜが強くなっていた。一体何が起きているのかわからないまま、なのはは悩む。

なのは「…こんなとき、銀さん達がいてくれたら…」

なのはは銀時の名を言い出す。この世界では銀時達の存在は世界的に有名である。

坂田銀時そして緋村剣心。

『ジュエルシード・魔人族事件』、『闇の書・ゾーグ事件』を魔法を使わず、剣だけで解決した二人の男。

その鬼神の如き強さから『白夜叉』や『紅夜叉』あるいは『エース・オブ・シルバーサムライ』や『エース・オブ・レッドサムライ』と呼ばれる、管理局内でも有名で、知らない人は殆どいない。

魔導師としてのランクで言えば、間違いなくなのは達以上のSS+は確実に入る。

そしてオーバーSSSランク以上とも言える強さを誇ったあの最強最悪の魔導生物兵器『魔人王ゾーグ』を剣の腕と気の力だけで倒した銀時と剣心はまさに世界を救った英雄的な武神であった。

だが、実際に銀時と剣心の戦いの様子を見た者は、当時の事件の関係者やアースラの局員と、極僅かな人数である。だから本当に銀時や剣心がそんなに凄い人なのか、まだ信じられない人が多い。

だが、フェイト・シグナム・リインフォースはやてからは魔人王

ゾーグと戦った銀時と剣心の鬼神の戦いっぷりの話を聞かされ、もしかすれば単体でも不屈のエースと呼ばれる今のなのはにですらあっさり勝ってしまうのではないかと思ってしまうほどである。

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん、シグナムさん、リインフォースさんの4人は銀さんと剣さんの強さを知っているから……どれだけ強いんだろう？それにしても銀さん……今頃何してるのかな……」

何故か銀時の事を考え出すなのは。彼女は一応銀時LOVEである。しかし魔法が使えないのにも関わらずにその鬼神のごときの強さを持った武人が想像できないため、その眼で確かめたい気持ちであった。ましてや相手はSSSランクを軽く越える強さを誇った化け物である。信じられないのも無理はなかった。

シュルルルルルルル！！

なのは「何！？」

奇妙な音に、なのはは後ろを向くと、そこから数多くの藍色の触手がなのはを襲う。魔力が半端じゃなく付きかけて反応が遅く魔法を唱える事ができなかった。そして……

なのは「きゃあああああああああああ！！！！」

無数の触手に体全体を巻かれて捕まり、その奥に引き込まれてしまっている。

???「エース・オブ・エース……ツカマエタ……」

その時その触手を放ったであろう主から不気味な声が木霊したのであった。

銀時「……あれ？……ここは？スバル？」

剣心「スバル殿……？」

ナギ「あれ？どこだ……ここ？」

突如、またもや景色が変わった事で驚きだす銀時。周りの光景は何やら見慣れない町の景色を高速ビルの屋上から見えるのであった。一体どうしてなのか頭の中で混乱する中、神楽、桂、エリザベス、月詠、シャナ、セイバー、ヤミ、当麻、インデックス、ハヤテ、ヴィルヘルミナ、綾子、山田、イヴ、ブレイド、セト、ソルヴァ、デイスク、三人娘、内田、アリア、一方通行が銀時達に駆けつける。

神楽「銀ちゃん！剣ちゃん！ナギ！いつの間に来てたアルか！？」

新八「銀さん達！大丈夫ですか！？」

ハヤテ「お嬢様！お怪我は！？」

神楽と新八とハヤテは心配したのか銀時と剣心とナギに駆けつけると、銀時は神楽の姿を見て安心するかのうな表情で叫ぶ。

銀時「新八、神楽、無事だったか……それに、ツラ、エリザベス、

月詠、シャナ、セイバー、ヤミ、当麻、インデックス、ハヤテ、ヴィルヘルミナ、綾子、山田、植木、イヴ、ブレイド、セト、ソルヴア、三人娘、ディスク、内田、アリア、一方通行！！」
桂「ヅラじゃない！桂だ！！」

照山「内田じゃねえ！照山最次だ！！」

クルス「僕はクルスですよ！！」

相変わらずヅラ、内田、山田呼びわりされて突っ込む桂、照山、クルスを尻目に、銀時と剣心とナギはこの状況が一体何なのかを考える。

ブレイド「とりあえずナギたんが無事でよかったな。お前らはどうでもいいけど」

銀時「なんだとゴラア！俺達はどうでいいってどういう意味だ！！」

ブレイド「言った通りの意味だ。焼け野原野郎」

銀時「テメエ！テメエの頭も焼け野原にしてやるつかあこのロリコン野郎！！」

ブレイド「いい度胸じゃねえか」

セト「止めるボケ共！」

新八「こんなときに喧嘩してる場合じゃねーだろうがあー！！」

銀時とブレイドがまたしても喧嘩を始めてしまいそうになったので皆で必死で止めた。

そして落ち着いたので現状確認する事にした。

銀時「ま、何とか無事に面子は揃ったわけだし…とりあえずこの状況が一体なんなのか考えようか。」

剣心「そうでござるな。と言うかさっきまでのあの場所は一体…」

月詠「わっちらはあの転送装置によってこの異世界に来たようで、ここが何処だか分からん。」

ヤミ「そうですね。またしても源外のせいで酷い目に会いましたよ」
新八「ヤミちゃんは落ち着いてたじゃないか」

一方通行「何で俺までこんな目にあってんだよ……」

美琴「日ごろの行いが悪いからじゃない？」

一方通行「んだとコラ！」

ナギ「うゝん……どつかでこの光景見たような……」

セツナ「え？それホント？」

シヤナ「早く思い出してよ」

ナギ「急かすな！今思い出すから！！」

桂と月詠は無事にメンバーが揃った事で安心しているが、訳の分からない場所に飛ばされて皆不自然に感じている。そして軽く愚痴った一方通行に対して美琴が突っかかるような事を言ったので一方通行は怒った。なんとなくナギはこの場所の事を知っているらしい。今思い出そうとしていた。

神楽「銀ちゃん！ここ海鳴町じゃないアル！？」

銀時「え……マジで！？」

神楽は不安げに銀時に言うと、銀時は驚きだして周りを見してみる。確かにそこはビルがばかり立っており、海鳴町とは全然雰囲気が違う。

ナギ「あ！思い出した！！ここ『ミッドチルダ』だ！！」

ハヤテ「あ、確かにそう見たいですね」

全『ミッドチルダ？』

ナギがそう叫びハヤテも相槌を打った。聞いたことのない地名に皆が首を傾げた。

ナギ「フエイトの出身世界だよ。ここ」

銀時「え？」

剣心「フエイト殿の？」

ナギ「ああ。その上『時空管理局』の御膝元の世界だ」

綾子「え…？」

神楽「マジアルか！？」

クルス「それ本当なんですか！？」

ナギ「ああ」

イヴ「なんか面倒くさい世界に来ちゃったなあ…」

銀時と剣心と神楽とクルスと綾子が聞いて来たのでナギはそう答えた。

イヴはなんだか面倒くさくなったと溜息を吐いた。

美琴「と言う事は…ここにフエイト達はあるの？」

ナギ「知らん」

綾子「知らんて…アンタねえ…」

一体どうしてその『ミッドチルダ』のこんな場所に付いたのか、本当にここがフエイト達がいるのかと理解できない銀時と剣心に、エリザベスがボートを出し、植木も声を出す。

エリザベス『まあ…無事に全員揃ったから良いんじゃない？』

植木「早々、何とかなるって。みんな無事なら」

神楽「うっさいネ！！何どうでもいいような言い方するアルか！？」

ブレイド「そうだこのヤロー！！俺はなのはたん達に会いに来ただぞ！こんなところなんぞに用はねえ！！」

ソルヴァ・照山

『呑気な事いつてんじゃねーぞこのヤロー！！』

一方通行「何でこんな訳わかんねーとこに放り出されなきゃいけね

「んだよ…」

当麻「ああ…俺って本当に不幸だ…」

梶「見知らぬ土地で迷子笑えない」

剣心「これこれ、言い争いをしていても仕方あるまい。とにかく誰か探すでござ——」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「！！！？？」

突如の大爆発で銀時達は驚きだす。それはビルから何かが大暴れしている感じで暴れているようであった。

月詠「な…なんじゃ、今の爆発は！？？」

美琴「知らないわよそんな事！」

照山「テロか！？テロリストが出たのか！？？」

未央「何の音だろう？？」

ハヤテ「なんか嫌な予感がしますね…」

ディスク「ホントね。私もそう思うわ」

月詠と照山が驚く中、床から突如、機械染みたヘドロの怪物が大量に現れ銀時達を取り囲んだ。

銀時「何なんだよこいつらは——！？？」

と銀時は大きく叫ぶ。

一方通行「なんだア？こいつらは？？」

ブレイド「いきなりウジャウジャ湧いて出やがって」

新八「こっこれは…銀さん！剣さん！」

神楽「銀ちゃん、剣ちゃん！こいつら何者ネ！」

神楽と新八は警戒しながらも傘と木刀を取り出して構え、月詠もクナイを構えだす。

銀時「知るかよ！こんな奴あの馬鹿皇子がまたなんか拾ってきたんじゃないのか！？」

剣心「拙者も分からなくてござるなこれは…」

銀時は怒鳴り剣心は冷静に分析する。ちなみに馬鹿皇子とは、銀時の世界のハタ皇子のことである。

ナギ「違う！こいつら『レアモン』だ！」

銀時「『レアモン』！？」

美琴「って事はデジモンなの！？」

シャナ「どうやらそう見たいね」

ナギ「でも…それにしても形がおかしい様な…」

そう、レアモン達はナギが知っているのとは少し形が違っていた。

銀時「つかなんでデジモンがミッドチルダにいるんだよ！！おかしいだろおい！！」

ナギ「知るか！私に聞くな！！」

桂「何はともあれ、江戸の平和を乱すものは誰であろうと、この『狂乱の貴公子』桂小太郎が天誅を下す！」

エリザベス「お仕置き開始じゃ！」

桂はそう言いながら刀を抜いて構え、エリザベスがプラカードを構える。

銀時「いや……ここ江戸じゃなくて『ミッドチルダ』だよ。つうか、新小説が始まっていきなりバトル展開かよ……面倒癖えなあ……」
剣心「これではいくら命があっても足りんでござるな……」
新八「そんなこと言ってる場合ですか!!」

つとづじと文句言いながら銀時と剣心は、腰に差している『洞爺湖』と彫られている木刀『妖刀・星砕』を抜いて構える。剣心も『逆刃刀・真打』を抜いて構えた。

神楽「ちょうど良いアル、最近運動不足だったから相手をしてやるネ」

綾子「そうね神楽。私も運動したかったところよ」

照山「いっちょ派手に暴れてやるか!!」

ヤミ「襲ってくる者は迎撃させてもらいます」

ブレイド「喧嘩は俺様の好物だ。ちょうど暴れたかったとこだしな!!」

イヴ「コイツラぶちのめしてイライラを発散するか!!」

セト「僕とやろうなんて身の程知らずなやつらだ」

ハヤテ「お嬢様に手を出す物は誰であろうと許しませんよ!」

一方通行「身の程知らずの三下どもに格の違いを教えてやらねえとなア……え!!」

神楽も両手をボキボキと鳴らしている。他のやる気満々であった。

月詠「来るぞ!」

月詠が叫ぶと、レアモンの大群が一斉に銀時達を襲い掛かる。

レアモン「ガアアアアアア!!」

ミッドチルダ臨海第7空港

そこではフェイト達が大量のガジェット達の破壊をしていた。そしてようやく全てのガジェットは壊滅し、ツインヘアーの金髪の女性『フェイト・テストアロツサ』は陸に降り、四人の男女がフェイトに駆けつけた。

フェイト

「皆、大丈夫!？」

「はい!」

フェイトの心配の声に、三人の男女が応えた。

オレンジ髪のツインテールの少女。ティアナ・ランスタール。16歳。

赤髪の男の子。エリオ・モンディアル。10歳。

ピンク色の髪の女の子。キャロル・ルシエ。10歳。

ちなみにキャロルの隣には、使役竜フリードリヒ。通称フリードという小さな竜がいる。

三人とも機動六課の新人フォワード部隊である。

そして、赤い衣装を着たハンマーを持った少女ヴィータと、剣を持ったピンク色のポニーテールの女性シグナムが駆けつけてきた。

フェイト

「ヴィータ、シグナム！」

フェイトは安心したかのような顔で2人の名を呼ぶ。しかし、さすがにガジェットの数が多すぎたのかさすがの2人も魔力を使い果たして、もう飛ぶことが出来ない状況になっている。

ヴィータ

「こっちのほうも何とか片付いた」

シグナム

「だが…さすがに数が多すぎた…今までの3倍…いや4倍はあった。一体何がどうなっているんだ……」

ヴィータ

「しかも一体一体がかなり手ごわくなってるし……ホントどうなってるんだよ……」

突如の急激なガジェットの増幅と強化型の出現に理解できないヴィータとシグナムだが、最優先すべき事は今も戦っているなのはの援護である。

フェイト

「ここも無事に解決したし、後はなのはの援護に向かうよ」

「はい！」

フェイトは急いでなのはの援護に向かう報告をするが、パスを通じても全然返事が来なかった。

フェイト「なのは！聞こえる？なのは！」

しかしやっぱり応答はなかった。

フェイト

（返事が無い！？…一体なのは何が…）

？？？

「た…大変ですー！」

つと、空からヘリが現れ、その中にはシャルがいた。
何やら慌てている様子であり、フェイトはシャルに聞き出す。

フェイト

「シャル、どうしたの！？一体何が……」

シャル

「第3起動高層ビルに、意味不明の異種生命体が突如ビルに寄生するかの様に現れたそうです！」

「！？？」

そこは、なのはが大量のガジェットと1人で戦っている高層ビルである。なのはとのパスが通らないのも、そこでなのはに何かが起こった事である。

フェイト「なのは！」

フェイトは驚愕してなのはの名を呼んで叫んだ。

ヴィータ

「ちい…なのはに何かあったのかもしれない！」

ヴィータは嫌な予感が嫌というほど想像する。

エリオ

「フエイトさん！」

キャロ

「早く、なのはさんの救出を！」

エリオとキャロがフエイトに言うと、迷いも無くなのはの救出に向かう。

フエイト達はヘリに乗って、なのはのいる第3起動高層ビルに向かっている。早く向かつてでも大抵は1時間までかかる。

フエイトは飛んで一足先になのはを助けたいが、魔力がもうほとんど無い為、今はせめて体力の回復をするしかなかった。

そしてシャマルはモニターをだと、そこには第3起動高層ビルに強大な異種生命体が映し出されているのが分かる。

それを見たフエイト達は信じられないような表情をする。

しかも、魔導師達のデバイスによる魔法攻撃にもびくともせず、さらに拡大し続けてミミズのようなドロドロの触手が続々と生えており大量のレアモンが現れている。

そして、数多くの魔導師達が返り討ちされて叩き落とされたり捕まったり体の一部にされてしまうと云う恐ろしい光景を眼にする。

リイン

「ヒイ、ひ……人がア！」

魔導師が異種生命体であるレアモンに飲み込まれる恐ろしい光景を見て怯えるリイン。

ティアナ

「こ……こんな化け物染みた生命体がいたなんて……」

つとティアナは恐ろしく感じる。見たこともない生命体・レアモン……みたいな者は拡大し続ける為、まさに化け物としか言いようがない。

ヴィータ

「なのは……無事なら良いんだが……」

シグナム

「ヴィータ、高町を信じる。あいつならそう簡単にはやられないはずだ……」

と心配するヴィータにシグナムは支える。しかし……フェイト、シグナム、ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャロは残り少ない魔力で未知の化け物……て言うかレアモン見たいな物に勝てるのか心配になってきた。

シャル「って……あれ？」

だが、その時シャルはモニターを見てある異変に気づいた。それは、突如レアモンから生えてくるドロドロの触手が次々と真つ二つに斬られて弱まってくる事である。

シャル「……いきなり異種生命体の触手が次々と切り落とされていく！？それに凄い爆発が起こってる！？」

フェイト「え？」

シャルがそう言うと、フェイト達も驚きだしてモニターに注目する。

確かに誰かが異種生命体の体を踏み台扱いとして接近戦で戦っている所が映し出されている。ほかにも火炎弾や雷撃なんかの映像が打

ち出されてくる。数多くのレアモンが次々と吹き飛ばされていく。

シグナム「一体誰がこんな無謀な事を……まさか！」

シグナムはある人物に気が付く。

それは、魔力を持たなくても鬼神の如くの強さを持った伝説の『紅夜叉』と『白夜叉』の存在であった。

銀時「てえやあああああああああああ……!!!!」

剣心「龍巻閃……!!」

銀時は木刀をレアモンに向けて何度も大きく振り、次々とレアモンのような触手を真つ二つに斬る。剣心も回転剣舞である龍巻閃をつかってレアモンの触手を吹き飛ばす。

銀時「はいイイイ！次イイイ……!!」

剣心「土龍閃……!!」

銀時は首が飛ばされたえいりあんの頭を踏み台としてレアモンの中に飛び込みながら、さらに木刀を振るった。

レアモンの首は次々と斬っていく。

そして土龍線の土砂に巻き込まれレアモンが次々と引き飛ばされていく

桂「おおオオオオオオオオオオオオオオオ……!!!!」

桂も銀時や剣心にも劣らない剣技を炸裂させ、レアモンを真つ二つ

に両断した。

神樂

!!

「おりゃああああああああああああああああ！！！！」

「はああああああああああああああああ！！！！！」

綾子とハヤテも神楽に負けず劣らずの怪力でレアモン達を殴り飛ばしたり蹴り飛ばしたりしている。

「シャナハアアアアア！！！！！」

シヤナも炎の刀でセイバーも不可視の剣で次々とレアモンの頭や胴体を切り裂いていく。

どちらも銀時、剣心に負けないほどの腕と神速の速さによる見事な剣捌きを見せる。まるで美しい舞でも見ているかのようにだった。

ヤ
三

ヤミも変身能力で腕を剣に変えレアモンを切り裂いていく。髪の毛トランスを槍にも変えてレアモンの大群を貫く。まさに死角なしといった感じである。

ヴィル「纏めて排除するであります」

ヴィルヘルミナはものすごい数のリボンを使ってレアモン達を縛り上げて吹き飛ばしたりリボンを鋭利に尖らせて何十体ものレアモンを貫いた。そして大量の包帯でドリルのように変形させレアモン達を一気に吹き飛ばした。

ブレイド

「行くぞ！内田！！」

照山

「誰が内田じゃあ！！」

ブレイド・照山

『『ワリトルボーイ』！！』

ブレイドと照山も拳に炎を纏わせレアモンの大群を吹き飛ばす。

ブレイド「『カンダタストリング』！！」

続いてブレイドは指先に神様にしか切れないと言われる斬糸を出して、レアモン達を縛り上げる。
ブレイドの能力は『コピー』一度覚えた技ならいつでも使う事が出来るのだ。まあその能力の特性や使い方を完璧にマスターしなければいけないという条件付だが

レアモン『ギャオオ！？』

ブレイド「無駄だ！ その糸は神にしか切れねえ！ 喰らえ“テン

ペストスレッド”！！”

何十万本のカンダストリングを束ね、巨大な塊にして発射する。
岩をも砕くその威力にレアモン達は一気にぶっ飛ばされる。

照山

「今度はこいつだ！！ 俺様の必殺技『ヴァルカンショックイグニ
ション』！！」

今度は巨大な火球を作り出して発射する。

レアモン「ギャアアアッ！！！！」

レアモン達はこんがり丸焦げとなり消滅する。

イヴ「僕も行くぞ！！『ドッペルゲンガー』！！」

イヴも自身の変身能力『ドッペルゲンガー』で腕をドリルに変えた。

イヴ「『デッドリーメールシュトロム』！！」

腕をドリルに変えたイヴ得意の腕の突撃技でレアモン軍団を吹っ飛ばす。

美琴「うっとおしいのよ！！このど三流！！！！」

美琴は体内の強力な電気でレアモン達を纏めてしびれさせたりコインを使った『超電磁砲^{レールガン}』で纏めてレアモン軍団を吹っ飛ばしたり磁力を利用した砂鉄の剣でレアモンを切り裂く。さすがは『電撃姫』の異名を持つ少女である。

エリザベス

『うおりゃあああ!!』

そうかかれたボードを振り回してエリザベスもレアモンを粉碎し、時には口からキャノン砲を出して攻撃し、数多くのレアモンを吹飛ばす。

アリア「遅い!!」

アリアはすばやく銃を抜いて2体のレアモンを打ち抜く。そしてすばやく背中^{カドラ}の2本の日本刀を抜いて2体のレアモンを真つ二つに切り裂く。さすがは「双剣双銃」の異名を持つアリアである。四つの武器を巧みに使いこなしている。

月詠

「後ろがガラ空きじゃ」

レアモンの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。クナイはレアモンの後頭部を貫き、レアモンは破裂する。

接近戦では2つの小刀で素早いスピードで一瞬で2匹のレアモンを斬る。

セツナ

「それじゃあ、私達も行くよ! 未央! 梶!」

セツナは未央と梶と共に走り出す。

未央「んい!」

梶『×領海。(了解)』

セツナは目にもとまらぬ速さで動いた。

セツナ

「行くわよ…… 『デインタードライブ・F・H!!』」
フォックスサウンド

マツハ2で動き、拳で連続攻撃を撃つ。

セツナの能力は『速度』スピード 音速をも超える速さで動くことができる。
レアモンはマツハ2の攻撃にぶつ飛ばされる。

未央は拳を握って腕をぶんぶん回す。

未央「行くぞ〜〜っ!」 『未央ちゃんパンチ』!」

未央の能力『力』パワー は夜兎族をも上回る恐ろしい怪力を扱うことができる。

つまり、未央が繰り出す攻撃は全てが必殺技級の威力である。

レアモンの一匹がものすごいパワーで殴り飛ばされ、その威力に後ろのレアモン達も巻き込まれる。

そして未央はいつも持ち歩いているぬいぐるみを右手に持つ。

未央の持つぬいぐるみは特注で作らせたもので、オリハルコンと呼ばれる地球上どこか宇宙中でも最上位を争う重さと硬さを誇る金属が使われているのだ。

つまり、未央のぬいぐるみは『究極の重さと硬さを持つぬいぐるみ』なのである。

そして、そのぬいぐるみを未央の力で全力で回転する。

後、これは余談だが未央のぬいぐるみは熊のぬいぐるみっぽいが実は兎らしい

未央「『未央ちゃんハリケーン』!!」

レアモン達はぬいぐるみのパワーで作られた竜巻に纏めて吹き飛ばされる。

梶は左腕に装着されているファンが内蔵された特殊なアーマー『ジエットガントレット』を起動させる。

名前は『鉄火巻』らしい。

梶『私も行く。』メイデンリストラクション』』

梶の能力『^{フレグランス}香』は脳や神経に影響を与える特殊な香りを体内で作り出して、体から放出することができる。

そして、ジエットガントレットで香りを狙った所へ放出させる。

デインドライブB・ブラックバードB!!

レアモンA

「ギャオっ!?!」

レアモンB

「ガガガ!?!」

メイデンリストラクションは脳を麻痺させて一時的に体を動かなくさせる香りなのだ。

梶

『続いて『クラウンマリオネット』』

クラウンマリオネットは脳に誤った信号を伝達させて一時的に梶の操り人形にするのだ。

梶

『はい、コサックダンス』

吸ったレアモン達は強制的にコサックダンスをする。

レアモン

「ギャガガ!？」

梶

『あとはセツナと未央に任せる』

梶は基本的、敵を倒す力がないのでセツナと未央に任せるのだ。

セツナ「わかったわ『デインドライブ・F・H』!!」

未央「んい!『未央ちゃんボンバー』!!」

とんでもない連続攻撃にレアモン達は手も足も出ない

ソルヴァ「マグネティックワールド!!」

能力を発動させると同時にソルヴァの表情と性格が凶暴と化す。

マグネティックワールド

ソルヴァのフラグメント『特殊磁界』はソルヴァから半径100m

以内の認識できているモノを何でも吸い寄せ、反発させられる。

ちなみにソルヴァはフラグメントを発動するときに本来の凶暴な性格が現れるのである。そうじゃなくても現れてるけど

ソルヴァ「アンチ反発:『レアモン』!!」

そして、ソルヴァ達の周りに青色の円形の結界が出現して磁力操作の力でレアモンを吹っ飛ばした

セト「次は僕だな」

セトはレアモン達に大剣を向けた。

セト「グラビドン“重力増加”」

レアモンD「がああっ!？」

レアモンH「ギガガ!？」

レアモン達の体に赤と黒が混じったオーラが纏われ、体に掛かる重力が増加される。

セトの能力『重力作成^{グラビトン}』は自分の周囲の任意の1ヶ所の重力を操ることができる。

セト「貴様ら、よく聞け。聖書にはこうある『死神に魅入られた者は最後の足跡がつくことはない。汝の魂がすでにこの世にない証拠だ』!！」

セトは死神の大剣を天に掲げる。

セト「『ジャイルグラビティション』!！」

レアモン達の下の地面が重力によって押し潰され、岩盤がめくれあがり、悪魔の爪のような物で囲われた檻を作り出した。その中でレアモン達を押し潰して上空にふっ飛ばした。レアモン達は無残に落ちて消滅した。

植木『波花!！」

植木も能力を発動させる。この作品の植木の能力はゴミを木に変え

た後に所轄十種類以上の武器や物に変化させて相手を攻撃するという物である。

因みに今植木が発動させた技『波花』は巨大な変幻自在の鞭系の技である

植木「ウオラアアアアアア！！！」

植木はその巨大な鞭を自在に操りレアモン達をなぎ倒す。元々彼自身もかなりの怪力である為それくらいの芸当は容易いのである。この小説では彼は綾子や一方通行と並ぶ学園都市のREVELフットップ3の一人である。

そしてレアモンの一匹が一方通行に殴りかかった所が

一方通行「あ？」

グニャン！！

レアモンX「ギャガ！？」

レアモンの腕がおかしな方向に曲がった。

レアモンは訳が分からず思わずそんな言葉を吐いた。

一方通行「俺に肉弾戦を仕掛けてくるたア…！ テメエら底なしのバカだなあ！ ええ！！ 三下があ！！！！」

そう言うとも一方通行は地面を踏み砕いた。

一方通行の能力は『ベクトル操作』つまりあらゆる物の方向を操る事が出来る。

ちなみに今のは地面のベクトルを操作して床を踏み砕いたのだ。
そして踏み砕かれた床の石つぶてがレアモン達に襲い掛かり纏めて
ズタボロにした。

一方通行「わりいな。ここから先は一方通行だあ！！」

一方通行は風の動きを操作して固めた風圧弾を放つ。その威力は凄まじくまさに暴風が吹き荒れるようだった。そして足元を踏みつけただけで強力な衝撃波が発生しレアモン達を何もさせずに吹き飛ばしてしまう。史上最強の能力者とはよく言ったものである。

ちなみに当麻は『幻想殺し（イマジンプレイカー）』の能力でレアモンの吐き出す

溶解液のようなヘドロを消したりしていた。

『白夜叉』・『狂乱の貴公子』・『夜兎族』・『宇宙生物』・『死神太夫』・『審判者』・『炎髪灼眼の打ち手』・『万丈の仕手』・『金色の闇』・『電撃姫』・『最強最悪の超能力者』・『幻想殺し』などなど驚異的な力を持った異常者集団。まさに超銀魂世界の超戦士のメンバー達の人離れした戦いぶりは、魔導師言えばAランクの強さを誇るレアモン軍団にも圧倒的に勝っていて次々とレアモン軍団をどんどん倒す。

ああ、後新八も戦っていたが

新八「うりゃアアアアアアアアアア！！！！」

レアモンの一体に木刀を振り下ろした。
しかし

ティアナ「す…すごい…！」

エリオ「な…何なんですかあの人達…」

キャラ「魔力を感じないのにとんでもない戦闘をしていますよ…」

鬼神の如き強さで暴れ回るその人間達の姿を見て、ティアナ・エリオ・キャラは思わず口に出す。

ハッキリ言って、フェイト達が到着する前にすでに解決しそうである。

そして、モニターに映し出されている剣心の姿を見てフェイトは…。

フェイト「剣…心…？」

フェイトが口を開いた。

眼をこすってもう一度モニターを良く見ると、間違いなく剣心の姿が映し出されていた。

フェイト「やっぱり剣心と銀時だ！」

ヴィータ「マジかよ！それに、ヤミにシャナ・セイバー・ハヤテ・神楽・桂・エリザベス、ハヤテ、ヴィルヘルミナ、綾子、イヴ、ブ

レイド、セト、ソルヴァ、セツナ、未央、梶達もいるぞ！」
シグナム「やはり剣心と銀時か！」

間違いなく銀時達の姿である事にフェイト・シグナム・ヴィータが驚きだす。

銀時だけでなく神楽、桂、エリザベス、ヤミ、シャナ、セイバー、ハヤテ、ヴィルヘルミナ、綾子、イヴ、ブレイド、セト、ソルヴァ、セツナ、未央、梶の16人の強さはあい変わらずであり、始めてみる月詠・照山・一方通行・植木・アリアの実力も見限りの手練だとフェイト達は思った。

シャマルも銀時達がまさかこの世界に来ていたことに驚きを隠せなかった。

一方のフォワード隊のティアナ・エリオ・キャロの3人は剣心と銀時の名を聞き、驚きを隠せなかった。

ティアナ「ふ…フェイト隊長、剣心と銀時って……まさか、あの武神・坂田銀時と緋村剣心ですか？」

とティアナは質問すると、フェイトは縦に頷く。

エリオ「『ジュエルシード・魔人族事件』と『闇の書・魔人王ゾーグ事件』で、魔法を使わずに剣だけで解決し、さらにはその強さなのは隊長やフェイトさん以上であるSS+級以上に入る剣豪。そして世界を救った英雄で、人々からは『紅夜叉』・『赤い剣聖』・『エース・オブ・レッドサムライ』、『白夜叉』・『白い剣聖』・『エース・オブ・シルバーサムライ』とも呼ばれる伝説の二人の武神」

剣心と銀時の噂を聞かされたことを改めて言い出すエリオ。

キヤロ「魔法を使わずに活躍したって噂は、本当だったんですね」

キヤロは、改めて銀時達が凄い人であると認識した。

そしてこちらは銀時達がいるミッドチルダのビル郡

容赦なく暴れだす銀時達は、疲れ知らずでレアモンを多く倒している。

そして剣心と銀時と桂は次々とレアモンを斬り倒すと、背中を合わせる。

銀時「よお……くたばってねえか、ヅラ・剣心」

桂「ヅラじゃない桂だ。伊達にお前と共に攘夷戦争に生き残ってはいない」

剣心「これくらいどうって事ないでござるよ」

二人は息切れしながらも銀時にそう言う。

ナギ「おーい、お前ら大丈夫か？」

するとスパロウモンに乗ったナギとインデックス、メールバードラモンに乗った山田と護とディスクがいた。

クルス「だから僕は“クルス”ですから……」

クルスが文中に突っ込んだ。

銀時「オイイイ！何でお前らだけそんな所でのんびりしてんだコラ！俺達は必死で戦ってんのに！！」

ナギ「アホか、私達は非戦闘要員だぞ」

インデックス「そうだよ。私達はか弱いんだよ！分かってるの銀時！」

ディスク「そうよ。女の子や何の能力もな一般人に戦えなんて無作法すぎるわよ。銀時」

ナギとインデックスが銀時に怒鳴りディスクはひそかに銀時を罵倒する。

桂「銀時、彼女らに闘えというのは無理があるだろう」

と、桂は息切れしながらも溜息を吐くと、窓側に向く。そこには大量の触手とヘドロで固まられたレアモンの壁と化していた。

桂「あそこに穴を空ける。その隙に中に侵入してレアモンの親玉を潰すぞ。……エリザベス、あれを！！」

エリザベス『了解！』

と書かれたボードでレアモンを次々と粉碎しながら向かってくるエリザベス。

そして口から鋼鉄のスケッチ2つと、いつも桂が持っている爆弾の5倍の大きさを持つ爆弾を出す。

銀時「お前、エリザベスにこんな物騒な物を持たせたのかよ！？」

剣心「危険すぎるでござろう！！」

クルス・護
「はい……」

剣心とナギ、インデックス、ディスク、クルス、護の六人はその光景に啞然としながらそう呟いた。

「シャナ、銀時、ツラ、剣心ここは私達が食い止める！だからお前達は先に行って！」

「ヤミ後は頼みますよ！」

神楽「銀ちゃん、ツラ、剣ちゃん行くヨロシ!!」

美琴「そうよ、早く行って！」

セト「後で手助け料を払ってもらうがな！」

ソルヴァ「そうだぞ！ たつぷりとなあ！」

未央「お兄ちゃん達頑張てね」

イヴ「そうだ！僕は腹が減ってるんだ！早く終わらせて来い！！」

ハヤテ・新八「銀さん、桂さん、剣さん後は頼みます！」

照山「ここは俺達がかしといてやる！」

一方通行「さっさと行けえ」

エリザベス「桂さん！どうかご無事で！！」

梶「ご武運を」

神楽達皆は銀時と桂と剣心にレアモンの親玉討伐をたくし、外にいる有象無象に湧いて出てくるレアモンを次々と倒していく。

銀時「行くぜ、ツラ、剣心！」

剣心「うむ」

桂「ツラじゃない桂だ！」

オ！！！！！！！！
レアモン　「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

銀時と桂と剣心はそれぞれ刀を握って寄生された第3起動高層ビルに侵入して突撃する。

物語が始まって、すぐにド派手なバトルが始まったのであった。

第三訓 大変な事は連続して起こるもの（後書き）

支配者「次回はいよいよスバルとオリジナルパートナーデジモンの登場です！」

銀時「どんな奴なんだよ？」

支配者「次回発表します。それまでお待ち下さいませ」

桂「次回、『原作と違う方がヒロインが強い時もある』活目せよ！
…じゃなかったテイクオフだ」

第四訓 原作と違う方がヒロインが強い時もある（前書き）

支配者「えー、協議の結果…スバルのパートナーデジモンは真王さんの考えてくださった『アオヤシヤモン』に決定いたしました。真王さん大変ありがとございました」

銀時「と言つか…あんま来なかったんだよな……」

支配者「デジモン小説が好きな方も感想書いて欲しいです…私も感想書きますから…どうかお願いします……」

剣心「とりあえず、超リリカル銀魂始まるでござるよ」

第四訓 原作と違う方がヒロインが強い時もある

ミッドチルダ 第3起動高層ビル・10F

突如現れた寄生型レアモン軍団に侵略された第3起動高層ビルの中に侵入する銀時と桂と剣心は、元を立つ為にレアモンの親玉を討伐しに行く。次々と現れるレアモン軍団を次々を斬り倒していきながら3人は上に向かっていく

桂「どけエエエエ!!!!!!」

剣心「はアアアアア!!!!!!」

銀時「小便かけるぞ、このやるオオオオ!!!!!!」

三人の侍の力により、次々とレアモンが斬り倒されていく。

つか、銀さん。小便って言うなや、バッチいな。

まあ……とにかくにも天々との戦いに慣れている3人にとってはデジモンの相手でさえ朝飯前のような物である。

この小説ではデジモンも宇宙生物ですから

眼の前に見えた扉は何やら頑丈に固まっており、さらにはレアモン軍団とミミズのような触手が続々と囲んでいる。

銀時「ちい……まだいやがるか!」

剣心「本当に次から次へと湧いてくるでござるな……」

桂「だが、先ほどまでとは違うあの守りの塊から考えれば間違いないくあそこに親玉がいるはずだ!一気に行くぞ!」

銀時と桂は刀を構えて強行突破しようとするが、突如3人の後ろから走っているかの様な足音が二つ聞こえる。

『『!?!』』

3人は後ろを向くと、1人の少女と一匹の鎧を着た生き物が居合の構えをしながら刀を持って素早く駆けつける。

???「はあああああああああああ!?!?!」

???「うおおおおおおおおお!?!?!」

少女と一匹の生き物はレアモン軍団に飛び込むと、神速の速さで抜刀して、そこから神速居合剣技を炸裂させて次々とレアモン軍団を切り倒す。

さらには刹那の瞬間移動で遠く離れたレアモンにも一瞬に近づいて神速に斬りまくる。

???『閃光斬!』

少女の隣にいる生き物がそう叫ぶと剣の先から刃の閃光を縦横無尽に飛ばしてレアモン軍団を切り裂いた。

???「天魔御剣流 天之太刀 翼龍閃!」

少女も剣を振るい技を繰り出す。

レアモン達の懷に飛び込み瞬間移動の如き速さで全く同時に鞘と刀の攻撃を同時に繰り出す。まるで龍の羽が羽ばたくかのようにレアモン達を蹴散らした。

その二人の剣速はまさに神速と言う名に恥じない速さであり、真選組一番隊隊長であり真選組最強と言われる沖田総悟、斉藤一や名家・柳生家の次期当主である柳生九兵衛や妹のヒナギクに匹敵する程の華麗なる剣技を炸裂させ、1人と一匹で全てのレアモン軍団を全滅させた。

銀時「な……2人でレアモン共を全て斬りやがった！？しかもメツ
チャ速エー！」

剣心「ああ…あれは間違いなく神速剣術かそれに近い動きでござる
な……（というより今のあの娘の技何か“飛天御剣流”に似た感じ
がしたでござるな…あれは……）」

桂「大した剣術だ、まさに侍の魂を感じ取らせる戦いぶり…この世
界にも侍が存在したか、しかも二人も！！」

予想外の事に驚く銀時。

今の少女の技が“飛天御剣流”に似た感じがしたと見る剣心。

そして先ほどの剣技に感動する桂。

そして、少女と一匹は刀を鞘に納めて後ろを振り向く。

???「やつぱりまだ逃げ遅れがいたんだ」

???「そうみてえだな…。おい大丈夫か？」

銀時「あ…ああ、大丈夫だけど……」

銀時は二人に対して力なく答えた。

???「まあ、でも良かった、無事に見つかつ……て……？」

???「ん？どうした？」

少女は銀時と剣心の顔を見て啞然とする。

隣にいる生き物が話しかけても答えない。

少女の容姿は青い髪でショートカットのボーイッシュな少女で、頭
に白い鉢巻をかけていて、何やら白いロングコートを着ていて緑色
の瞳をしている。

???「まさか……銀時さんと剣心さん！？」

少女が、銀時と剣心の名を言い出すと、銀時と剣心は思わず驚きだす。

銀時「え？お前、何で俺達の名前を？」

剣心「おろ？どこかでお会いしたでござるか？」

銀時が少女に尋ねると、少女は嬉しそうに銀時と剣心に抱き抱える。

???「やつぱり銀時さんと剣心さんだ〜!!」

銀時「のあ〜!!ちょ……ちよつとまてえ〜!!??」

剣心「何でお主が拙者達の名前を知ってるんでござるかあああ〜
〜!!??/~/」

大胆に抱かれて慌ててしまう銀時と剣心。彼らの胸元には少女の大きな胸が押しかけられてしまい、動揺を隠せない。

それを見た桂はニヤニヤと笑い出す。

こいつ、絶対に後でぶっ飛ばす!!と銀時だけでなく剣心までもその時そう思った。

しかし、少女のほうを良く見ると、どこかで見たような感じで見る。

銀時「あれ？ちよつと待って……何か見覚えがあんだけどオ
こかで会ったっけ？」

剣心「う〜ん……どこかで見たような気がするんでござるか…

…」

二人は首を傾げる。

すると隣にいた生き物が叫びだした。

???「おい“スバル”!!なんなんだよこいつらは!!?」

銀時・剣心「…え？“スバル”？」

銀時と剣心は聞いた事のあるその名前を聞いて少し呆気にとられた顔をする。

そして少女は銀時と剣心に名を言い出す。

スバル「はい！お久し振りです、銀時さん！剣心さん！私です、スバル・ナカジマです！」

少女がスバル・ナカジマと名乗ると……銀時と剣心はしばらく唖然とする中、我に返ってスバルの名を叫ぶ。

銀時「…え……嘘……スバルウウウ！？」

剣心「ス…スバル殿！？」

銀時の大声に、スバルはビクツと体を震わせた。
剣心も驚いている。

スバル「え…あ…はい」

マジでかアアア！？

銀時は頭を抱えて、今は真っ暗なビル内を仰ぐ。
剣心も唖然とした顔をしている。

銀時（え…いや、さっき会ったスバルは、まだ小学生位じゃなかったんじゃない？てえええ！？）

剣心（あの時見たスバル殿はナギ殿よりも小さかったはず…。どうなってるんでござるか？）

何がなんだか分からない銀時と剣心に、スバルは嬉しそうに声をか

ける。

スバル「本当にお久し振りです。まさかここで4年ぶりの再会が
来て私、感激です！」

銀時・剣心『4年ぶり？』

スバルの『4年ぶり』っていう台詞に銀時と剣心はあの光景がなん
なのかつた。

銀時（オイイイ！！まさかあれは4年前の光景だったの！？え…
銀さんと剣心とナギだけタイムスリップしちゃってたの！？）

つと銀時は慌てる中、原因は装置の制御不能により、銀時と剣心と
ナギだけ4年前の世界に飛ばされ、そして何故か予想外にすぐに神
楽達の場所に飛ばされたのである。

剣心（何故、拙者達だけが…）

剣心は何故全員ではなく自分と銀時とナギだけがそんなことになっ
たのかと分析する。

するとスバルは桂を見ると、驚きだしてはしゃぎだす。

桂「ああー！！『狂乱の貴公子』桂小太郎さんだ！」

つと尊敬するような叫びにスバルは桂を見ると…

桂「む…俺の事も知っているのか」

桂も、この世界では有名な存在である。

桂小太郎

『闇の書・ゾーグ事件』で銀時や剣心と同じく魔法を使わずに剣と爆弾で解決して活躍した侍。

かなりのクールボケで、しかも人妻好きと言うかなり変なところが印象的に大きい。その強さは銀時や剣心に引けをとらない強さを持つており、剣の腕もかなり高く、爆弾の使い手でもある。

しかも『んまい棒コーン・ポタージュ混捕駄呪』や『んまい棒サラミ鎖羅魅』などデバイスではない特殊な道具を使いこなす戦いぶり。は、「狂乱の貴公子」・または「狂乱の騎士」とも呼ばれる。

スバル「はい、何せあの時空管理局遺失物管理部機動六課のはやて課長が最も信頼する、ヴィータさん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさんと同じ、5人目の騎士とも言われた伝説の侍と聞いています！それに他にも“トランス”と言う変身能力を使って戦う“金色の闇”と呼ばれるヤミさんや桂さんと同じく剣と爆弾でたたかったと呼ばれるお姉さんの雪路さんの事も有名です！」

桂「はやて…八神殿の事か！？」

剣心「スバル殿…まさか、この世界にフェイト殿達がいると言うことになるのでござるか！？」

スバルがはやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの名を言い出すと、銀時と桂はこの世界は間違いなくフェイト達の世界であると確信した。

そしてスバルは2人の質問に正直に答える。

スバル「はい…フェイトさんの事は知っていますけど？」

つとスバルは答えだすと、3人は間違いなくこの世界がフェイト達の世界であると確信する。
すると

???「おい！」

剣心「ん？」

スバルの隣にいた鎧を着た生き物が話しかけてきた。

???「スバル！俺を無視して何さつきから盛り上がってんだよ！つか誰だこいつら！」

スバル「ああ、ごめんごめん“アオヤシャモン”別に無視してたわけじゃないんだよ」

スバルはアオヤシャモンと呼ばれた鎧をつけた生き物に謝る。

銀時「アオヤシャモン？」

剣心「さつきから気になってたんでござるがスバル殿。そちらは？」

剣心がスバルにアオヤシャモンについて尋ねた。

スバル「ああ、この子ですか？あの時ナギさんから貰った卵から生まれたんですよ」

銀時「ふゝん、そうなんだ…って、ええええええー！！！」

銀時はまたしても驚いた。

銀時「えええ！？何！？つー事はこいつもデジモンな訳！？」

スバル「は、はい…そうですね…」

スバルはオドオドしながら銀時にこう答えた。

桂「ちよつと待て銀時、何故スバル殿がデジモンを？」

剣心「ああ、実はでござるな…」

剣心は桂に訳を話した。

ついでにスバルもアオヤシャモンに銀時達の事を話した。

桂「ナギ殿もメチャクチャな事をするな…」

アオヤシャモン「こいつらがお前が言つてた命の恩人なのか？こんな死んだ魚みたいな目してるやつとこんな飄々とした女みたいなのがねえ…」

銀時「うるせえな。いざと言うときはきらめくから良いんだよコラ」
剣心「別に飄々とはしとらんでござるが…」

アオヤシャモンのこの言葉に銀時は軽く文句を言い、剣心は苦笑いをした。

桂「何はともあれ、今はこの状況を何とかしないと。スバル殿にアオヤシャモン殿、お主達はこのビルに侵略している生物が寄生型のデジモンである事を知っているか？」

スバル「デ…デジモン！？この怪物達がですか！？」

アオヤシャモン「こいつらが俺と同じデジモン！？嘘だろおい！！」

この奇妙な異種生命体の正体がアオヤシャモンと同じデジモン、しかも寄生型であるとは驚く。銀時と桂と剣心はスバルとアオヤシャモンにこのデジモンの事を話し出す。

スバル「じゃあ、このデジモン達は元々は銀時さんの世界にいた生命体なんですか!？」

とりあえずここにいるレアモン達が銀時達の世界にいる生き物達である事をスバル達に話す銀時達。

おそらくこのレアモン達はこのビルの電力エネルギーと何か特殊な力を寄生して拡大した姿であると言う事にした。

しかしこんな風になってしまった原因も何故レアモン軍団がこのビルに規制しているのかも全く不明だという事も伝えた。だが恐らくコイツラに指示している親玉を倒せば何とかなるのではないかと言う事も伝えた。

銀時「とにかく、コイツラの親玉を探し出して何とか倒しちまえばコイツラもおとなしくなると思うんだけどよ」

剣心「まだ何の確証もないんでござるが他に方法も思いつかんのでござるよ」

桂「スバル殿、アオヤシャモン殿、会ったばかりですまないが協力を頼む。早くしないとこのビルだけでなくこの町自体がレアモンに寄生されて取り返しのつかない事になってしまう!」

桂はスバルに強力を頼む。

先ほどの剣技からすれば、スバルとアオヤシャモンも相当な実力の持ち主であると確信し、銀時と剣心もスバルとアオヤシャモンの剣の腕はもしかすれば、シグナムのわずかに上に行く強さを持っているではないかと考える。

しかし、よくよく考えればスバルも巻き込まれた側である事は承知の上である。

だが、スバルとアオヤシャモンは・・・

スバル「分かりました。私も銀時さんと剣心さんと桂さんの力になりますので、親玉討伐にご協力します！」

アオヤシャモン「元々こいつらを何とかするつもりで来たんだ。頼まれるまでもねえよ！」

つとスバルとアオヤシャモンは助太刀の要求を受け入れる。

桂「おお、スバル殿にアオヤシャモン殿かたじけない！」

剣心「すまんでござるな」

銀時「じゃ、派手に暴れてやろうぜ」

5人は協力し合って、レアモンの親玉を探して倒すことを決意すると、銀時はスバルの姿を見てある人物に似ていると考える。

銀時「ていうかスバル。お前のその格好と存在感……なんか「スト
●●○・フー」っとか言うゲームの、あの「サ●○」に似て
ねエ？」

スバル「誰ですか、その人!？」

アオヤシャモン「あゝ、お前もそう思う?俺も薄々そうなんじゃね
えかと……」

スバル「って!何でアオヤシャモンがその人の事知ってるのおおお
く!？」

知らない人物に似ているとスバルは驚きだす。

そしてなぜか銀時の言った人物の事を知っているアオヤシャモンに
対してスバルはさらに驚く

剣心「スバル殿…銀時の言う事は気にしないほうが言いと思うでござ
るよ…うん」

スバル「いや、気になりますよ……!!」

スバルのツツコミを尻目に、銀時は扉を蹴りだして豪快に開けると、その目の前には無数の触手によって繭のように固まっているのが見えた。そしてその周りには大量のレアモン達とその繭を護るように立ち塞がっていた。

スバル「な……なんですかあれは!？」

アオヤシャモン「うえっ……気色悪……」

スバルとアオヤシャモンはドロドロ繭の塊のような触手に驚きだすと、桂はこう確信する。

桂「親玉ではなさそうだが、おそらくあれはこの寄生型レアモンの力の源と見た!あれを何とかすればレアモンの力は弱まるかも知れん」

桂がそう言つと、銀時は木刀を剣心は逆刃刀握つて駆けつける。

銀時「じゃ、その力の源も……斬つてやろうかアアア!」

剣心「この逆刃刀は命ある生き物でないものは容赦なく斬り捨てる!!」

レアモン『ギャオオオオオ!!!!』

二人が飛び出すと同時にレアモン軍団が二人に飛び掛つてきた。

銀時「どきやがれえええええ!!」

剣心「龍巻閃!!」

銀時と剣心は木刀と逆刃刀を振ってレアモン達を一気に吹き飛ばした。

アオヤシャモン「スッ、スゲ…」

アオヤシャモンはあっさりとレアモン軍団を倒した銀時と剣心の力に驚いた。

そして銀時と剣心はヘドロの繭の塊である触手に飛びつき、木刀と逆刃刀を大きく振ると、繭の塊である触手は綺麗に斬られ、その中から1人の白い魔導服を着た女性が現れて、剣心の前に落ちてくる。

剣心「お…女子!？」

剣心は慌てて落ちてくる女性をキャッチしてお姫様抱っこして着地する。

桂「まさか、力の源が1人の女性魔導士であつたとは・・・」

それは相当の魔力の持ち主であると桂は考えると、スバルはどこかで見たような顔に考える。

スバル「この人…どこかで見たような……」

銀時「えっ!？」

アオヤシャモン「マジかスバル!」

そして剣心は抱き抱えている女性が無事なのか声をかける。

剣心「お主大丈夫か!？しっかりするでござる!!」

???「……う……う……?」

女性はゆっくりと眼を開けると、剣心の姿が眼に映ると…その女性

…なのは少し驚いたような表情で銀時の名を言い出す。

なのは「剣心…さん？」

見知らない女性に名を呼ばれて、剣心はポカンとしてる。

剣心「おろ…どちら様でござるか？」

と、剣心は目の前の女性が、剣心も良く知っている人物であると気付かずに言った。

だが、ジッと見ていると何か気になる。

剣心「おろ？ちょっと待つでござる…何か見覚えがあるような…どこかで会ったことがあるでござるか？」

首を傾げる。

しかし、女性の持つているデバイスを良く見ると、ボロボロに壊れかけていてもはつきりと分かる『レイジングハート』である。そして剣心は気付いた。

剣心「お主…まさか…なのは殿でござるか！？」

驚きながら剣心は言った。

なのは「…ああ、やっぱり剣心さんだ！」

なのはも剣心である事にはつきりとわかって剣心の名を言いだす。

桂「なのは殿だと！？」

銀時「えっ！？ちよっ…マジでか！？」

剣心と隣にいた銀時と桂は、マジマジとなのはを見つめた。

なのは「私、１９歳になりました！」

『１９！！？』

銀時と桂と剣心は更に驚いた。

確かに今のなのはは、大人だ。元々可愛かったが、大きくなって大人の魅力的なモノもあつて綺麗だ。

銀時「あらら、すっかり大きくなっちゃって……………ってちょっと待てエエエエー!!」

剣心「どういう事でござるか！？訳が分からぬ!!」

急に立ち上がって、剣心と隣にいる銀時は叫んだ。
後ろにいる桂とスバルとアオヤシャモンも驚いて、体を震わせた。

銀時「おかしい！絶対おかしい!!だって…お前この前まで、まだ小学生…………えええっ！？何これ？どうなつてんだ!？」

剣心「そうでござるよ！いくらなんでもこれは！」

目の前の事が信じられず、銀時と剣心は混乱した。

なのは「落ち着いてください、剣心さんに銀さん!…………それに、まさか剣心さんにお姫様抱っこされるとは思わなかったですノノノ」
剣心「え？」

なのはの言葉にピタリと混乱を止める剣心は良く見ると、自分は今なのはにお姫様抱っこをしている事に気づく。

剣心「おわあああああ!!」

つと剣心は叫んでなのはを話すと、土下座する。

剣心「済まぬでござるなのは殿!別にわざとではないでござるよ!」

銀時「やつちまったなあ…剣心♪」

剣心「黙れ!!(怒)」

つと何度も謝る剣心に銀時は茶化したような言葉をかける。思わず剣心はキヤラ崩壊したかのように銀時に怒鳴った、なのはも慌てながらも剣心に言い出す。

なのは「え…いや、大丈夫だよ!剣さんだってワザとじゃないって事は分かっているし」

つと、なのは自身は気にしていないが…やはりお姫様抱っこされる事が凄く恥ずかしかったようである。

スバルはなのはの存在である事を知って驚きだす。

スバル(え……なのはさんってあの『機動六課』の隊長の1人であり、『エースオブエース』の異名を持っているあの高町なのはさん?)

アオヤシャモン(こんな所でエース・オブ・エースとご対面かよ…)

まさかの人物に会ったスバルとアオヤシャモンは内心に驚き出している。

そして桂も一緒であった。

桂「高町殿…いつの間にそこまで……」

なのは「桂さんもお久し振りです」

桂に気が付くと、なのはは親しそうに桂に挨拶する。

桂「うーむ、随分と大きくなったな。おこづかいに五十円あげよう」
なのは「あ…いえ、結構です」

なのはは、やんわりと断った。

そして、隣にいるスバルとアオヤシャモンに気が付く。

なのは「えっ…と…君達は？」

つとなのははスバルとアオヤシャモンに名を訪ねると、スバルとアオヤシャモンは名乗りだす。

スバル「あ…私、スバル・ナカジマと言います」

アオヤシャモン「俺はアオヤシャモン。スバルのパートナーだ」

名のりだと、なのはは驚きだす。

なのは「え…スバル・ナカジマって…まさか時空管理局陸士108
部隊長、ゲンヤ・ナカジマさんの娘!？」

なのははスバルにそう聞き出す。

実はスバルには、魔導士達でもちよつと有名な新人魔導士。

4年前の事件でスバルは銀時に助けられ、その後父であるゲンヤに
銀時の事存在を知らされた。

魔法が使えない代わりに剣だけで鬼神の如くの強さを持った武神で
あることを聞かされる。

銀時と剣心の存在を知ったスバルは、その一週間後に剣術を習い始める。

銀時のように力のある剣技を身に付けられない代わりに、自分なりの剣技を身につける事を決意する。

それは剣心の使う流派、飛天御剣流の剣技を自分なりにアレンジして生み出したとされる魔法剣技だという噂だ。

銀時と剣心のように誰かを護れる武神になりたいと言う一心で、人一倍・・・いや人十倍的努力で、魔法に匹敵するような神速の剣技を得た。

他にも、姉のギンガも、もしもの為に武術を学んでいた。

その翌年に時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入學すると、魔導士としては良い線を行くという程度だが、鍛え上げられたその神速の剣技は誰よりも注目を浴び、さらには魔法と剣技を合わせた『魔法剣技』は、シグナムに近い強さであると評価され、優秀な魔導士とも評価されていた。

さらにスバルは剣術を中心に鍛え上げられている為、魔法をあんまり使わないのにも関わらず、理解不能的に、自然に魔力が上がって行く。

その為、スバルの魔力は自分自身でも予想外の事にランクは陸戦A A A+となっている。

数多くの難関なミッションをも持ち前の剣技、体術、そして魔法を重ね供え、将来は父の後を継ぐ時空管理局陸士108部隊長になるであろうと上からも期待されまくりだった。

だが、スバルの魔法を頼らず剣術のみを鍛錬する行為は、他の訓練生と訓練教師には最悪な評判であり、独自の行動には好きになれなかったのである。

その為、スバルは訓練校達に卒業と言う名で無理やり訓練校を追いつけられた。

しかもわずか1年で。

訓練校卒業後にスバルは『大切な人を守る為にもっと修行を重ねて

強くなりたいたい』つと言う理由で1人旅を出た。

最初は姉のギンガに反対されたが、銀時のような心強い人間になりたいと言う理由で父・ゲンヤは納得して許した。

そして、スバルのパートナーと称されるアオヤシャモンも新人の持つ使いまでは間違いなくナンバーワンの実力を持つ証される強さを持つていた。スバルと変わらない神速剣技を持ち、その実力は注目されていたが、魔力資質が低いという事で実力がありながらも嫌われていたらしい。一応彼がデジモンなのだが、どういうわけか魔力をもっていた為に使い魔ということになっているようだ。まあ、デジモンは少なからず魔力がある用ですから……

銀時「…え…スバルって、俺達を目的にそれほどスゲー成績を残したの？やべえよ、なんかメツチャ照れるんだけど？どうすればいいんだ、剣心、ツラ」

剣心「拙者に言われても…大体拙者だつてとまどってるんでござる」
桂「ツラじゃない桂だ。…しかし、魔導士とは思えないやり方だが、スバル殿のやり方はまさに侍の魂を持った魔導士とも言えよう。君のその信念に感動した。そんなスバル殿とアオヤシャモン殿には攘夷志士タオルを上げよう」

つと桂は何処から出したのか、攘夷と書かれたタオルをスバルとアオヤシャモンに渡す。

スバル「あ…ありがとうございます」

アオヤシャモン「一応貰つといてやるよ」

苦笑しながらも、スバルは攘夷志士タオルを受け取る。

アオヤシャモンも無愛想に受け取った。

スバル「ミッドチルダ北部第四陸士訓練校の卒業後に、どこかで修

行していると聞いたから、ギンガさんは心配していたよ。何でスバルがここに？」

姿を消したはずのスバルがどうしてこの第3起動高層ビルにいるのか、なのは質問する。

スバル「ああ、それは…」

スバルが理由を言いかけた時

アオヤシャモン「実はスバルの奴がよオ、ここに美味しいアイスクリーム屋があるって言ってるよ。それを買いにワザワザ山下りてここに来たら…なんか閉店しているらしくてよ。諦めて再び山に戻ろうと思ったんだけどな、そしたら突然数多くのガジェットって言うガラクタ軍団に襲われて、何とか全部倒して安心して逃げようとしたら…その次に変な異種生命体に襲われて…もしかしたら誰かが逃げ遅れたかなって言ってよ、面倒くせえけどここまで倒しながら上に向かってたら…そこでお前らに会ったって訳だ」

アオヤシャモンの説明を聞きアイスクリーム屋に通うためにこのビルに入ったと言うスバルの単純な理由で、銀時、桂、剣心、なのはは呆れる。そして、スバルは顔を恥ずかしそうに赤くした。

スバル「それより…まさか銀時さんと剣心さんや桂さんだけじゃなく、あの高町なのはさんとこうして会えるなんて…変な事件に巻き込まれて損したと思えば、凄く得した感じです」

アオヤシャモン「俺は損しかしてねえよ」

スバルの言葉にアオヤシャモンはツツコンだ。因みになのはの存在もスバルは知っている。

時空管理局武装隊、『スターズ分隊』隊長であり、魔導師ランク・空戦S+の強さを持つ『エースオブエース』、『誰もが認める無敵のエース』と呼ばれる現段階の最強の魔導士であるからだ。

銀時「まあ、何はともあれ…このビル内にいるのは俺たち六人だけだ」

銀時は現段階にビルにいるのが銀時達六人だけであると確信する。

桂「だが油断は出来ない。一刻も早く寄生型レアモンの親玉を倒さない限り安心は出来ぬ」

なのは「ふえ…レアモンって…？」

剣心「“デジモン”の事でござるよ」

なのは「ふえっ！？デジモンって確かナギちゃんが連れてた…！」

『デジモン』と言う言葉に啞然と驚くなのは。

この奇妙な異種生命体の正体を銀時達はなのはに説明すると、信じられないかのように驚くのはだが、銀時の世界にある天人^{あまんと}などの宇宙生命体の事を考えれば納得が出来る。

なのは「じゃあ、その寄生型のデジモンの親玉を倒せば何とかなるんだね」

つと、なのはは理解すると自分も親玉退治を手伝う事を決意する。

銀時「おうよ、とりあえず…この気色悪い生き物の親玉をぶっ倒してさっさとここを出よ——」

ドカアアアアアアアアアアアアン！！！！

「!？」

突如、前の壁が大爆発して6人は驚きだすと、そこに

???「オレノエサ……カッテニモツテイクナ……」

普通のレアモンの十倍以上大きさを誇る超巨大なレアモンの親玉が不気味な声をはべらしながら壁を破壊して現れた。

第四訓 原作と違う方がヒロインが強い時もある（後書き）

支配者「えゝ… 次回はレアモンの親玉の親玉との対決です」

銀時「お前なんか元気ねえな」

支配者「いろいろあるんですよ」

スバル「次回、『人間じゃなくても侍は強いのもいる』テイクオフです」

第五訓 人間じゃなくても侍は強いのもいる（前書き）

フエイト「ねえ・・・この小説もう5話突破したというのに、どうしてまだ剣心に会えないの？」

シグナム「我々に何か恨みがあるのか、支配者？」

2人はデバイスを構えだすと、後ろから怒りの化身が見えるかのような雰囲気を表す。

支配者「いや・・・これにはわけがありまして・・・そのう・・・」

フエイト・シグナム「問答無用！」

支配者「ぎゃあああああああああ！！！！！」

なのは「あ・・・あは・・・『超リリカル銀魂 S t r i k e r S』 始まります。」

第五訓 人間じゃなくても侍は強いのもいる

銀時と桂と剣心は、突如現れた謎の寄生型レアモン軍団に侵略された第3起動高層ビルに侵略し、一気に原因と見られるレアモンの親玉の討伐へと向かうのだが、そこで新人魔導士少女であり、銀時と剣心に憧れ侍の魂を持ったスバル・ナカジマとナギがわたしたデジタマから生まれたデジモン・アオヤシャモン、そして10年後の高町なのはと合流する。

そんな時、突如として現れたのが超巨大なレアモンの親玉であった。大きさは普通のレアモンの十倍以上、その上他のレアモンとは比べようもないほどの異形な姿をしていた。ギラギラとした牙が生えた口を体全体に現し、全身からドロドロの触手を生やしている。その上その触手にまで顔が出ている。まるであの時ターミナルで戦ったエイリアンの様である。

銀時「おいおい、随分と派手に登場すると思いきや、ようやくラスボス登場って奴がこのヤロー」

つと銀時は言いながら木刀を構えると、なのはは来るしながらもゆっくりと立ち上がりだす。

なのは「この親玉を倒せば…全てが解決するんだね。と言うか人を餌扱いしないで欲しいんだけど…」

なのははレイジングハートを構えるが、相当魔力を吸収されたため、残りの魔力はかなり少ない。だが餌扱いされた事にだけは怒った。

なのは「今の私じゃ、役立たずかもしれないけど…せめて…銀さん達のサポートぐらいは……」

せめて、銀時達の援護でもしようとなのはも戦おうとするが、なのはの弱弱い声に、銀時は振り向かずになのはに話しかける。

銀時「馬鹿言つてんじゃねえよ…立てるのがやっとなのお前が無茶しても、むしろ足でまといなだけじゃねえか」

剣心「無理をしてもいい事はないでござるよ。なのは殿」
なのは「でも…」

分かつてても、見過ごす事ができない。

それでもなのはの協力を拒否した銀時と剣心。

桂もスバルもアオヤシャモンも、今のなのはに戦わせたら命の危険性があると確信し、銀時と剣心の意見に賛成する。

剣心「お主が死んでしまったら、フェイト殿達が悲しむでござろう？」
なのは「!？」

自分が死んだら、フェイト達はどれくらい悲しむのか想像しなかったなのはは、自分が今しようとしている事は無謀な自殺行為であると分かった。

銀時「まあ見とけ」

剣心「拙者達なら心配いらんでござるよ」

銀時は木刀を構え剣心も逆刃刀を構える。桂とスバルとアオヤシャモンも鞘から刀を抜く。

銀時「美しく死を覚悟をする暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねえか」

剣心「その通りでござるよ。無駄死にするくらいなら最後まで足掻き通そう」

銀時と剣心は後ろにいるなのはにそう言うと、無数にある巨大な触手をはべらせるレアモンの親玉を睨みつける。

すると、なのはの眼には一瞬だけ、銀時と剣心の姿の衣装が全く違う感じに見えた。

白と赤の侍の衣装を着ており、銀時は木刀ではなく刀を握っている。剣心も逆刃刀ではなく普通の刀を持っている。

だが、そう見えたのは一瞬だけであり、眼をこすっても銀時と剣心の姿がいつもどおりに戻った。

レアモン「オイ」

銀時「あん？」

レアモン「オレノコト…ムシシテ…イツマデハナシテル……」

レアモンは自分を無視してずっと話をしている銀時達に対してかなりの怒りを向けている。

銀時「何だ？無視されて怒ってんのか？ああん？」

銀時もレアモンの親玉を睨む。

桂「こやつ、人の言葉が分かるのか？」

アオヤシャモン「こんな見た目で人の言葉が分かるのかよ」

桂とアオヤシャモンはそう言う。目の前にいるレアモンの親玉は唯の化け物にしか見えない。それなのに片言とはいえレアモンの親玉

は人の言葉を発しているのだ。

レアモン「オマエラナンダ…？コノセカイノヤツラデオレニタイコ
ウデキルノハ“キドウロツカ”ノヤツラダケノハズ…オマエラナン
カシラナイ…ソレニ…ナンデ“スバル・ナカジマ”ガデジモンヲ
ツレテル…？」

スバル「えっ！？何で私の名前を！？」

スバルは驚いた。目の前にいるレアモンの親玉はスバルの事を知っているようだ。

銀時「おい、何でデメエがスバルの事を知ってやがるんだ？」

レアモン「シツモンシテルノオレダ…。オレノシツモンニコタエロ
……」

レアモンは銀時の言葉を無視して再び聞いてくる。

剣心「拙者達にもこの世界の事はよく分からぬのでござるよ。何せ
さつきついたばかりなのでな。スバル殿が何故デジモンを連れてい
るのかは知らぬよ」

剣心はレアモンの質問にそう答える。あまり情報を与えずでは何か危険な感じがした剣心は重要な部分は抜かして答えた。

レアモン「ソウカ…マイイ…ベツニモンダイナイ……」

剣心「今度はこちらの質問に答えてもらおう。お主の人の言葉が分かるのならば自分の意思もちゃんと持っているのでござる。何故こんな事をしている？何が目的だ？」

剣心はレアモンにこう聞いてみる。聞いた所でレアモンが素直に答

えるとは思えないがレアモンがちゃんと意思を持っているのを見て少しでも情報が欲しいと思ったからだ。

レアモン「オレノモクテキハ…“ミッドチルダ”ヲホロボスコト…

…」

全「なっ!?!」

全員がレアモンの言葉を聞いて驚いた。なんとレアモンの目的はミッドチルダを滅ぼす事だと言っただ。

レアモン「ソノタメニ…マリオクノツヨイヤツ…“タカマチ・ナノハ”ノマリヨクリヨウシタ…」

なのは「どうして!?!どうして“ミッドチルダ”を滅ぼそうとしたりなんかするの!?!何で…なんで!?!」

レアモン「オマエラニハ…カンケイナイ……。オレ…ミッドチルダ…ホロボス……“ジクウカンリキョク”ホロボス……」

レアモンはなのはの言葉を無視してそう答える。そして銀時達を数秒間睨み付けた後

レアモン「オマエタチ…ジャマ…オマエタチ…クロス!!」

レアモンはそう言うのと瞬間的に体から大量のレアモンを生み出した。

銀時「なっ!あいつ手下を生み出しやがった!!」

銀時は大量のレアモンを生み出したレアモンに対して驚きを隠せなかった。

剣心「奴を如何にかせねばきりがないでござるな……」

剣心は逆刃刀を構える。

銀時「行くぜ、剣心、ヅラ、スバル」

剣心「うむ！」

スバル「はい！」

桂「ヅラじゃない…桂だ」

アオヤシャモン「おい！俺もいるぞ！」

五人は戦闘態勢に入り、刀を構える。

スバルは蒼い日本刀型のデバイスを見る。

その日本刀型のデバイスには鍔が無く、その部分に水色の宝玉が埋まっております、刀身は蒼く輝いている。

スバル「行くよ、ティルヴィングエア！アオヤシャモン！」

アオヤシャモン「おうよ！」

ティルヴィングエア『Yes , my master』

——この時、私は初めて知った。私とフェイトちゃん達が尊敬し、愛した2人の存在を。

銀時と剣心の後姿をみて、なのはは確信する。

レアモン「イケー！」

レアモンズ『グオオオオオオオオオ！！』

レアモンの親玉の号令に応じてレアモン軍団が一斉に襲い掛かる。

——その二人の男、銀色と紅色の髪に血を浴びー

銀時・剣心『うおおおおおおおおおおおおおおお！
！』

桂・アオヤシャモン『おおおおおおおおおおお
おおお！！』

スバル「はあああああああああああああ！！」

銀時・剣心・桂・スバル・アオヤシャモンの5人は刀を構えて一斉に突撃すると、先頭に銀時と剣心がレアモンの大群に飛び掛り・・・

銀時「てやあああああああああああああ！！」

剣心「土龍閃！！」

銀時は嵐のような剣技で次々とレアモンを間っ二つに斬る。剣心は土龍選で起こす土砂波でレアモンを一気にふつとばす。その銀髪に斬ったレアモンの緑色の血を浴びる。紅色の赤い髪にもレアモンの緑色の血が付着する

――戦場を狩るその姿は正しく――

銀時「うおおおおおおおおおおお！！」

剣心「龍槌閃！！」

銀時は大きく回転して下斜め右から一斉に大きく振り、一気に五匹のレアモンを横一列に間っ二つに斬り周りのレアモン軍団を一気に風圧で吹き飛ばした。剣心は龍槌閃の一撃で地面を砕き十匹以上のレアモン達を下の方へと叩き落した。

――夜叉――

銀時「うおおおおおおおおお！！」

剣心「はあああああああああ！！！」

さらに動きを止めず、銀時が嵐のような剣技で次々とレアモンを斬り倒す。

剣心も飛天御剣流のワザを次々と繰り出しレアモンを一気に蹴散らす。

レアモン「チョウシニノルナ！！！」

部下をドンドンとやられて怒ったレアモンは触手を伸ばして攻撃してきた。

しかし銀時と剣心の二人神速の速さで剣を振るい次々と触手を斬り裂いた。

桂「ぬおあああああああああああ！！！」

桂も続くかのように、剣を素早く振り、次々とレアモン達とドロドロの触手を斬りおとし、それを踏み台にして大きく跳び、懷から『んまい棒』をだす。

桂「対真選組、真女組用に作り上げた、新作『んまい棒』の威力を見よ！！！」

そのんまい棒は烈火のように赤かった。

桂「んまい棒、『テリヤキバーガ敵焼鬼業火』！！！」

んまい棒をレアモン軍団に投げると、そこから大量の炎が発生してレアモン軍団を一気に焼き焦がす。

アオヤシャモン「ほえ、よく燃えるもんだなあ」

アオヤシャモンが呑気にそんな事を言っている

レアモン「オマエ…食ウ!!」

レアモンはそう言つて怪物の口を持った大量の触手でアオヤシャモンを襲う。アオヤシャモンにも大量の触手が迫る。

アオヤシャモン「へっ! 甘いんだよ!」

アオヤシャモンはそう言つて愛刀“蒼斬丸”を抜き

アオヤシャモン「くらいな!“瞬烈斬”!!」

そう言つてアオヤシャモンは神速に近い速度の居合い剣を放つ。そこから放たれた無数の斬撃がレアモンの触手を一気にバラバラにした。

スバル「はあああああああああああああああ!!」

スバルは銀時と桂とは全く違う剣心に似た鮮やかで神速居合剣技を炸裂させ、次々とレアモンを間つ二つに斬る。

魔法を頼らずとも剣で戦うスバルの強さは、剣の腕だけならばわずかにシグナムの上に行くかもしれないほどに凄く、それこそシャナやセイバーにも匹敵するほどかもしれないほどであった。

レアモン「ガアアッ!」

怒ったレアモンは接近してくるスバルに対して大量の触手と溶解液の弾丸を放つ、しかしスバルは刹那の瞬間移動ですぐに触手の後ろ

に移動し、スバルが刀を鞘に納めると……いつの間にか大量の触手はバラバラに斬られている。

そしてスバルの位地から蒼い魔法陣が現れ、そこから青白く輝く無数の魔力刃が竜巻の様に舞い上がった。

スバル「天魔御剣流、風龍刃閃！」

魔力刃は竜巻のように放たれ、数多くの触手とレアモンを切り裂いて、1刃当たり2・3体を倒す。

10体以上のレアモンが刃の竜巻に巻き込まれ次々と切り倒されている。

次々とレアモンを倒していく中、特に銀時と剣心が桂とスバルとアオヤシャモンよりも数多く倒しているのが分かる。

なのは（す……すごい……間近で見ると、銀さんと剣さんってこんなに強かったんだ……）

初めて間近で見る銀時と剣心の戦いっぷりになのはは驚きを隠せなかった。

なのは（銀さんと剣さんだけじゃない！桂さんの剣技とデバイスとは違う特殊な道具や、それに劣らずスバルとアオヤシャモン君の居合を中心とした神速の如くの剣技と刀をイメージした魔法攻撃……けど何よりも銀さんが凄い！剣術の『型』がないって言うよりも……『型』が変化する剣技だ！それに剣心さんの剣技も変幻自在で次々と敵を倒していくそれに……スバル以上に速い！気が付いたらもう何体ものレアモンを倒している……あれが“飛天御剣流”……！！！！）

SSSランク以上の強さを誇ったあの最強最悪の魔導生物兵器『ゾーグ』を剣と気のみだけで倒し、変化自在の豪快なる剣を振るうS

SSランク級の實力を誇る英雄こと、『白夜叉』坂田銀時とスバル以上の神速の早さで飛天御剣流の技を放ち気が付いたらすでに何体ものレアモンを上空に巻き上げている、まるで妖術でも使っているかのような人間離れした速さの剣技を誇る銀時と互角のSSランク級の強さを誇るもう一人の英雄、『紅夜叉』緋村剣心。

それに劣らない剣術と特殊道具の連係を炸裂させ、まさに『狂乱』の名に恥じない様な敵を翻弄させる戦いをする英雄こと『狂乱の貴公子』桂小太郎。

剣技と魔法をあわせた飛天御剣流に似た『魔法剣技・天魔御剣流』を炸裂させ、さらには刹那の瞬間移動術の人間離れした速さを合わせた剣術で敵を斬りまくるスバル・ナカジマ。

そして、そのスバルに匹敵するほどの速さで我流の剣技を放つスバルのパートナーデジモン・アオヤシャモン

五人の強さに、なのはは驚く事しかできず、あっという間に残りは親玉のみになった。

銀時「さ〜てと、残るはテメエだけだぜ親玉ちゃんよ」

銀時はニヤツといやらしい笑顔をレアモンの親玉に見せる。

レアモン「グガガガガ！コロス！！オマエタチコロス！！」

レアモンは銀時の笑顔を見て怒ったのか銀時に向かって大量の溶解液のヘドロプレスを全体の口から一気に放った。

銀時「おわっ！危ね！！」

銀時は紙一重でそのヘドロ攻撃を避ける。

レアモン「シネー!!」

レアモンは今度は剣心達にそこら中にヘドロを吐き出してきた。

剣心「飛天御剣流! 氣龍閃!!」

剣心は逆刃刀から氣の刃を飛ばす技である『氣龍閃』を放ちヘドロを粉碎した。

しかし、ヘドロの一つがなのはにも向かっていた。

なのは「キャアアアア!!」

今のなのはは魔力のほとんどがレアモンに吸収されてしまっている為にプロテクションも満足に張れなかった。

銀時「なのは!」

剣心「しまった、なのは殿!」

スバル「なのはさん!」

銀時達から今のなのはは距離が離れていた為に間に合いそうになかった。

なのはは思わず目を瞑った。

レアモン（ニヤリ）

レアモンはなのはを仕留めたと思い、顔を歪めた。
だが、

ズバアッ！

レアモン「！？」

レアモンの放ったヘドロはなのはに当たる直前になぜかはじけた。

なのは「えっ！？」

なのはも今何が起こったのかと思わず啞然とした。

アオヤシャモン「危なかったな！エース・オブ・エースさんよ！！」

するとアオヤシャモンがなのはに向かってそう叫ぶ。

なのは「今の…アオヤシャモン君がやったの？」

アオヤシャモン「おうよ！オレの『夜叉斬り』でな！！」

レアモン「オマエ…イマナニシタ！！」

レアモンはなのはを仕留められなかった事で腹が立ちアオヤシャモンを怒鳴りつける。

アオヤシャモン「へっ！知りてえかよ！オレの『夜叉斬り』はな、見えない刃を飛ばす技なんだ！！だからテメエのヘドロ攻撃が急にはじけたように見えたんだよ！！」

アオヤシャモンは得意気にレアモンに向かってそう言い放つ。

銀時「お、おいおいマジか…どこのビックリ技だよ…」

剣心「なんと見えない刃を飛ばす技とは…」

桂「驚いたな…」

スバル「さっすがアオヤシャモン！」

銀時と剣心と桂の三人は見えない刃を放つ技と聞いて驚きスバルはアオヤシャモンに賞賛の言葉を贈った。

レアモン「グガガ〜！ナメタマネヲ〜！！！！！」

レアモンの親玉は怒りをますます増大させた。
そして、

レアモン「ガガガー！！！」

怒って突っ込んできた。

銀時「オラアッ！」

剣心「はっ！」

ドゴオッ！

レアモン「ガアッ！？」

銀時と剣心は同時に剣を思いっきり振るいその一撃でレアモンの親玉を吹っ飛ばした。

スバル「ハアアアッ！！！」

ズバアッ！

レアモン「ギアアッ！」

そして、上空からスバルが刀を振るいレアモンの親玉の一部を切り裂いた。

レアモン「ゲガガガガ…」

レアモンは怯みながらも再び攻撃してくる

レアモン「コロスー!!」

しかし、

剣心「はあっ!!」

バキッ!

レアモン「グアッ!!」

銀時「おら!!」

バコッ!

レアモン「ガブッ!!」

スバル「デヤッ!!」

ズバッ!!

レアモン「ゴオオッ!!」

レアモンは反撃する暇さえ与えられずに次々と三人の攻撃を食らってしまふ

まさに袋叩き状態である。

レアモン「ガアアッ！コレナラ…ドウダーっ！！」

怒り狂ったのかレアモンは巨大な触手を二本生やすと桜色のエネルギーを溜め始める。

銀時・剣心『なっ！？』

スバル「あれって…？」

桂「まさか！」

アオヤシャモン「おいおい…マジかよ！」

5人の顔が引き攣る

レアモン「デイベイン・バスター！！」

ドツカアアアアン！！

全『うわあああああ！！』

なんとレアモンが触手の先からデイベイン・バスターを放ち5人を吹き飛ばした。

煙が立ち込める

銀時「おいおい、アイツ…なのはの技を使いやがったぞ！？」

剣心「どういう事でござるか…！？」

銀時と剣心は何故レアモンがなのはのデイベインバスターを放った

のかが分からなかった。
するとなのはが

なのは「銀さん、剣さん、桂さん、スバル、アオヤシャモン君！あのレアモンは私の魔力を吸収したから私の魔法が使えるの！」

銀時「オイ、オイ、オイ！　そう言う大事な事は先に言えええええええ！」

なのはの今更の発言に銀時は思わず叫んだ。

剣心「という事は…奴はなのは殿の砲撃魔法も自由に使えるということでござるか!？」

桂「だしたら……かなり厄介だな……」

剣心と桂はこう分析する。

なのはの砲撃魔砲はかなり強力である。

それを自由に放てるとなると、とてつもなく厄介だ。

しかもこの狭い空間ではうまくかわせない。

レアモン「ソウイウコトダ。モウオマエラニカチメナイ。オレハイ
チドオボエタワザナラマリヨクナンカカンケイナクウテル。サツキ
ノハ…ハヤクウツタメニワザトイリヨクオトシタ…コンドハモット
パワータメテウツ…オマエラマトメテケス……」

レアモンはそう言つと触手を大量に出し桜色のエネルギーを再び溜め始めた。

しかもさつきよりも遙かに強力そうである

銀時「おいおい……今度はスターライト・ブレイカー級の砲撃を連発しよってのか!? 幾らなんでもあんなの食らったらひとたまりも

ねえぞ！！」

桂「この狭い空間では交わすことが出来ぬ！どうすれば…」

なのはの魔力はもうそんなには無く、逃げようとしてももう間に合わない。

スバル「私に任せてください！！！」

スバルがそう言うと『ティルヴィングエア』を右手持ちに持ち替えて、ある魔法を放つ。

スバル「ウィングロード！！！」

すると、スバルの周りから2つの水色の道を宙に作られ、柱が核のところまで届く。

スバル「銀時さんと剣心さんと桂さんはこの「ウィングロード」を使って親玉に突撃して倒してください！アオヤシャモンはなのはさんをお願い！！あの魔導砲は私が止めます！ティルヴィングエア！カートリッジロード！！！」

ティルヴィングエア Yes sir！

ガシユン×7

カートリッジを7発ロードすると、『ティルヴィングエア』の刀身がさらに蒼く光だし、宝玉から魔力が大量に溢れでて、それが螺旋を描くかのように刀身を包み、超高速回転をする。

まるで風がティルヴィングエアの刀身へと集まっていくかのような勢いであり、暴風が起こって魔力の螺旋回転の出力が最大になり青く輝く光が発生する。

銀時「オイイイ！なんかお前、すっごい取って置きを持っていねエ！？それで親玉を倒してほしいんだけどオオオオ！？」

スバル「いや…そんなことをすればその前にあの魔導砲に私達がやられそうなんですけど？」

剣心「そうでござるよ、馬鹿な事を言うものではないでござる」

スバルが苦笑して突っ込み剣心も呆れながら突っ込む。

そしてそれを見たのはは、信じられないような顔でスバルを見る。

なのは（カートリッジを7発も発動！？私とフェイトちゃんですえも6発が限界なのに、この子は7発も発動するなんて…！？それほど強力な砲撃魔法を持っている！？）

もしかすれば、間違いなくなのはの『スターライト・ブレイカー』に匹敵する威力ではないかと考える。

桂「良し…では援護を頼む、スバル殿！」

剣心「いい加減に奴を止めねば行かぬでござるからな」

銀時「じゃ…クライマックスと、行ってみようかアア…！」

銀時と剣心と桂は、スバルの作った『ウィングロード』を渡って走る。

そのまま親玉に突撃しようとするが、

レアモン「チカツクナ…！」

レアモンは危機を察知したのか巨大なミミズのような2本の触手の口からピンク色の桜色の閃光『ディバイン・バスター』が同時に放

たれた。

『スターライト・ブレイカー』には劣るが、それでも喰らえば唯ではすまない。

その閃光が2人を襲う前に、スバルの砲撃魔法が放たれる。

スバル「天魔御剣流 てんまつるぎりゅう 魔之太刀 まのたち 巻龍砲波閃 かんりゅうほうはせん！！」

最大限に溜められた魔力を収束したデバイスを突き出すと、そこから巨大な螺旋に渦巻く竜巻と蒼い龍の閃光砲が放たれ、凄まじい勢いで2つの『ディバイン・バスター』を押し上げる、蒼い龍はまるで生きているかのように雄たけびを上げると、2つの巨大なミミズの触手を噛み砕いて跡形も無く消滅させる。
その威力は間違いなくなのはの『スターライト・ブレイカー』に匹敵、或いはそれを上回るほどの破壊力である。

レアモン「ナニ！？」

レアモンは驚きの余り声を張り上げる。

レアモン「（バカナ！スバル・ナカジマガンナキヨウリョクナホウゲキヲウテルナンテデータニナイ！ドウナツテイル！？）」

レアモンは心の中でそう叫ぶ。レアモンが知る限りではスバルがあの強力な攻撃魔法を使えるなどレアモンのデータにはまったくないのだ。こんな事は想定外だとレアモンは計算外の事態に思わず慌てふためく。

レアモン「（マズイ！コノコトヲ“あのお方”にオシラセシナクテハ！！）」

レアモンが誰かに対してそんな事を考えていたとき

???「どこ見てやがんだ怪物やろおおおお!!」

レアモン「!」

その隙について銀時と剣心と桂がレアモンに向かってどびだしていた。

銀時「行くぜ、剣心、ヅラ！」

剣心「うむ！」

桂「ヅラじゃない桂だ！」

3人が叫びレアモンに一気に近づく!!

レアモン「ク、クルナ!!」

身の危険を感じたレアモンは大量の触手で銀時達を襲う。
しかし

銀時「今更そんなモンが利くかああああ!!」

剣心「又アアアアアア!!」

桂「オオオオオオオ!!」

三人は大量に放たれたその触手もすべて切り落としてしまう。

レアモン「オノレエ!!」

レアモンは怒り狂って巨大な魔力弾を銀時に放つ

銀時「よっこら、しょっと!!」

しかし、銀時は木刀をバットのように思いっきり振ると

カッキイイン

ドツカアアアアン！！

レアモン「グハアッ！！」

魔力弾を跳ね返されたレアモンは自分ではなつた魔力弾に直撃してしまい大ダメージを受ける。

レアモン「グ…グゴオオオオ…」

剣心「もう寄せお主に勝ち目はない。大人しくこんな事はやめるでござるよ」

ボロボロになつたレアモンに向かって剣心は降伏するように言うが

レアモン「ダメレエ！！」

レアモンは聞く耳も持たずに突撃してきた。

桂「剣心が最後のチャンスを与えてやったというのに無碍にするのか…」

銀時「あつそ、だったら覚悟はいいなエイリアン野郎！！」

アオヤシャモン「俺にもやらせろ！どうせなら思いっきりドンツッ！ていこうぜ！！」

銀時「いいね。そのほうが気持ちいいな」

レアモン「俺を無視するなあああ！！」

レアモンが襲い掛かってきた。

そして

銀時「ハイ！せいのつ！」

銀時・アオヤシヤモン・桂「でやっ!!」

バキイイイン

[illegible]

3人に吹っ飛ばされたレアモンは壁を突き破って地面に落ちて行き

ズツドオオオオオオオオン！！！！！！

レアモン「ア……アアアア……ベル……サ……マ……」

地面に落ちてデータ化して消滅した。

レアモンズ「アアアアア・・・・・」

それと同時に、レアモン軍団が全員データ化して消滅した。

なのは達「やった~~~~~!!!」

レアモンを銀時達が倒したことにより、なのは達は喜びを出した。

銀時「やるじゃねえか」

アオヤシヤモン「銀さんもやるじゃなか」

銀時とアオヤシヤモンはお互いの手をたたき合った。

スバル「あれ？わたしは！？」

スバルは上の空になってしまった。

そして……

「……あらあら…遣られちゃったの？使えない子ね……」

「……全くでちゅ。改造したといってレアモンじゃあんなもんでちゅね」

ビルから離れた空中で赤ちゃん言葉を話す黒い球体のような生き物とその上に腰掛けている灰色に髪にゴスロリの服を着た少女がその様子を見物していた。

「……ベルお姉ちゃま。どうするんでちゅか？」

黒い球体の生き物が自分に腰掛けている“ベル”と言う少女に今後の事を訪ねた。

ベル「別に、ありのままを“お父様”に報告するだけよ」

「……怒られないでちゅかね？」

ベル「お父様はこれくらいのことです怒ったりしないわ。今回は所詮前座だしね」

「……そうでちゅか？それにしてもお姉ちゃま。あいつらは何でちゅかね？」

ベル「さあね…。でも、多分あいつらじゃない。報告にあった“ゾーグ”を倒したって言う侍」

「……あの“ゾーグ”があんな奴らに遣られちゃったんでちゅか！？」

黒い球体のような生き物は驚く。

ベル「多分ね。それにしても“スバル・ナカジマ”が報告にあったのより全然強くなってる方が驚きだわ。それに“デジモン”まで連れてるなんて如何いう事かしら？」

???「僕ちゃん。分かんないでちゅ」

二人は少し考えてみるが

ベル「考えてもわかんないわね。とりあえず“お父様”に報告しなくちゃ。行くわよ。“バクア”」

バクア「ハイでちゃ」

ベルとバクアと呼ばれた二人は闇の中へと消えた。

第五訓 人間じゃなくても侍は強いのもいる（後書き）

支配者「ハイ、盛り上がってきました」

銀時「おい、作者最後に出てきた奴らは何だよ？」

支配者「いずれわかります」

フェイト「次回、『久しぶりの再会だと相手は別人みたい』テイクオフ！！」

第六訓 久しぶりの再会だと相手は別人みたい（前書き）

支配者「やっとフェイト達と銀時達の再会です」

フェイト「やっと剣心にあえる♪」

銀時「じゃあ、『超リリカル銀魂 S t r i k e r S』始まるぜ」

第六訓 久しぶりの再会だと相手は別人みたい

*

神楽「何アルか!？」

シャナ「レアモンが…消えていく…?」

外で戦っていた神楽・エリザベス・月詠・新八・シャナ・セイバー・ヤミ・エリザベス・当麻・インデックス・ハヤテ・ヴィルヘルミナ・絢子・護・クルス・イヴ・ブレイド・セト・ソルヴァ・ディスク・植木・照山・三人娘・アリア・一方通行達全員もレアモン軍団の異変に気づき、足場が崩れ始めていると確信して、急いで窓ガラスに飛びつき、蹴りだして豪快に窓を割ると全員はビル内に無事非難した。

そして、踏み台とされていたレアモンの触手の塊が次々と落ちて行

く。

月詠「どうやら、銀時と桂は無事に親玉を倒したようじゃな」
ヤミ「さすがですね」

セイバー「まあ、あの3人なら当然でしょう」

ブレイド「チツ、いい所もって行きやがって」

クルス「まあまあ、神父様」

きせる煙管を加えて口から煙を放つ月詠は少し笑って安心する。

ヤミとセイバーは当然のような顔をして喜ぶ。

ブレイドはいいところ銀時達にとられたので嫌な顔をする。そんなブレイドをクルスは宥めた。

エリザベス「さすが桂さん」

梶「お見事」

つとエリザベスと梶はそう書かれたボートを出す。

神楽「とにかく、銀ちゃんとか剣ちゃんとツラも無事って事ね。早く3人を迎えにいくアル。」

エリザベス「そうだった!」

シャナ「そうね、早く行きましよ」

未央「いこいこ」

神楽・エリザベス・月詠・新八・シャナ・セイバー・ヤミ・エリザベス・当麻・インデックス・ハヤテ・ヴィルヘルミナ・絢子・護・クルス・イヴ・ブレイド・セト・ソルヴァ・デイスク・植木・照山・三人娘・アリア・一方通行達全員は急いで3人を探しに行こうとするが、突如巨大なヘリの音が聞こえ出す。

皆はその音の方向を振り向くと、そこにはフェイト・ヴィータ・シグナム・シャル・ティアナ・エリオ・キャロがいた。

ヴィータ「おーい、神楽ー、新八ー、シャナ、セイバー、ヤミー、
当麻・インデックス・ハヤテ・ヴィルヘルミナ・絢子・護・クルス・
イヴ・ブレイド・セト・ソルヴァ・植木・三人娘・アリア、エリザ
ベスー！」

ヴィータが嬉しそうに声をかけると、神楽も返事をするかのように
叫ぶ。

神楽「おー、シグナム・ヴィータ・シャマルアル！元気だったア
ルか！」

新八「ホントだ！シグナムさん達だ！」

ブレイド「おー！愛しのヴィータたん！ん！」

見慣れた3人の姿を見て神楽と新八は喜びだす。

特にヴィータを見たブレイドがヴィータに飛び掛っていったが

ヴィータ「誰がヴィータたんだこの野郎！！（怒）」

ドゴオッ！！

ブレイド「あべしっ！」

ヴィータに怒りのグラーファイゼンツツコミを食らわされてしまっ
た。

シャナ「あいつ等この世界にいたのね」

ヤミ「そうみたいです。と言うか他の人達は誰でしょうか？」

シャナとヤミはヴィータ達の他に見た事のない連中を見てそう呟く。

そしてフェイトがヘリから降りてバリアジャケットの衣装に変身して神楽達に近づく。

フェイト「皆！久し振り！」

10年後の姿のフェイトであるとは知らず、皆はポカンとする。

神楽「…誰アルか？」

新八「…どちら様ですか？」

シャナ「何よお前？」

ヤミ「初対面の相手に対して馴れ馴れしいですよ」

つと神楽とシャナと新八とヤミはそう言う。

フェイト「えっ？私の事分らない？」

フェイトは思わずそう言う。
すると

ブレイド「初めましてお美しいお嬢さん！」

フェイト「わっ！」

気絶していた筈のブレイドが急に起き上がって手を握って挨拶をした。わざとらしい紳士口調で、それがフェイトだとも知らずに

ブレイド「私は高貴になる神父ブレイドと申します。彼らは私のお付きです」

全『誰がお付き（だ）（よ）（ですか）（アルか）（じゃ）（ー！）』

ブレイドのお付き発言に皆は思わず怒鳴る。

ブレイド「いやぁ〜それにしても美しい。ああ、そうそう、私の事はブレイド神父お兄様で結構ですよ」

フェイト「あの〜、ブレイドさん？私の事分かりませんか？」

ブレイド「へ？私があなたの様な美しいお嬢さんの事を忘れるはずがないのですが…どこかでお会いしましたか？」

すると、エリザベスと梶はフェイトの持っている『バルディツシュ』である事を気づく。

エリザベス・梶「あれって、バルディツシュじゃない？」

そうか書かれたボードを皆に見せるエリザベスと梶に、神楽は

神楽「あ…本当ネ。」

つと言い出す。

そしてナギが

ナギ「おい、そいつフェイトだぞ。“フェイト・テストロッサ”」

と言った。

神楽「え…マジアルか!？」

ブレイド「えっ!?!この美しいお姉さまがフェイトたん!？」
全「え…マジで!？」

植木・照山・ディスク・一方通行・月詠

『…?』

ナギの発言に皆は思わずそう言う。

因みに照山・ディスク・一方通行・月詠はフェイトに会った事がなかった。首を傾けた。
植木は知っている筈なのだが“ちょっとおバカ”なので今一よく分かかってなかった。
皆は10年後のフェイトが自分達の知っているフェイトであることを確信する。

フェイトは苦笑して顔を頷く。

ナギ（やれやれ…“ミッドチルダ”に来た時から薄々思っちゃいたが…どうやらStrikerS編に入っちゃったみたいだな……）

*

銀時「あゝ、久しぶりにずいぶん運動したぜ」

アオヤシャモン「そうか？俺なんかまだまだ平気だぜ？」

レアモンを倒した銀時は、肩をぐるぐる回しているが、アオヤシャモンはまだまだ余裕そうである。

銀時「俺とお前じゃこの疲れなんてわかるわけねーよ。大体デジモンと人間とじゃ体力が違うんだよ」

アオヤシャモン「でもそれじゃ、まるでおっさんみたいだぜ」

銀時「だれがおっさんだこらあ！！」

剣心「これこれ」

おっさんという単語に反応し、怒鳴る銀時とそれを宥める剣心。

銀時「おっと、そうだ。おゝい大丈夫か？ツラ、スバル、なのは」
桂「ツラじゃない桂だ」

つと銀時と剣心とアオヤシャモンは3人が無事であるかと確認すると、3人は無事のようなのであるが…スバルは苦しそうだが笑って返事をする。

スバル「あ…ははは…何とか……」

どうやら、先ほどの砲撃魔法に相当の負担がかかっている。
それと先ほどと衣装が違っており、おそらくはバリアジャケットを解除して通常の和服になっているようである。
ちなみに首にはミニチュアサイズの日本刀が首飾りのようにかけられている。

なのは「凄かったよ、スバル。さっきの『巻龍砲波閃』だっけ？あんな凄い魔法を見たの初めてだよ」

スバルが最後に発動した砲撃魔法『巻龍砲波閃』に威力は間違いなくSS級はあるとなのはも認めるほどである。
しかしスバル自身は使うのはまだなれていないようである。

スバル「実はあれ、万が一の為に覚えた魔法で…その……使えば全ての魔力を使い切ってしまう『諸刃の剣』見たいな感じなんです。」
アオヤシャモン「そう言う請った。今のスバルの魔力じゃ、アレを連発するなんて無理だからな。まったく無茶しやがって」
スバル「あはは…ごめん、ごめん」

と苦笑して説明するスバルと鋭い指摘をするアオヤシャモン。そして納得がいくかのように桂は確信する。

桂「なるほど…、強力な力ほど負担がかかりやすい事はまさにこの事であるか。だが…それでもお主は我々を守る為に危険であると承知でその力を使った訳だな」

桂がそう言うと、銀時と剣心が少し笑ってスバルに言い出す。

スバル「銀時さん？ 剣心さん？」

銀時「強くなったな、スバル」

剣心「ああ、驚いたでござるよ。まさかたった4年であれほどの剣術を身に着けていようとは」

銀時と剣心がそう言うと、スバルは晴れたかのような顔で嬉しく感じた。

銀時「何かを守る為にここまで強くなれるなんて、大したもんじゃねえか。その信念に胸にはってもっと強くなれよ……そうすりゃ、さっきのでけえ大砲みたいな魔法がジャンジャンと撃てつからよオ」
剣心「そうでござるよ。力とは何かを護る為に振るうもの。これからも精進すれば腕はまだまだ上がるはずでござる。心も体もな」
スバル「…はい！」

憧れた人物にも認められ、スバルは嬉しさで一杯だった。

剣心「しかし、スバル殿。これだけは言っておくでござるよ」

スバル「何ですか？」

剣心「剣は凶器。剣術は殺人術。どんな奇麗事を並べてもそれが真実。スバル殿はこの事をちゃんと分かっているでござるか？」

スバル「…はい。それは十分分かっています。でも、私は誰かを護る為にこの剣を振りたいんです。誰かの命を護る為に」

剣心「聞く人が聞けば甘ちよつろい戯言にしか並んでござるが…、拙者はその甘ちよつろい戯言の方が好きでござる。それからその信念を忘れないようにするでござるよ」

スバル「はい！」

剣心にこういわれスバルますます笑顔になる。隣にいる銀時たちも微笑んでいる。

なのは「…あ…あのう…銀さん／＼」

突如、なのはは顔を真っ赤にして銀時を見つめると、銀時なのはの顔に振り向く。

なのは「その…えつとう…ありがとうございます／＼」

テレながらも助けくれた事に礼を言うなのはに、銀時は意外そうな顔で少し驚くが、すぐに笑い出す。

銀時「おいおい、さっきまでのきつそうな顔よりも、綺麗な笑顔で笑っているじゃねえか。そっちの方が似合ってたやがる」

なのは「ふえ？／＼／」

綺麗といわれてドキツとなったなのは。

桂は銀時にまた女が出来るのではないかと笑い出し、アオヤシャモンは何やらなのはの反応に意外そうに見る。

アオヤシャモン「（あいつ、ちゃんと意味分かって言ってるんだろうな？まさか、天然か？銀さんって）」

アオヤシャモンは銀時の言葉を聞いてこう思う。

突如、隣から数多くの足音が聞こえてきて、銀時と剣心はその音が聞こえる方法を見て見ると、1人の金髪の女性と顔合わせすると、女性は思わず銀時の名を口にする。

???「剣…心…？」

名前を言われて思わずポカンとなる剣心だが、女性の髪形に持っているデバイス『バルディッシュ』を見ると、その女性がある人物である事を分かった。

剣心「お主……まさかフェイト殿か!？」

フェイト「ああ!!」

剣心に名を呼ばれて喜びだすフェイトは嬉しくなり、思わず『バルディッシュ』を落として剣心に駆けつける。

フェイト「剣心ー!!」

フェイトは剣心に飛びかかって、剣心の胸の中に飛び込んだ。剣心は思わずフェイトを抱いた。

剣心「ちよっ…ちよっと、フェイト殿…」

フェイトが突如抱きついてきて、剣心が戸惑っていた。

「クス…剣心…会いたかったよ…」

フェイトは腕に力を入れて、剣心を強く抱いた。

剣心は物凄く動揺している。子供の頃のフェイトならそうでもないが、今のフェイトは大人だ。

大きくなった胸が背中当たる。さすがの剣心も、これには動揺を隠せない。

「ちょ・・・フェイト殿・・・!!」

一体どうすれば良いのか分からないまま戸惑う剣心に、シグナムが現れた。

「剣心・・・なのか・・・。」

名前を呼ばれて剣心はシグナムを見ると、少しヤバイ表情をする。この状況をシグナムに見られたら間違いなく殺されると恐怖を感じたからだ。

剣心「シ・・・シグナム殿!?!・・・ひ・・・久しぶりでござるな・・・その・・・あの・・・これは...何と言つか・・・」
「剣しいいん!」

シグナムも思わず駆けつけて剣心に立ちついてくる。

剣心「お主もかいいいいい!!」

フェイトが続いてシグナムまで剣心に抱きついてきて、腕に力を入れて抱きつく。

「会いたかった」

シグナムは頬を赤く染める。

大きな胸が剣心に当たる。

フェイトとシグナム、2人の大きな胸に押しつぶされそうな感じで

剣心は顔を真っ赤にして大量の汗を出す。

なのはとスバルは顔を赤くし、桂と銀時はニヤリとからかいがいがありそうな笑みを浮かべた。

剣心「ま…待て待て、フェイト殿、シグナム殿！と…とりあえず何がどうなっているのかを説明して欲しいでござるうううう！」

予想外の展開に剣心は、動揺を抑えられなかった。

剣心のいた世界には、見た目は綺麗だが、中身が強暴だったり性格に問題がある者ばかりで、まともな女性が少なかったりする。

だがフェイトやシグナムは、見た目も綺麗で中身も普通の本当に綺麗な女性だから、こんな事をされると余計に剣心は動揺してしまうのだ。

そんな様子を、後から来た神楽やシャナやヤミやセイバー、新八、ナギ、アオヤシャモンはなんだか不機嫌そうな顔をしている、ブレイドは物凄い殺気を出して剣心を睨んでいる。他の皆は興味深そうに三人を見ていた。梶だけはなぜかハアハアと興奮していたが

そして、ヴィータ・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロはなのとはスバルと同じく、顔を赤くしていた。

アオヤシャモン「（おい、スバル。あれティアナじゃないのか？）」
スバル「（えっ！ティア！？）」

スバルはティアナの姿を見て何かやばそうな顔をした。
そしてヴィータとシャマルは桂の姿を見て驚く。

ヴィータ「ああー、ツラだ！」

桂「ツラじゃない桂だ」

ヴィータにツラ呼ばわりされて突っ込む桂に、ヴィータとシャルマルが駆けつける。

シャルマル「お久しぶりです！まさか貴方もいつの間にかこの世界に来ていたなんて・・・。」

桂「ヴィータ殿にシャルマル殿、お主らも元気そうで何よりだ。」

久しぶりのヴィータとシャルマルとの再会に桂も笑い出す。

かつては共に、『闇の書』の蒐集に強力をしあった仲間同士であり、桂にとっても掛け替えのない仲間である。

ヴィータ「はやくもツラやナギやヤミと会ってないから悲しそうな顔をしていたぞ。せっかくだから会いに来てやれよ。」

ヴィータは桂にはやてに会わせる事を言いだす。

はやてにとつて、桂も自分の為に力を貸してくれた恩人の1人であり、最も信頼する人物であった。

桂「ウム、八神殿もさぞかし成長をしているから、お小遣いに50円をやらなければな。」

ヴィータ・ナギ「やらんで良いわあ！！」

ドツカア！

桂「ごふおおお！！」

桂のクールボケに、ヴィータがグラーフアイゼンでナギがハリセンで桂の頭を叩いた。

シャル「落ち着いて、ヴィータちゃん！」

ハヤテ「お嬢様止めてください！」

エリザベス『暴力はよくない！』

怒り任せのヴィータとナギを抑えるハヤテとエリザベスとシャルだか、モロにグラーフアイゼンとハリセンを喰らったのか、桂の頭からは大量の血を出していた。

ティアナ、エリオ、キャロの新人フォード隊は見慣れない光景に苦笑して呆れるしかなかった。

アオヤシャモン「（おい、スバル。今のうちにとんずらしようぜ）」
スバル「（う…うん）」

そんな中、アオヤシャモンの助言を聞いたスバルはその場から逃げようとする。そしてティアナは後ろでこっそりと退場しようとするスバルとアオヤシャモンの姿を見てスバルを呼ぶ。

ティアナ「スバル？・・・アンタ、スバルなの！？」
スバル「ギク！？」

ティアナに呼ばれて驚きだすスバル。

フェイト、シグナム、ヴィータ、シャル、エリオ、キャロもスバルの方を注目すると、スバルはやっちゃったかのような顔で苦笑いする。

スバル「あちゃー、ばれちゃった・・・かな？」

ティアナ「スバル！どうして、アンタがここにいるのよ！？」

まさかの再会にスバルもティアナも驚きを隠せなかった。

スバル「あゝ．．．なんというかね。町でアイスを食べたら第3起動高層ビルに謎の生物が暴れてるって聞いてここにいるっていうか．．．」

つとスバルは曖昧に答える。

ティアナ「あんだね．．．」

ティアナは呆れてため息を突く。

そして、機動六課部隊長オフィス。

デスクに座っているのは、部隊長の八神はやて。19歳。隣にはリインフォースがいる。

ドアが開かれ、銀時、剣心、フェイト、桂、ナギ、ヤミ、シャナ、セイバー、新八、シグナム、なのは、シグナム、スバルが入ってきた。．．．え？早く着きすぎ？気にしないでください、“飛ばし”というやつです。

はやて「桂さん、ヤミちゃん、ナギさん！イヴちゃん！綾崎さん！銀ちゃん！剣ちゃん！ホンマに桂さんと銀ちゃん、ヤミちゃん、ナギさん、イヴちゃんに綾崎さん梶ちゃんに剣ちゃんや！」

銀時達の姿を見たはやては、思わず立ち上がった。

リインフォース「銀時！剣心！」

リインフォースも銀時と剣心を見た。会えた嬉しさで笑顔になる。

桂「おお、八神殿ではないか！随分と大きくなって・・・お小遣いに60円をやるう」

シグナム「いちいちやらんで良い！」

ナギ「しつこいんだよー！」

フェイト「それとなんで10円増えているの？」

早速の桂のクールボケにフェイトとナギとシグナムは突っ込みだす。

エリザベス『桂さん・・・せめて100円に上げてあげましょうよ』

とエリザベスはボートを出すと・・・

シグナム・フェイト「増えれば良いって問題じゃない（よ）！」

2人の声がピッタリに会い、突っ込みだす。

銀時と剣心はリインフォースを見て久し振りに声をかける。

銀時「リインフォースは変わってねーな」

剣心「本当でござるな」

リインフォース「私は、年はとりませんから」

リインフォースは笑顔で返事をした。

ナギ「元はプログラムだからな」

ナギはそう言った。

すると、

「???」わあ！銀さんと桂さんと剣心さんです！」

三十センチくらいの小さな少女が、銀時と桂と剣心の前に現れた。
長い水色の髪で、見た目はリインフォースにそっくりだ。

銀時「うおっ！なんだコイツ！？リインフォース！？ちっさいリインフォースだ！」

桂「何と！？」

剣心「ほお…」

小さなリインフォースを見て、銀時と桂と剣心は驚いた。

はやて「その子は『リインフォース・ツヴァイ』って言うてな。リインフォースの妹や」

はやてが銀時達に教えた。

銀時「え？妹？マジでか！？」

リインフォースを見ながら、銀時は尋ねた。

リインフォースは、少し照れた感じで頷いた。

リン「よろしくです、銀さん！桂さん！剣心さん！」

無邪気な笑顔で、リインフォース・ツヴァイは挨拶した。

銀時「お…おお」

桂・剣心『うむ、こちらもよろしく頼む（でござる）』

少し戸惑いながら、銀時は返事をし、桂と剣心はしつかりとした態度で返事をする。

リインフォースの妹？性格が全然違うんですけど。めっちゃ明るいんですけど。

まじまじとリインフォース・ツヴァイを見つめる。

はやて「その子の事は”リイン”って呼んであげてな」

はやてが言った。

二人がごっちゃにならないためか。て事はリインフォースの方は、そのままリインフォースでいいワケか。

銀時は納得して頷いた。

ナギ「てつきり、リインフォースがいるからお前はいないとばかり思ってたんだがな」

ナギはそう言った。

はやて「まあ立ち話もなんやし、座ろうか」

はやてが、デスクの前にある来客用のソファアに座るよう促した。銀時達はソファアに座った。

はやて「それにしても、桂さんと銀ちゃんと剣ちゃんは全然変わつとらんな」

ソファアに座りながら、はやてが言った。

フェイト「剣心達は過去から来たみたいなんだ」

フェイトが答えた。

はやて「過去から？」

なのは「装置が制御不能になったみたいで、誤ってこの時代に来ちゃったみたいなの」

今度はなのが説明した。

なるほど、とはやては頷いた。

桂「それにしても八神殿、此処は何処か教えてもらいたいのだが？」

桂は、来たときから疑問に思っていた事を聞いた。

フェイト達が制服を着ているところから推測すると、管理局か何かの部隊みたいだ。

はやて「ここは古代遺物管理部『機動六課』。ロストログア関連の危険な任務を扱う部隊や」

はやてが答えた。

ヴィータ「はやてが立ち上げたんだよ」

「えっ！？はやてが！？」

フェイトの言葉に銀時は驚いた。

銀時「って事は、お前が一番偉かったりするんのか？」
はやて「うちは機動六課の部隊長や」

はやてがない胸を張って言った。

銀時は驚いた。まさかはやてが隊長とは。世の中わからないものだ。

桂「おお、それは大した者だ！八神殿の努力と仲間の力が合わさった結果というわけか！」

ヤミ「はやても偉くなっただんですね」

感心したかのように驚く桂とヤミに、はやては少し顔を真っ赤になる。

はやて「ふふ・・・おおきに、桂さん、ヤミちゃん／＼」

凄く嬉しそうな顔をするはやてに、フェイトとなのははポカンとなる。

剣心「しかし…八神殿。よく19歳で部隊を作る許可がもらえたでござるな？」

剣心はそう聞く。剣心はまだ若いはやてにそこまでの権限を管理局が与えたことに驚いていたのだ。

ナギ「そりゃ、簡単だよ。管理局はアホ共の集まりだからだよ」

剣心「おろ？」

なのは「ちよつ、ナギちゃん、アホの集まりって…」

ナギの管理局を罵倒する言葉に剣心が？マークを出し、なのはがナギを諷め様と言葉を出す。

しかし、ナギは気にせず話を進める。

ナギ「管理局の連中は魔力さえ高ければ、それだけで優れた人物だ

と決め込んでるんだよ。はやては魔力が凄く高いのと魔力戦闘だけは実力があるだろ？それさえ高ければ人物の善し悪し関係なく地位を高く与えるんだよ。ガキだろうがなんだろうがな、だから権限もある程度は思うがまだ。身体能力とかは全く無視だ。魔力さえ高ければそれだけで強い。魔法以上の優れた力は絶対に認めない、それが管理局上層部のバカ共の考えなんだ。最も、この考え方は魔法を扱える自分たちがいつまでも権力にしがみつきたい為だけの物なんだよ」

銀時「おいおい…そりゃマジで幕府並みに腐ってるな」
なのは「にやはは…、えらい言われようだね…」

ナギのこの話を聞いて権力を思うがままに振るっている管理局は本当に幕府並みに腐っていると言い出す銀時と自分が勤めている組織の事をそこまで一方的に罵倒されて苦笑いを浮かべるのはであった。

ナギ「それに、この部隊は地上本部の許しもなく勝手に作ったツッコミどころ満載の部隊だけだな」

そして今度はナギはこんな事も言い出した。

はやて「ちょっ！ナギさん！何でそないな事までしてんねんな！？」

ナギ「私は何でも知っている」

銀時「何だよ。お前許しもなく勝手に勝手に部隊なんか作ってんのかよ」
ナギ「部隊運営には金がかかるんだぞ。税金泥棒狸がお前は」

はやて「誰が税金泥棒狸やねん！！」

ナギの言葉にはやては突っ込んだ。
そして別の場所で剣心はシグナムに小さな声で話しかける。

剣心「シグナム殿、八神殿はもしかして小太郎の事を・・・」

気になって話し出す剣心にシグナムは、

シグナム「ああ、剣心の考えているとおりだ。主は『闇の書・ゾーグ事件』以来、桂に対する思いが恩人以上になっている。最も、人妻好きである桂に、ヴィータ・シャマル・ザフィーラは知らないだろうがな」

シグナムはどうやら桂に対するはやての思いを気づいたようである。しかし、桂自身は気づいてはいないようだ。

剣心「知ってしまったら… 3人は小太郎に何かするかもしれない…
…とりあえず小太郎達には内緒にしておくでござる」
シグナム「そうだな… 特にヴィータが知ってしまったら桂が恐ろしい目に合うかもしれないな」

2人は、はやてが桂に好意を持っている事を誰にも言わないことを決意する。

はやて「それよりスバル… 私の方からも聞きたい事があるんだけどええか」

さっきまでとは違って真剣な表情ではやてはスバル声をかけた。

スバル「あ… はい！」

思わず返事をするスバル。

はやて「なのはちゃんから聞いたんやが・・・相当の活躍をしたよ
うやな。それに、ゲンヤさんからもスバルの噂は聞いとるよ」
スバル「お父さんから!？」

はやてが自分の父の知り合いである事に驚きだすスバル。

ゲンヤ・ナカジマ

スバルの父で陸士108部隊部隊長。

元ははやての師匠であり、逆転した現在でも「信頼できる師匠」と
して慕われている。

その為、個人的な関係もあって、カルタスとギンガ部下を機動六課
の捜査協力にあてることになる。

実は先祖が地球の日本出身で、日系人であり、魔力は0である。

「剣術も魔術もとても新人魔道士とは思えへんほどの強さを持つて
いて、しかも魔法術式・古代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦A A A
+ってほぼ副隊長レベルは行っている。訓練校を終えた後は1人で
山に籠って剣術の修行を励んどるってね」

新人魔道士でも?1の実力を持つと言う噂は聞いたことがあるが、
スバルのずば抜けた戦闘力は噂以上である。

はやて自身も正直驚いていた。

はやて「せやけどな・・・何で勝手にガジェット達と異性生命体と
戦ってたんや?」

はやてがそう言うと、スバルは慌てた表情をする。するとアオヤシ

ヤモンが

アオヤシャモン「それは、なんかスバルの奴が美味しいアイスクリーム屋があるとか言って、第3起動高層ビル向かったんだがよ、それが実は閉店してたんだ。それで山に戻ろうとしたら突然ガジェットってガラクタ軍団に襲われて打つ倒しながら逃げようとしたら、なんかレアモンとか言う異性生命体に襲われて、出口も見つからなくて、出口を探しながらレアモンと戦ってたら偶然にも銀さんとツラと剣心って奴に合流したんだ。」

アオヤシャモンの説明にスバルは思わず赤い顔をする。

そして、はやてはジツとスバルとアオヤシャモンの眼を見つめる。そしてスバルとアオヤシャモンが嘘を言っていない事を確信する。

はやて「事情は分かった。せやけどさすがにデバイスの無許可使用はやばいし・・・本来だったらスバルは逮捕されるんやで？」

スバル「ええええええ！そうなんですか！？」

絶叫して青ざめるスバルだが、はやてはニコリを笑ってスバルに話しかける。

はやて「せやから...もし良かったら フォワード部隊に入らへん？」
スバル「え？」

まさかのスカウトにスバルは啞然とする。

はやて「もちろん、ただ訓練を受けるだけじゃなく、ウチのフォワード部隊の新人達の起爆剤として欲しいんや」

リン「スバルさんのようにスバ抜けた実力者がいれば、他の人たちも負けられない勢いで成長しますしね」

はやてとリインはそう言う考えでスバルにフォワード部隊に入ることを進める。

ナギ「弱みを握って無理やり人材引き込んで戦力増強か？そんなだから狸とか言われるんだぞお前は」

はやて「別にそんなつもりで言うたんちゃうわ！失礼やでナギさん！！」

そしてナギの毒舌にはやてが突っ込んだ。

フェイト・シグナム・なのはも賛成のようであり、スバルは迷わずに賛成する。

アオヤシャモン「分かりました・・・私でよければ入らせていただきます。」

こうして、スバルはフォワード部隊にはいる事を決意した。

アオヤシャモン「おつ、おい！言いのかよスバル！？」

スバル「良いんだよ。アオヤシャモン。私の力が役に立つんだっただけ。」

アオヤシャモン「でも、お前忘れたのかよ！管理局の奴らは」

アオヤシャモンが何か言いかけた時スバルはアオヤシャモンの口を塞いだ。

スバル「アオヤシャモン…。今はその話はしないで……」

アオヤシャモン「だっ！だけどよ…「いいから、お願い」わっ、分かった……」

スバルに少し強めに言われたアオヤシャモンは黙った。

はやて「？なんかあつたんか？」

スバル「いえ、なんでもありません」

スバルははやてに向かってそう言う。

はやて「さつ、さやか？ならええんやけど……」

はやては何だか悲しそうな表情で言ったスバルに困惑しながらもその話を終わらせた。

その様子を剣心達は険しい顔で見つめていた。

剣心「（スバル殿：何かを隠しているようでごさるな……）」

剣心はスバルの表情を見てそう分析した。

イヴ「ところで武田。腹減ったぞ。飯食わせろ」

はやて「うちははやてや！……まあ、ええわ。話もきりのええところやし、六課の食堂に案内するわ」

はやてに案内され皆は食堂へと向かった。

第六訓 久しぶりの再会だと相手は別人みたい（後書き）

銀時「なんか最後の奴気になるんだけど」

支配者「細かい事は気にしないで、ハゲますよ?」

銀時「んだところあ!!」

剣心「次回、『自己紹介は人数が多いと難しい』テイクオフでござる」

第七訓 『自己紹介は人数が多いと難しい』（前書き）

支配者「はゝ、リリカルなのはトスレイヤーズのコラボ小説が見たい」

新八「アンタ前書きで藪から棒に何言ってるの!？」

支配者「だって見たいんだもん。誰か書いてくれないかなあ？」

銀時「だったら自分で書けよ」

支配者「んなこと出来たら苦労しねーんだよ」

フェイト「ははは…『超リリカル銀魂 Strikers』始まります」

第七訓 『自己紹介は人数が多いと難しい』

機動六課・食堂

ティアナ達フォワードメンバー、ヴィータ、シャマル、神楽、新八、月詠、シャナ、セイバー、ヤミ、梶、未央、セツナ、セト、ソルヴァ、ディスク、ブレイド、インデックスは一緒に食事をしていた。既に互いの自己紹介は済んでいる。

エリオ「神楽さんとシャナさんとヤミさんとイヴさんと美琴さんとナギさんと梶さんと未央さんとセツナさんとセトサンとソルヴァさんって、銀時さんや剣心さんと一緒に『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』を解決した、あのみなさんですか!？」

神楽達の名前を聞いたエリオは驚いた。

神楽「そうアル。」

シャナ・セツナ・美琴『そうよ』

セイバー・ヤミ・ソルヴァ『そうですね』

ナギ・イヴ・セト『そうだぞ』

未央「そうだよ」

梶『たぶんそう』

つと、皆は軽く返事をして神楽とイヴとセイバーは山盛りのご飯をおかわりした。ついでにインデックスも

キャラ「す…凄い人達なんですネ」

キャラも驚いてる。

新八「いやゝすごいってもんじゃないですよ。すごいって言うのは戦つてるときだけで、日常だとセツナさんと未央ちゃんと美琴さん以外はあんまりよろしくないんですから」

神楽「んだよ駄目ガネ。私の威厳にケチつけるアルか」

イヴ「そうだぞ。駄目ガネの癖に僕の武勇伝にケチ付けるな」

セイバー「全くですよ。私の騎士王としての威厳を下げる気ですか」

新八「バクバク食つてくるくせに威厳も武勇伝もないだろ!!!」

つと新八は突っ込む。するとティアナが、

ティアナ「えつと・・・あなたは・・・」

新八「あつすいません。僕は志村新八って言います」

新八が自己紹介すると、

ティアナ「ああ！噂であつた”江戸一番のツツコミ使い”って貴方！？」

新八を指差して、ティアナが叫んだ。

新八「えっ！？いや、そりゃあ、まあ…一応僕はツツコミ役ですけど…」

綺麗な女の子から”江戸一番”と言われて、新八は少し照れた。

神楽「新八のくせに照れてんじゃないーヨ。ツツコミ以外地味のくせに」

ナギ「そうだぞ駄目ガネ。突っ込み以外は全部駄目の癖に」

シャナ「そうよ駄目ガネ。眼鏡が本体の癖に」

イヴ「ツツコム以外に存在価値もないくせに」

ヤミ「エッチイだけのロリコン眼鏡の癖に」

梶「役立たず眼鏡の癖に」

インデックス「ツツコム以外の特技もないくせに」

セイバー「変態工口眼鏡の癖に」

アリア「生きる価値もないくせに」

新八「んだとコラアアアア！僕らの世界でツツコム役は、物凄く重要なんだぞオオオオ！！後、ツツコム以外は全部駄目ってなんだああああ！！それにロリコンじゃねえええええ！！！！存在価値がねえとか言うなあああああ！！！！眼鏡が本体でもねーし！！！！変態工口眼鏡でも役立たず眼鏡でもなーい！！！！！！！！！！それに生きる価値はないいくらなんでも酷過ぎんぞコラアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！（激怒）」

クルス「しつ、新八さん！落ち着いてください」

神楽とシャナとナギとイヴとヤミとセイバーと梶とインデックスとアリアの発言にブチキれる新八をクルスが宥める。さすが江戸No. 2のツツコム使いだ。

クルス「なんかいらぬ称号貰った気がするんですけど……」

気のせいだ。

新八「うう……。僕の気持ちが分かってくれるのは同じツツコム役のクルス君だけだよ……」。

クルス「言え、そんな……」

そんな話をしていたら

梶「女装が似合う特技があるだけクルス君のほうが新八より100

倍マシ』

神楽「そうアル。駄目ガネなんかと一緒にしたら山田が可愛そうネ」

イヴ「山田には“パシリ”という特技もあるぞ」

セト「意外と頭もキレるしな」

インデックス「新八みたいにロリコンでもないかも」

ディスク「クルス君は真面目だしねえ」

ナギ「ツツコミのキレもあるし……駄目ガネなんかよりよっぽど存在価値があるな」

新八「んだとコラアアアア！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」

クルス「いや！イヴさん！梶さん！『パシリと女装が似合う特技』って何ですか！！後僕は山田じゃありません！！！！」

神楽達の発言にさらに激しくキレる新八と突っ込むクルス。

梶「ところでエリオ君…だっけ？」

エリオ「ハイ。何ですか？」

そんなツツコミを無視して樞がスケッチブックでエリオに話しかける。

「君……女装が似合うとか言われない？」

エリオ「はあ!？」

セツナ「ちよつ！ 梶！？ あんた何聞いてんの！？」

梶の突然の意見にエリオとセツナが思わず声を上げる。

ナギ「ああ、確かに似合いそうだな。ハヤテと同じで」

神楽「ホントアルな」

セト「容姿も女の子に見えなくもないし」

イヴ「だな。似合いそうだぞ“西田”」

エリオ「いや！似合いませんよ！！後僕は“西田”じゃなくてエリオですから！！」

ハヤテ「お嬢様！僕まで似合いそうって何ですか！！」

ナギと神楽とセトとイヴの発言にエリオとハヤテが突っ込む。後、イヴにエリオの仇名は西田にされてしまった。

梶『似合わないかどうかは試して見れば分かる』

エリオ「わーっ！ちよっと！止めてください！！」

梶が目を光らせてエリオの服を脱がそうとし始めた。まずはズボンを引っ張る。

梶『今日から“男の娘”として生きるべし』

エリオ「嫌ですよ！！」

セツナ「ちよっと！止めなさい梶！！」

ティアナ「何やってんのあんた！！」

梶のエリオへの暴走行為をセツナ、ティアナの2人が止めた。

神楽「何だヨ。面白くなりそうだったのに」

ナギ「何でとめた」

イヴ「面白そうだったのに」

ディスク「ホントよね」

ティアナ・セツナ『アンタ達何言ってるの！！！！！！』

神楽とナギとイヴの発言にティアナとセツナが突っ込んだ。
そしてキャラ口は

キャロ「エッ、エリオ君の…女装……」

何故か鼻血を出して気絶していた。
そして

護「絢子さん…。あれほつといて良いんでしょうか？」

絢子「良いのよ護。護はあんなの気にしなくて。ハイ、あゝん」

護「あ、あゝん」

護と絢子はここでもイチャイチャしていた。護はちよつと罪悪感があつたようだが

上条「（アイツ不幸そうだな）」

一方通行「（うるっせえなあ……）」

照山「（変な感じだな……）」

他の皆もいろいろと意見を心の中で言っていた。

みんなが楽しんで話していると、しばらくして銀時達が出てきた。

はやて「みんな、事件解決お疲れ様。明日の訓練も頑張つてな」

F『はい！』

はやての言葉に、フォワードの三人が応えた。そして、新しく仲間に入る銀時達を紹介した。

はやて「今後、ウチらの仲間になる新しい新人等と、知つてのとおりうち等の世界を救つた英雄を改めて紹介するな」

銀時「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテン志望してまゝす」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。
次に桂が挨拶する。

桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

神楽・新八・ヴィータ・ナギ「だからいちいち好物をいうんじゃない（アル）！！」

神楽と新八とヴィータとナギが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。
ティアナ・エリオ・キャラの3人は銀時のだらけた挨拶と桂のクルボケに自分達の中の英雄のイメージが崩れ落ちていく。

そして最後にスバルとアオヤシャモンが挨拶する。

スバル「わ・・・私、スバル・ナカジマです！新しくフォワード部隊に入りましたので、これからもよろしくお願いします！」
アオヤシャモン「...スバルのパートナーのアオヤシャモンだ.....。
一応よろしく頼む」

銀時と桂とは違って丁寧に挨拶をするスバル。しかし、アオヤシャモンだけはなんだか複雑そうな顔で挨拶する。

エリオとキャラも挨拶する。

エリオ「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします！」

キャラ「わ・・・私はキャラ・ル・ルシエです！こちらは使役竜のフリードです！」

フリード「きゅいい。」

そして最後にティアナが立ち上がって、挨拶をする。

ティアナ「ティアナ・ランスターです。どうぞよろしくお願いします」

す。」

普通に挨拶をすると、はやては銀時達に3人の新人フォアード隊の説明をする。

はやて「桂さん、銀ちゃん、剣ちゃん、スバルに言っておくな。この3人もスバルに劣らない優秀な新人なんやで。エリオはまだ10歳にも関わらずに魔導師ランクは陸戦Bで、階級は三等陸士。使用デバイスは槍型のアームデバイス「ストラーダ」。そんでキャロも階級は三等陸士。使用デバイスはグローブ型のブーストデバイス「ケリュケイオン」。レアスキル「竜召喚」を持つ召喚魔導師なんや」

キャロの竜召喚に驚きだす銀時。

銀時「マジでか！？え・・・何、キャロって竜を召喚できるの！？」

キャロ「は・・・はい」

剣心「ほう...それは凄いでござるな.....」

竜を召喚する事ができるキャロに、銀時はある頼みをする。

銀時「お願い、キャロ！今すぐ竜召喚で「ドラ○ンボール」の「○龍」を召喚して！そうすれば「かめ○め波」が撃てる願いが叶える！」

キャロ「ええー！？」

突如、無茶な頼みに驚きだすキャロに、ティアナが立ち上がる。

ティアナ「なんですか、その「○龍」って！？それより「かめ○め波」ってなんなんですか！？」

訳分らないティアナは銀時につっこみだす。キャロは銀時の無茶なお願いに戸惑っている。

その光景をなのは達は哑然とし、なのは達は苦笑するしかなかった。

神楽「それは良いね！私も卵がけご飯を100杯は食べたいアル」

インデックス「私もお腹いっぱいごはんが食べたいかも！！」

セイバー「私はお茶漬けが1000杯は食べたいです」

イヴ「世界中のカロリーの高い料理全部食べたいぞ」

新八・クルス「まだ食べる気か（ですか）！！」

今度は神楽とインデックスとセイバーとイヴに新八とクルスが突っ込みだすと、続く桂が話に参加する。

桂「ちなみに俺は最高級のそばを頂きたい。」

ティアナ「どんだけそばが好物なのよ！！！！」

ティアナは額に血管を浮かべて、ツツコミだす。

エリザベス「定春に負けないようにもつと目立ちたい」

新八「アンタもいちいち願い事を言うな！」

新八は怒鳴った。ティアナはエリザベスの存在に突っ込みたくなりそうだったが、あえて関わらないほうが良いと考えた。

月詠「わっちは金剛石で作られた超最高級のきせる煙管を頼んで見たいもんじゃ」

新八・ティアナ・クルス「それもはやきせる煙管の常識を破っているじゃねえか（ないの）（ないですか）！！」

とてもボケキヤラとは思えない月詠のボケに反応するかのようになぞ鳴って突っ込む新八とティアナとクルス。

しかし、意外とコンビネーションの良いツツコミである。

シャナ「世界中の甘い食べ物全部欲しい」

セト「世界一の大金持ちになりたい」

ヤミ「世界中のエッチイ人を皆殺しにしてください」

ブレイド「世界中の女の子を俺様のものにー!!」

ソルヴァ「世界の全てを私の物にしるー!!」

照山「世界最強の男になりたいぜ!!」

美琴「限定ゲコ太ストラップが全部欲しいわ」

未央「世界中のぬいぐるみ全部欲しい」

アリア「世界の全てを奴隷にしたい」

梶「世界中の男の子を全部“男の娘”に!!」

新八「テメエら煩惱全開の願いはつか言ってんじゃねー!!」

ティアナ「て言うかヤミさんとソルヴァさんとブレイドさんとアリ

アさんの願ひ問題ありすぎでしょ!!」

クルス「梶さんの願ひは僕に対してなんだか悪寒が!!」

皆好き勝手な願ひばつか言うので新八とティアナとクルスはツツコミまくる。

当麻「幸せになりたい…」

そして当麻はぼそっと自分の密かな願ひを言うのであった。

笑いながらも、はやてはティアナの紹介をする。

はやて「そこでティアナの階級は二等陸士で、使用デバイスは拳銃型のインテリジェントデバイス「クロスミラージュ」。陸士訓練校

での成績は首席卒業をしておるんや」

銀時「は・・・首席卒業って何？」

なにやら首席卒業の事を知らない銀時に、

桂「なんだ銀時。首席卒業の事も分からぬのか？首席卒業というのは成績が誰よりも優秀であり、頂点に立った生徒が卒業する事だ。」

つと、桂が説明する。

剣心「少しくらいは勉強するでござるよ銀時」

剣心が銀時に突っ込んだ。

アオヤシャモン「よくわかんねえな……」

アオヤシャモンはぼそっとそんな事を言った。

そしてはやて、リインフォース、リインは初めて見る月詠とデイス
クと照山と一方通行に近づいて挨拶する。

はやて「はじめまして。機動六課部隊長、八神はやてです」

リインフォース「部隊長補佐のリインフォースです」

リイン「リインフォース・ツヴァイです！」

三人が自己紹介した。

月詠「わっちは月詠じゃ」

照山「俺は照山最次だ。言っとくが“内田”じゃねえからな」
ディスク「私はディスクよ」

一方通行「…一方通行だあ……」

月詠と照山とディスクも自己紹介した。

一方通行だけはなんだか面倒くさそうにそう言った。

そしてエリオは何か話したい事があるのか銀時と剣心に近づく。

エリオ「あの、銀時さん！剣心さん！」

銀時「ん？」

剣心「おろ？」

エリオ「少し…いいですか？」

遠慮がちに銀時と剣心に聞いた。

銀時と剣心とエリオは外に出た。

エリオ「銀時さん、剣心さん。貴方の噂はフェイト隊長から聞いています！」

銀時・剣心「噂？」

一体どんな噂なのか銀時は聞いて見ると、エリオはその噂を銀時と剣心に言った。

エリオ「魔法が使えないけど、『ジュエルシード事件』、『闇の書・ゾーマ事件』を剣だけで解決し、その剣術は稲妻の如く変化して相手を翻弄し、その鬼神の如き強さから『白夜叉』もしくは『エース・オブ・シルバーサムライ』と呼ばれ、そして剣心さんは陸の戦艦と呼ばれる伝説剣技『飛天御剣流』を使い雷の如き速さで敵を倒す強さから、『紅夜叉』あるいは『エース・オブ・レッドサムライ』と呼ばれ管理局内でも有名で知らない人は殆どいない、伝説の二人の武神。」

銀時「え？何？俺達ってそんなに有名なの？」

真剣に説明するエリオに、銀時が尋ねた。

エリオ「はい！なにせあのSSSランクを超える桁違いの強さを誇った魔人王ゾーグを倒して、世界を救った英雄ですから！」

興奮しながらエリオは答えた。

両拳を握って、興奮を抑えられないでいる。そんなもって、銀時と剣心に尊敬にも似た眼差しを向けている。

銀時に尊敬の眼差しを向ける者が、この世にいたとは驚きである。

銀時「え？マジで？ちよっ…その目やめてくんない？あんまり見つめられると、照れちゃうから」

銀時は嬉しいような困ったような、複雑な表情を浮かべた。
しかし、剣心は

剣心『（拙者は英雄などと呼ばれるような存在ではないのでござるがな……）』

剣心は心の中でこんなことを言っていた。剣心は自分のことを英雄

などと呼ばれるような人間ではないと自覚しているのだ。

エリオ「それに、銀時さんと剣心さんの強さは先ほどの奇妙な異性生命体との戦いで見せていただきました。銀時さんと剣心さんだけじゃなく、桂さんに神楽さんにシヤナさん、ヤミさん、セイバーさん、エリザベスさん、絢子さん、植木さん、上条さん、ブレイドさん、イヴさん、セトさん、ソルヴァさん、セツナさん、未央さん、梶さん、ハヤテさん、ヴィルヘルミナさん、アリアさんにあの月詠さんって言う女性と照山さんや一方通行さんも魔法なしであれだけ凄い戦いっぷりをしましたから、今度いつか銀時さんと剣心さんの世界に行って見たいです。」

もしかすれば、銀時達の世界に行けば真の強さとはなんなのかを理解できると確信してなのか、銀時の世界に少し憧れを持つエリオ。
・あつ戦つてた筈なのに新八がのつてねえ。
だが、銀時はそれは辞めた方が良く考える。

銀時「エリオ君、確かに俺の世界の人物は曲者ぞろいが多いかもしれないけど・・・でも時にはおつかねえ人物が山ほどいるんだぞ。例えば、卵で『ダークマター』と呼ばれる『可愛そうな卵』を作れる殺人料理人の極悪女。嫉妬に狂って薙刀振り回して襲い掛かってくる凶暴女、いきなりミサイルをぶっ放してくる殺人兵器、料理にマヨネーズをかける異常な味覚を持ったニコチンマヨラー。弟にしか興味がないブラコン警官。警官なのにしつこく女にストーカーをするゴリラストーカー。相手が困っているのにそれをどす黒く楽しむドS軍団。何度職業を取ろうと、落とされるもしくはクビにされ続けるマダオ。しつこく名前を間違えて何度も仕事をサボる大ボケ馬鹿。天才科学者の癖に大バカとしか思えない行動しかないアホ王女とウサ耳科学者、ちびつて言うと言いがかりばかりつけてくる鎧小僧。女にしか興味がない戦闘バカ。さらには家賃払え払えつ

としつこく言ってきた常識を超えた身体能力を持つスナックババア、鬼のように強くて凶暴な殺人男、チェストをチェリオとか言っているなりぶん殴ってくる白髪女など・・・他にも常識を破った人物だって俺の世界じゃ当たり前のようにいるんだぞ」

エリオ「そ…それは凄いですね…」

剣心「銀時…殺されても拙者は知らんでござるぞ……」

銀時達の世界の説明を聞くエリオは、銀時の世界が予想以上に凄いつて事に苦笑する。そしてこのことを本人達が知れば銀時は殺されると思う剣心。

エリオ「でも・・・なんだか楽しそうな感じですね」

銀時「そうか？」

剣心「そうでござるか？」

普段、色々と巻き込まれてトラブルを起こされる上、酷い目に何度も合ったため、それが楽しそうである事に不思議に思う銀時と剣心むしろ辛いとしか言いようがないのである。

エリオ「・・・それと・・・僕は銀時さんと剣心さんに話しておきたい事があるんです。」

ちよつと悲しそうな表情をするエリオは銀時と剣心に重大な話を話し出す。

銀時「なんだ、話したい事があるなら言ってみろ。」

剣心「言いたければ言っても構わんでござるよ」

銀時は聞くだけ聞いてみようと思えるが、それはとんでもない事である事に気が付く。

エリオ「・・・実は僕、フェイトさんと同じプロジェクトFによって生み出された人造生命体なんです。」

銀時・剣心「な…！？」

銀時と剣心は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

フェイト以外にも、人道的に作られた生命体が存在したなんて事に。

エリオの話からすれば、モンディアル家の病死した一人息子のクローンである。

。ある時両親と引き離されたが、その際に事実を突きつけられた途端に両親が抵抗をやめてしまったこと、また研究施設での非人道的な扱いから一時期重度の人間不信に陥っていた。

その為、当時のエリオは誰も信頼することができず、自分自身も信じる事が出来なかった。

誰にも信頼することができなくなったエリオの前に現れたのが、フェイトだった。

フェイトによつて救い出され管理局の保護を受けてからも荒みきっていたが、魔法を行使して暴れるエリオに対して行ったフェイトの体を張つての真摯な説得と献身をきっかけに急速に立ち直っていく。そして、フェイトから剣心と銀時の話を何度も聞かされた。

自分が最も愛した男であり、『プロジェクトF・A・T・E』の前者の方の産物として生み出されたクローンである自分でも、命を張つてまで守ってくれて、自分だけじゃなく母・プレシアをも救ってくれた恩人である事を。

そして自分自身も剣心と銀時に尊敬する気持ちを持ったのであり、一度会つてみたくなつたのである。

エリオ「だから、僕も銀時さんや剣心さんみたいに、大事なモンを護るという信念を持って強くなりたいです。クローンとしてじゃなくて、1人のエリオとして。」

真実を話したエリオ。

当時は自分自身をも信じることが出来なかったが、それでもフェイトに出会ったことで人間のような心を取り戻したエリオを見て、銀時と剣心はエリオならその思いが出来ることを確信した。

銀時「出来るさ、お前なら。」

銀時は軽くエリオの頭に右手を乗せ、笑いながら言い出す。

銀時「エリオもフェイトがいたから、誰かを信じる気持ちを取り返して強くなっているんじゃないか。・・・だから、誰かや自分も信じる気持ちさえ失わなければ、絶対にテメエ自身の大事なモンを護れると思うぜ」

エリオ「・・・・・・銀時さん」

剣心「それになエリオ殿・・・拙者の知り合いである警察の中に、1人お主と同じ思いをした男がいるでござるよ」

当時のエリオは誰も信じられない事を聞いて、剣心はある人物を思い出してエリオに話し出す。

いとうかもたろう
伊東鴨太郎

真選組に入隊してからまだ浅いが、文武両道で能力的にかなり優れているため参謀の地位を任されており、北辰一刀流免許皆伝の凄腕剣剛であり、その実力は土方に匹敵する程の実力を持っている。

近藤をはじめ真撰組の約半分は『先生』と呼ばれている。だが鬼兵隊と手を組んで新撰組を乗っ取る計画をしていたが、その真の目的は自分を認めてもらう為である。『理解されない』事であると考えており、真撰組に入ったのは自分の『器』を人々から認めってもらう為であった。

そして本当に欲しかったものは、仲間と一緒にいられる『いと絆』であるのだが、それをも忘れていた。

それは幼少時代、学問・剣術も見事で『神童』とも呼ばれていたが、双子の兄の病ばかりに関わっていた両親からは構ってもらえず、誰にも認めてもらえなかった。

それでも誰かが自分を認めてもらえると信じ、ひたすら努力をし続けていたのだが、そんな鴨太郎の気持ちを周囲の者達は理解するどころか、ますます鴨太郎に逆恨みに等しい妬みを抱くばかりであった。

このトラウマから、『孤独』と『一人』を嫌うようになり、自分や誰にも信じる事が出来なかった。

それは、別の意味でエリオに似ている感じであった。

その為、近藤と土方を暗殺するために『鬼兵隊』と手を組んだが、真選組を壊滅させる為の捨て駒として利用されたのである。

だが裏切ってもなお、己に救いの手を差し伸べる近藤達の姿を目の当たりにした事で、本当に欲しかった『いと絆』の事を思い出す。だが死の寸前まで追い込まれ、土方との決闘により倒され、裏切り者ではなく真選組の隊士として、後悔も無くこの世を去る。

剣心「結局伊藤殿は死んでしまったが、結果的には孤独に死ぬこと

は無かったわけござる。それに比べれば、エリオ殿はまだ幸せだ
とおもつてござるよ。」

空を見上げてエリオは伊東と比べてまだマシであると良い出す。

銀時「大きな事件を起こす前にフェイトに会ったお陰で、今もこう
して立派に生きているしよ。

剣心「・・・だから、お主はお主自身として頑張って生きるでござ
るよ。」

エリオにそう言い、中に向かうなか、エリオは銀時と剣心の後ろ姿
を見て銀時の名を叫ぶ。

エリオ「銀時さん、剣心さん！」

エリオに呼ばれて足を止める銀時と剣心。

エリオ「僕、頑張ります。その伊東さんの分まで生きて、大事な人
を護れるぐらいに強くなります！」

エリオはそう言うと、銀時は笑って振り向かず手を振るいながら
去っていく。そしてエリオの中で、また1つ強くなる目的ができた
のであった。

???「強くなりたいか？エリオ」

エリオ「え？」

突如、エリオを呼ぶ声が聞こえた。それは

エリオ「ナツ、ナギさん!？」

なんとエリオに話しかけたのはナギであつた。

ナギ「だから強くなりたいのかと聞いているんだエリオ」

エリオ「え？強く慣れるんですか！？ナギさん！」

ナギ「もちろんだ。私に不可能はない」

ナギは自信満々でエリオにこう言う。一体どこからそんな自信がわいてくるんだろうか？

ナギ「ただし、条件がある」

エリオ「条件？」

ナギ「今日から私の事を“ナギお姉様”と呼ぶのだ！！」

エリオ「ええー！？」

ナギの突然の発言にエリオは慌てふためく。

ナギ「まあ、そうビックリするな。私は可愛い弟が欲しいだけだ。で？どうするんだ？」

ナギはエリオに聞く。

エリオ「ほっ…本当に強く慣れるんですか…？」

ナギ「だから私に不可能はないといっているだろう」

ナギはそう言う。

エリオ「じゃ…じゃあ、ナギさんの事を…ナ…ナ……」

ナギ「ナギお姉様だ」

エリオ「ナ、ナギお姉様」

エリオは困惑しながらもなんとかそう言った。

ナギ「おお、可愛いやつめ。よし、明日訓練が終わってから六課の隊社裏に來い。強くなるための特訓を受けさせてやろう。可愛い弟よ」

エリオ「は…はい…」

そう言つてナギはエリオから離れていった。

ナギ「（グフフフ…うまく言つたぞ。弟候補ゲットだ。ワタルのバカに声が似てるのが氣になるが…奴は紳士だからな。このまま私の理想の弟に育て上げてやるわ！！ワーハッハッハ！！）」

ナギのなんと馬鹿な計画は動き始めていた。

エリオ「（やっぱり銀時さんの世界の人って変な人が多いんだな…）」

エリオはこんな事を思っていた。

機動六課・訓練場。

沢山のビルが並ぶ所に、ティアナ達はいた。

訓練の内容は、自律行動型のロボット『ガジェットドローン』をフォワードの三人で倒すというものだ。

ティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』で狙い撃ちする。キャロは、錬鉄召喚で鎖を出してガジェットの動きを止める。エリオの槍型デバイス『ストライダー』がガジェットを貫く。フリードも炎を吐いてガジェットを攻撃する。

フォワードの三人は、それぞれの魔法を駆使してガジェットを破壊していく。

銀時達とネプテューヌ達は、なのは達と一緒に屋上から訓練の様子を見ている。

スバルも、新人としてティアナ達はどんな訓練を受けているのかをまずは見学している。

やがて銀時が口を開いた。

銀時「うん。これ魔法じゃねーな」

超銀魂世界以外の面々（剣心、新八、クルス、護以外）の全員が、思わずコケそうになった。

なのは「えっと…一応魔法なんですけど」

ハハハ、と苦笑しながらなのはが言った。

神楽「いや機械使っているアル。あれ見ても、魔法ですって言われ
てもピンとこないネ。」

セイバー「そうですね。あれなら”魔術”の方がよっぽど魔法です
よ」

インデックス「機械に頼りすぎかも、あんなの魔法とはいいいがたい
よ。超能力のほうがまだ魔法っぽいかも」

呆れた表情で神楽とセイバーとインデックスが言った。

シャナ「それに何あれ、訓練にしても微温すぎ」

ヤミ「もう少しあらゆる敵に対する訓練をすべきだと思います」
フェイト「ははは…二人は手厳しいね…」

シャナとヤミの厳しい意見にフェイトは苦笑いする。
すると桂がカメラ視線になり、

桂「次回から『機動少女メカニックなのは』スタート。皆、刮目せ
よ」

キリッとした顔で言った。

月詠「いや、勝手にタイトルを変えたらマズイだろう」
ヴィータ「それにカメラはねえよ」

月詠とヴィータがツツコんだ。が、

ナギ「ッラ、もう少し下がれ。エリオの活躍が撮れんだろうが」

何時から持ってたのかハヤテがカメラを回していた。
隣にいるナギは、マイクを持っていた。

新八「あんたらなにやってんの!!!」

新八は怒鳴った。

なのは達は力無く笑った。

なのは「そうだ!」

なのはが何かを思いついた。

みんなの注目がなのはに集まる。

なのは「銀さん達も訓練してみませんか?」

銀時達「は?」

なのはの提案に、銀時達は片眉を上げた。

第七訓 『自己紹介は人数が多いと難しい』（後書き）

桂「次回、『二面バトルは見るのも大変』活目せよ！…じゃなかった。テイクオフ」

第八訓 二面バトルは見るのも大変（前書き）

支配者「ちよつと時間がかかりましたがそのぶん今回は長いです」

銀時「いったいどんな風になってんだ？」

支配者「それは見てのお楽しみ」

剣心「では、『超リリカル銀魂 Strikers』始まるぞござるよ」

第八訓 二面バトルは見るのも大変

銀時はイザという時には頼りになるが、普段はやる気の欠片も見せない男である。

だから、なのはに『訓練をしてみませんか？』と言われた銀時、そしてシャナは、

銀時「んなメンドくせー事やってられつかよ」

シャナ「何で私達がお前達の微温い訓練に付き合わなきゃいけないのよ。時間の無駄」

と心底メンドくさそうに断った。

だが、銀時とシャナの性格を知っているのは達は、これくらいでは諦めなかった。

ちゃんと奥の手を用意してある。

なのはがフェイトに目配せし、フェイトは頷いた。

フェイト「ねえ銀時、シャナ」

フェイトが声をかけた。

銀時「何だ？」

シャナ「何よ？」

銀時とシャナは、絶対に訓練なんてやらねーぞ、というような顔をする。

フェイト「訓練してくれたら、私がチョコレートパフェやフルーツパフェを好きなだけ奢ってあげるよ」

銀時「テメーらア！俺達の活躍、目に焼き付けとけ！！」
シャナ「お前達！私達の強さをその目に焼き付けなさい！！」

と、わずか一秒で銀時とシャナは心変わりした。
皆は呆れてため息をついた。

桂「武士たる者他人の誘惑に負けるとは……銀時、貴様も堕ちたな」

桂は銀時の誘惑の弱さに強い呆れ感を持った。
そんな桂の前にはやてが言う。

はやて「まあまあ。桂さんも訓練してくれたら、うちがそばを好き
なだけ奢ってあげるし」

桂「魔導士達よ！武士の魂、その眼で刮目せよ！」

銀時やシャナに負けない誘惑の弱さで、わずか一秒で心変わりした。
皆は銀時とシャナと桂の誘惑につられたその姿に強く呆れた。

ブレイド「まったく…お前ら何考えてんだよ？俺はやらねえぞ」

ブレイドはメンドくさそうにそう言った。

フェイト「（ねえ、キャラ。こう言って）」

キャラ「（は、はい）」

するとフェイトがキャラに耳打ちをした。
そしてキャラがやってきて

キャラ「あの、私ブレイドさんが戦う所も見たいです！」
ブレイド「君の為に僕は戦うー！！」

全『（僕って言っちゃったよ…）』

ブレイドまでも一瞬で心変わりしたので皆はさらに呆れ返った。
幼女に弱いブレイドの弱点を付いたフェイトの仕業である。

フォワード一同の訓練を終わりにし、銀時達もガジェットを倒す訓練をする事になった。

*

スバル達は、なのは達と一緒に屋上に来ている。

スバルは内心わくわくしていた。これから、あの憧れの銀時と剣心の訓練が見られるのだ。

スバル「楽しみだな！ね！アオヤシャモン」

アオヤシャモン「あ？まあな」

スバルは、本当に楽しそうな笑みを浮かべてアオヤシャモンと話している。

アオヤシャモンはなんだかどっちでも良さそうな気がするが

実際、スバルはあのレアモン戦で銀時と剣心と桂と共に戦っていたが、そんなにその眼に活黙しておらず、ちゃんとこの眼で見えて見たいと思っている。

エリオとキャロも、銀時達の訓練がどのような者なのか楽しみにしていた。

一方ティアナは、それほどテンションは高くはなかった。

ティアナ「（あの人は凄いかもしれないけど、魔導師に比べれば大した事ないわよ）」

つと、ティアナはいまだにこんな事を思っていたからである。ティアナとしては魔法以外にも強い力があるなんて認めたくなかったのだ。

キヤロ「あれ？ナギさん達は参加しないんですか？」

キヤロは不思議そうにそう言った。

ここにはなのは達と一緒にナギ、クルス、護、ディスク、梶、インデックスの6人がいた。

ナギ「アホかあ。私はか弱いんだよ。訓練なんかしてたまるか」

クルス「すいません。僕戦闘能力なくて…」

護「僕もちよつと…」

インデックス「私はシスターさんだから戦いなんかしないんだよ。と言うか出来ないし…」

ディスク「私は分析や機械いじりなら得意なんだけど戦闘はちよつとね」

梶『私の能力ロボットには効かないから無理』

六人はそれぞれ理由を言った。

そして、下にいる銀時達は、なのはからの開始合図を待っていた。

月詠「何故わつちまで、訓練に参加しなければならんのじゃ？」

一方通行「何で俺までこんなメンドクセエ事しなきゃ行けねえんだよ…」

セト「何で僕までこんな一銭にもならないような事しなきゃいけないんだ？」

ヴィルヘルミナ「いい迷惑であります」

ソルヴァ「全くです」
アリア「ホントよも」

月詠、一方通行、セト、ヴィルヘルミナ、ソルヴァ、アリアの6人は納得がいかなかった。

銀時「ままま。いいじゃねーか。訓練すればチョコレートパフェが食えて、みんなが幸せになれんじゃねーか」

シヤナ「早々甘い物一杯食べたら皆幸せじゃない」

桂「うむ、そばも食い放題となれば、まさに極楽の幸せの瞬間である」

ブレイド「そうだ。女の子が応援してくれるなんてそれだけで幸せじゃねえか」

月詠「それは、ぬしらしく幸せになつとらんぞ」

一方通行「そうだ。テメエらしく幸せになってねえじゃねえかア……」
剣心「まあまあ」

銀時達を睨みながら、月詠と一方通行がツツコんだ。そして剣心がそれを宥めた。

神楽「でも見ているだけじゃつまないアル。私も付き合ってやるね」

エリザベス『たまには運動するのも良いですし』

植木・当麻「まあ、たまにはいいか」

セツナ「まあ訓練ならいつもテストメント相手にやってるし」

未央「だよな」

セイバー「騎士たるもの日頃の鍛錬や訓練は欠かせませんしね」

美琴「暇つぶしにはなるかしらね」

絢子「護にいい所見せるチャンスね」

照山「ロボット相手なら好きなだけボコボコに出来るしな」

ヤミ「まあ、いいでしょう」

ハヤテ「お嬢様にいい所お見せしますよ！」
イヴ「あゝだる」

神楽と照山、絢子、ハヤテ、美琴も拳をボキボキと鳴らし、セイバーは不可視の剣を持ち、ヤミは普通に立ってエリザベスは桂の隣でボートを構え、植木と当麻は腕を組みながら言った。イヴはだるそうだった。

なのは

「みなさん。準備はいいですか？」

屋上にいるなのはが聞いてきた。

銀時

「いつでもいいぜ」

剣心

「構わんでござるよ」

神楽

「かかってくるアル」

シャナ

「さつさと済ませるわよ」

ヤミ

「さて、はじめますか」

セイバー

「騎士王の力をお見せしましょう」

桂

「こちらの準備は万全だ」

エリザベス

『OK！』

新八

「オツケイですよ」

ハヤテ

「バッチリですよ」

未央

「いいよ」

当麻

「いいぜ」

植木

「俺も」

絢子・美琴・セツナ

「早くしてよ」「」

ブレイド・照山

「おうよ！」「」

月詠

「不本意だが、まあよかるう」

ヴィルヘルミナ

「早くしてほしいのであります。」

アリア

「やるからにはさっさと終わらせましょ」

イヴ・セト・ソルヴァ・一方通行

『メンドくさ…』

皆はそれぞれ返事をした。

すると皆の前に三百体ものガジェットが現れた。

なのはが開始の合図をする。

なのは「襲い掛かるガジェットを10分以内に破壊。それじゃ、ミッションスタート！」

三百体のガジェットが、一斉に銀時達に襲い掛かる。

十体のガジェットが銀時と剣心に向かって、中心にある黄色いレンズから光線を放った。

銀時と剣心はガジェットの前から消えた。

銀時「遅せえ」

剣心「遅いでござるな」

一瞬でガジェットの横に移り、木刀『洞爺湖』と逆刃刀『真打』をガジェットに向かって、横薙ぎに振りぬく。

十体のガジェットは一瞬で横真つ二つに斬られた。

すかさず銀時は、近くにいるガジェットを縦に斬り、剣心は刀を抜くそぶりを見せ、その刹那の瞬間にガジェットをバラバラにした。

F「早い!？」

フォアード部隊達は驚いた。

動きが素早く、ガジェットを木刀や刀だけで斬り裂いているのだから。

銀時「はいイイイ!次イイイ!!」

剣心「ハアアアアア!!」

銀時と剣心は次々とガジェットを破壊していく。

剣心「(ロボット相手ならこの技を使っても大丈夫でござるな) 飛天御剣流奥義、雷龍閃!!」

剣心は特殊な気の力を込めて雷撃を発生させ雷の剣戟を放った。その威力に15体ものガジェットが粉々に粉碎された。雷龍閃は強力

な雷の力を特殊な気の力で発生させて相手に浴びせる奥義の一つである。（この技は実際にもゲームの技として存在しているがこの小説ではオリ設定です）もっともこの技は加減効かない上に威力がありすぎて危険な為剣心は生き物相手には使用していないらしい。

桂「動きが鈍い！」

エリザベス「なめとんのかゴルアー！」

桂もガジェットの攻撃を避け、銀時と剣心が続くかのように複数のガジェットを次々と斬り、その隣でエリザベスもボートで剣を振り回すかのような勢いで桂に遅れないようにガジェットを破壊する。

神楽「ほあちゃあああああああああああああー！」

その反対側に、神楽は傘を豪快に振り回してガジェットを粉碎し、時には殴ったり蹴ったりとしてガジェットを破壊し続ける。

そしてガジェットを踏み台にして高くジャンプし、落下加速を利用して傘を大きく振るうと、一気に五体のガジェットを押しつぶすかのように破壊する。

シャナ「遅すぎて話にならない」

シャナは炎を纏った刀で一瞬で十体ものガジェットを切り裂く。

F「あつちも速い！」

シャナ「さつさと終わらせるー！」

高く飛び上がってガジェットを真つ二つにしたりと変幻自在かつ目にも止まらぬ速さの見事な剣技だ。しかも強力な火炎攻撃も含まれ

ている。

セイバー「この程度ですか！」

ヤミ「動く必要ありませんね」

セイバーも女性とは思えないほどの速さと豪快かつ見事な剣技で次々ガジェットを不可視の剣で一気に八体も切り裂く。まさにその速さは神速である。ヤミはそこから一步も動かずに髪の毛を巨大な拳に変えて回りの数十体のハエ叩きのようにガジェットを叩き潰していく。殴られた後はクレーターが出来ている。

ブレイド「オラオラオラアアア！！！！！」

ハヤテ「こんなものですか！？」

絢子「ツマラナイわね！」

ブレイドとハヤテも凄まじいまでの破壊力でパンチだけで次々とガジェットを粉碎していく。絢子に至っては手を振っただけで火炎や水流を作り出しガジェットを破壊する。

イヴ「こんなんでも僕の相手が勤まると思ってるのか！？」

セト「鈍過ぎるぞ！」

ソルヴァ「バカにしてんのかコラア！！！」

イヴはドッペルゲンガーの能力で手を金属に変えてガジェットを殴り潰す。

セトは重力作成グラビトンの力で数十体のガジェットを中に浮かび上がらせて重力の檻で一気に破壊する。

ソルヴァはいきなり顔を凶悪化してガジェット達を磁力操作で吹っ飛ばした。

ヴィルヘルミナ「動きが単調すぎるのであります」

ヴィルヘルミナはリボンを無尽蔵に伸ばしてガジェットを盾一列に五体以上貫き、

ヴィルヘルミナ「時間の無駄でありますな……」

リボンを一纏めにしドリルの様に放って二十体ものガジェットを削岩機で削るかのように粉々にする。

新八「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

奥のあたりから、新八はガジェットを木刀で次々と破壊する。心なしか新八の動きがすごく速い気がする。

新八「（なのはちゃんが僕を見ている。ここで活躍しないで何が男だ。）おら、かかってこい鉄屑ども……！！！！！！！！！！」

愛の力で潜在能力を発揮するとはまさにこのことである。しかし、とつくの昔にこいつの恋は終わっているのだが

照山「うらああああ！！！！」

照山は炎を纏った拳『リトル・ボーイ』で次々とガジェットを殴り壊す。ガジェットの残骸は燃えている。

セツナ「未央、梶の分までいいとこ見せるわよ！」

未央「んい！」

背中あわせになっているセツナと未央。二人の周りには、十五体の

ガジェットが壊れていた

セツナ「デーンドライブ・F・H!!」

未央「そうれ〜っと！」

セツナはマツハ2の目で全く追えないほどの速さでガジェット数十体を一瞬で破壊する。

未央はそこらの瓦礫を異常なまでの怪力でぶん投げまくってガジェットを木っ端微塵にしまくる。

美琴「飛ばしていくわよ！」

美琴は電撃の槍を連続で飛ばして遠くにいる数体のガジェットを破壊して、近くにいるガジェットは砂鉄を利用したチエーンソーの武器で切りまくる。

アリア「いつもやってる訓練の方がずっと簡単ね」

アリアは二丁拳銃で正確にガジェットのレーザー光を打ち抜き、障壁で防御された場合は後ろに回りこんで、ガジェットを真つ二つに切り裂く。

植木「『鉄』!!」

植木はゴミを木に変えた後自身の能力で巨大な大砲を作り出し

植木「おっしやあ！」

その大砲から放たれた砲弾は三十体以上ものガジェットを巻き込んで飛んで行きビル事完全に破壊した。障壁を張って防御するガジェ

ツトもいるが何の防御にもならず一瞬で障壁諸共破壊される。破壊力だけなら随一である。

月詠は複数のクナイを五体のガジェットに向けて放った。ガジェットは障壁を張ってクナイを防ぐ。

月詠「後ろがガラ空きじゃ」

ガジェットの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。

クナイは障壁が張られていないガジェット達の背中を貫き、中の動力炉を破壊した。

一方通行「メンドクせエ……」

当麻「まあそう言っなよ最強」

一方通行はベクトル操作の力で大量の瓦礫や鉄骨をガジェットに向けて放ちガジェットの次々と壊す。鉄骨はガジェットの障壁ごと破壊して中の動力炉を貫く。そして上条は右手に『幻想殺し（イマジンブレイカー）』でガジェットのレーザーを打ち消し強力なパンチでガジェットの破壊する。

訓練が始まって一分も経過しない内に、三百体のガジェットは全て破壊された。

訓練の様子を見ていたスバル達は呆然となる。

銀時達は武器をしまった。

銀時「チョコレートパフェゲットだな」

シヤナ「フルーッパフェもゲットね」

剣心「やれやれ」

銀時とシャナは満足そうに笑っている。

剣心は苦笑いをしていたが

神楽「私も後でなのはちゃん達にすこんぶを奢ってもらっアル」

後ですこんぶを奢らせようと神楽は考える。

セイバー「もう終わりですか？」

セイバーはつまらなさそうに剣をしまっ。

ヤミ「そうみたいですな」

ヤミも髪の毛を元に戻す。

ブレイド（キャラたんもみてくれたかな）

ブレイドはこんな事を思っていた。

新八（これでなのはちゃんにいい所みせられたかな？）

新八はそんな事を考えている。

イヴ「腹減った…」

イヴはカロリーの消費のしすぎの様である。

セツナ「もうお終い？」

未央「ツマンないね」

照山「こんなんでも終わりか？」

セツナと未央、照山は物足りなさそうである。

桂「デジモンやえいりあんに比べればガジェットもたいした事はないな」

エリザベス『全くです』

桂とエリザベスは物足りないと言った感じである。

美琴「楽勝ね」

美琴は肩を回しながらそう言った。

アリア「まあまあ運動にはなったわね」

アリアは銃を回した後シリンダーにしまう。

月詠「だからわっちは乗り気じゃなかったんじゃ」

月詠は再び煙管を口にくわえる。

セト「やっぱり時間の無駄だったな」

ソルヴァ「全くですね」

セトとソルヴァはまだ文句を言っていた。

ハヤテ「お嬢様にいい所を見せられたでしょうか？カルメルさん」
ヴィルヘルミナ「さあ……？」

ハヤテとヴィルヘルミナは軽い感じで世間話をしていた。

絢子「護もちゃんと見ててくれたかしら？」

絢子は軽くこんな事を呟いた。

植木「いやーいい運動になったな」

植木はうんと大きく腕を上げた。

当麻「たまには運動すんのもいいだろ？最強」

一方通行「運動にしても温過ぎんだろぅがア…」

当麻の言葉に一方通行はダルそうにポケットに手を入れる。

全員、まだまだ全然余裕そうである。

なのは

「やっぱり、これくらいじゃ簡単すぎたね」

なのはが言った。

フェイト

「銀時と神楽とシャナとヤミとセイバーの強さは相変わらずだけど、他の皆もやっぱり凄いね」

はやて

「桂さんの剣術も良え腕やったな」

ヴィータ

「ああ、にしてもエリザベスって、あんなに強いんだな」
シグナム

「それに、以前の『レアモン』と言う異種生命体との戦いで見せた月詠という女性と照山と一方通行と言う二人の男の實力、やはりかなりの手練だ」

リン

「皆さん凄いです」

フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、リンも、それぞれの感想を言った。

エリオ

「あの！」

エリオが声を上げた。

エリオ

「銀時さん達が攻撃した時、『AMF』が効いてなかったみたいなんですけど……」

『AMF』とは、攻撃魔法を掻き消すシールドみたいなものである。

フェイト

「銀時達は魔法を使っていないんだ。だから『AMF』は、銀時達には何の効果もないんだよ」

キャロ

「えっ！？そうなんですか!?!」

キャロが驚きの声を上げる。

一分もかからずに、三百体のガジェットを倒したのも驚きだが、魔法を全く使っていない事にも驚いた。

キャロ「……ってあれ？ 絢子さんや美琴さん植木さんにセトさん、ソルヴァさんに照山さん、一方通行さん達は魔法を使ってたような気が」

ナギ「アレは魔法ではなく超能力だ。だからAMFなど役には立たん」

キャロ「えっ？ アレ魔法じゃないんですか？」

キャロの疑問にナギが答えた。

ナギ「まあな。因みに超能力使う奴らは能力者と言われていてな。REVELEごとに強さが分けられる。REVELE1から7まであつてな。未央とセツナと照山とセト、ソルヴァ、そしてそこにいる梶はREVELE5、美琴とイヴはREVELE6、絢子と植木と一方通行とあのロリコンは最高REVELEの7だ」

エリオ「あの、因みにREVELE7ってどれくらい強いんですか？」

ナギ「軍隊と戦っても勝てる位強いぞ」

F「は？」

フォワードの皆はナギの言葉に目を点にした。

ナギ「だって絢子の奴は素手でもテストメントの三百機や四百機位簡単にお釈迦にしちゃうしミサイルでも壊せんような隔壁を破壊するような奴だ。植木の『鉄』^{くろがね}は前に小さいとは言え山の半分以上を吹き飛ばした事があるし、一方通行の奴にいたってはこの二人が一緒にいかかって行ってもまず勝てんしな。何せベクトル操作の能力で核爆弾や隕石が直撃したって傷一つ付かん上にジェット機と追いかけてこしたって勝てるような奴なんだ。まあ色々会って、その力は時間制限付きになっちゃたんだがな。それに美琴の奴も最大10億ボルトの電撃を操れるしな。本物の落雷も呼べるし、そのおかげでもうすぐREVELE7昇格らしい」

ナギが軽く言ったこの言葉にフォワード三人の顔が真っ青になり言葉を失った。そんな無茶苦茶な強さがこんなに存在しているのか？と正直思った。

因みにこの物語の一方通行は能力使用は時間制限付きになっ
ていますが、リハビリや天人の技術力の高さなどによる治療の甲斐もあつて杖なしでも歩けるようになった上に一時間位能力を使えるようになっていきます。

ナギ「ああ、言っ
て置くがどんな能力にも一応弱点はあるぞ。それに戦闘経験とかなら銀時や剣心の方が上だし」

ナギはこう言うがフォワードの皆はもう聞いていなかった。

フェイト「ねえナギ。“テストメント”ってなんなの？」

ナギ「所轄お前らの世界の“ガジェット”みたいなもんだ。だがはつきり言っ
てあんなのより高性能だぞ？何せ、対能力者用の防衛兵器だからな」

フェイトがテストメントについて聞いて来たのでナギが軽く説明した。

スバル

「銀さんも剣さんも、スゴイ！」

アオヤシャモン

「確かに凄えな…」

スバルは興奮してはしゃいでいる。

アオヤシャモンも感心しているようだ。

みんなが銀時達の強さに騒いでる中、リインがスバルに言い出す。

リン

「次は、スバルさんとアオヤシャモン君の番です」

スバル

「はい！」

アオヤシャモン

「ああ」

リンの言葉に二人は返事をして、訓練所に向かう。

今度は、ティアナ達と一緒にガジェット破壊のチームワークの訓練をするかと思いきや、スバルの受ける訓練は思わぬものであった。スバルが銀時達の目の前に行ったからだ。

スバル

「あの…お願いがあります」

スバルが銀時たちに言った。

銀時

「何だ？スバル」

剣心

「お願いとは？」

スバルはある人物の前に立った。その人物とは…

シャナ

「何よ…お前何か用なの？」

その人物はシャナだった。

スバル

「私と…手合わせしてください！」

一同

「……えええっ！！！！」

銀時たちはスバルの言葉に驚いた。

シャナ

「何で私が？お前と…？」

スバル

「それは…シャナさんは刀を使うし、それにさっきの剣技もお見事でした。セイバーさんも言いと思いましたけどやはり日本刀を使うあなたと戦ってみたいんです。お願いします！」

スバルはそう言っ頭を下げた。

シャナは少し考えた素振りを見せる。そして

シャナ「別にいいけど…さっきのじゃ全然物足りないし…でもいいの？手加減できないわよ？最悪命の補償もしかねるけど、お前…覚悟は出来てるの？」

そう言っシャナは少女とはとても思えないほどの凄まじいまでの威圧感を放つ。

それを感じたのか、スバルや近くにいたエリオやキャラまで少しビクッとなるがスバルはすぐに顔を戻して

スバル「はい！覚悟があります！」

スバルの返事にシャナは

シャナ「いいわよ。なら」

シャナはそう言った。

すると剣心と銀時が近づいてきて

剣心「シャナ殿。スバル殿は…」

シャナ「分かっている。アイツかなり強いんでしょ？」

銀時「分かんのか？」

シャナ「それ位見れば分かる」

シャナはそう言った。シャナはこう見えても歴戦の実力者であるし、相手の実力を見切ることにも意外と長けているのである。剣術における“先読み”の技術のようなものだ。それに実際は原作の様に年を取らないだけで実は相当のと…

シャナ「なにか言った？作者…」

シャナが黒いオーラを纏って言った。

イエ、ナンデモアリマセン。

アオヤシャモン「じゃあ、俺はどうすっかな…」

アオヤシャモンが腕を後ろに巻くって考えていると

???「では私がお前の相手をしよう」

アオヤシャモン「え？」

そう言って、アオヤシャモンの前にやってきたのはシグナムであった。

シグナム「お前とスバルの实力は剣心達から聞いている。ガジェットとの訓練の前に直接实力を見せてもらう」

シグナムはそう言つてアオヤシャモンの前に立つ。すでにバリアジヤケットは展開されている。

アオヤシャモンはおろか、なのは達まで驚いていた。確かにアオヤシャモンは強いだろうがシグナムと模擬戦出来るほどとは思っていないのである。

アオヤシャモン「俺…一応新人の使い魔って事になってんだぜ？なのにいきなり副隊長とやんのかよ？ガジェットとかとの訓練は良いのか？」

シグナム「その前に實力を教えてもらう」

シグナムはハッキリとそう言った。

シグナム（本来なら先にスバルとやりたかったのだが、先にスバルがシャナを指名してしまったのでは無下には出来んからな）

シグナムは心の中でこんなことも思っていた。本来自分がスバルとやるつもりだったのだが、スバルが先にシャナとたたかいたたいというのであおやしゃもんをしめいたのだ。しかし、シグナムとしてはアオヤシャモンとも戦ってみたいというのも事実であった。デジモンの実力が高いことはガイオウモンと戦ったことがあるシグナムには分かっていたからだ。

そして、アオヤシャモンは

アオヤシャモン「まあ、イヤ。ガラクタ相手じゃ物足りないし受けてやるよ」

アオヤシャモンは、なぜかシグナムの誘いに乗った。

シグナム「そうか！では準備ができたなら訓練場に来い！！」
アオヤシャモン「オッケー！」

シグナムは訓練場へと飛んで行った。

新八「ちよつとアオヤシャモン君。なんでシグナムさんの申し出を受けたの？あの人本気ですよ」
なのは「そうだよ。シグナムさん、かなり本気でくるよ？」

新八となのはは心配してやめさせようとするが、

アオヤシャモン「ふん、そうなんだ」

それがどうかしたのか？とでも言いたそうな顔をしていた。

ティアナ「そうなんだ、じゃないわよ！シグナム副隊長は強いんだよ」
「！」

つとティアナが怒って言う。が、

銀時「まあ受けてやっても良いんじゃないか？」
剣心「そつでござるよ」

つと銀時と剣心が言う。

桂「うむ。スバル殿やアオヤシャモン殿の実力を見るにいい機会だ。やらせてやれ」

エリザベス「右に同じく」

セイバー「そうですね。私もスバルやアオヤシャモンの实力を見てみたいです」

桂・エリザベス・セイバーも賛成している。

新八「でも、大丈夫なんですか？特にスバルさんの相手“シャナ”ちゃんですよ？とても相手になるとは思えないんですけど…」

ヤミ「そうですよ。シャナは木刀でも岩とかコンクリートの壁でも簡単に細切れにしますし、手加減とかも苦手なんですよ？」

新八とヤミは流石にスバルの相手がシャナでは不安だった。シャナはそれ程までに強いからだ。

剣心「心配いらんでござるよ。スバル殿の实力は相当のものでござる。確かに勝てるかどうかは微妙でござるがな」

銀時「まあ、やらせて見りゃいいじゃねえか」

剣心と銀時は軽い気持ちでこう言う。

そしてスバルとシャナとアオヤシャモンとシグナムの模擬戦が始まるのであった。

スバルも訓練服からバリアジャケットに展開する。

シャナも愛刀である大太刀、贄殿遮那を構える。

そしてシャナ対スバル。

シャナ「いつでも良いわよ」

スバル「はい！」

シャナとスバルは凄まじいまでの速さでお互いに剣をぶつけ合った。

シャナ「（こいつ…思った以上に速いわね…）」

シャナは内心スバルの速さに驚いた。正直ついて来られない位の速さで動いたつもりだったからだ。

シャナ「はあっ！」

スバル「ふあっ！」

シャナは刀を大きく振り、スバルも刀を素早く振り、二つの剣がぶつかり合い火花が散る。

体は小さいがシャナの方が力は断然上であり、スバルは少し押され始める。

そしてスバルは後ろにバックしてシグナムの攻撃を受け流すと、シヤナは攻撃を受けてはいけないと後方に大きくバックするが……

シュウン！！

シャナ「！？（速いつ！？）」

突如、スバルが消えた事でシャナは驚きだす。

これぞスバルの刹那の瞬間移動術であり、刹那と思わせる目にも見えない速さでダッシュしているのである。“瞬動術”と同等の速度と言えるだろう。

シャナ「くっ!!」

ガキン!!

剣士としての感でスバルの神速居合の一撃を防ぐシャナ。

いつの間にかスバルが『テイルヴィングエア』でシャナを襲いだした事には誰もが驚く。(銀時、桂、剣心、なのはの4人は除いて)それだけで終わらず、スバルの連続剣は続いてシャナを襲う。

スバル「はあああああああああ!!」

スバルの神速の速さの剣技が炸裂し、横振り、なぎ払い、突き、面、逆胴など様々な連係剣技を炸裂させ、神速の連激を炸裂させる。

純粹な剣技であるだけに、魔力持つにも拘らず一切使っていない。それなのになりの速度でシャナと遣り合っている。

その様子を上で見ていた神楽達は驚いていた。

神楽「シャナが押されてるアル!」

新八「マジですか!?あのシャナちゃんが…」

神楽と新八は驚いていた。シャナも相当な達人の領域に入るほどの剣客並の実力者である。速度は神速、パワーも相当なものだ。それなのに、スバルはシャナを押しているのだから

ヤミ「たいした速さですね」

セイバー「ええ、ひよつとしたら最速のサーヴァントである“ランサー”以上かも知れませんか」

ヤミもスバルの速さと剣術の鋭さに感心している。セイバーもひよ

つとしたらスバルの速度はサーヴァントよりも速いんじゃないかと思ってしまう。

銀時「もつとも…シヤナは本気じゃねえだろうがな」

剣心「そうでござろうな」

ティアナ「えッ！？あれで本気じゃないんですか！？」

銀時と剣心の言葉にティアナは驚く。

銀時「あいつはまだ炎さえ出してねえ」

剣心「アレでは実力の半分も出してはいないでござろう」

エリオ「そつ、そんな…」

その言葉にフォワードの皆は驚きですが

剣心「とは言え…そろそろ少しはシヤナ殿も本気になるでござろうな」

剣心はそう言つてまた戦っている二人に視線を向ける。

シヤナ「（こいつ…思ったよりもやるわね）」

シヤナもシヤナでスバルの速さと剣術に感心していた。

しかし、シヤナは本気ではない。飽く迄様子見の状態である。その証拠にまだ炎を使っていないのだから

シヤナ「お前結構やるわね」

スバル「そちらこそ！」

二人とも結構余裕そうに会話しながら剣を交えている

そして、シャナはスバルの剣撃を防ぐと、なぎ払うかのように押し返し、スバルも跳躍して体を回転させて着地する。

シャナ「（少しだけ本気を出してみるか…）」

シャナはそう言うのと凄まじい炎を刀身に纏わせた。

スバル「やば！」

スバルもあれを喰らえばひとたまりも無いと確信する。

シャナ「“炎龍旋尾”！！！！」

高速でスバルに接近し、炎を纏った贅殿遮那を横薙ぎに振るった。そのときまるで龍が尻尾を振るったときに発生する衝撃波のように炎の波がスバルを襲った。

スバルにその攻撃が当たる直前、スバルは魔力をテイルヴィングエアに収束させると、蒼い炎が発生しシャナと同等の剣技を繰り出した。

スバル「天魔御剣流 蒼龍波閃！！」

スバルがテイルヴィングエアを横薙ぎに振るうと蒼い炎の衝撃波が発生し炎龍旋尾と相殺させた。

シャナ「なっ！？（今のを打ち消した！？）」

攻撃を相殺させられたシャナは驚きを隠せなかった。

スバル「うおおおおおおお！！」

シャナ「ちいっ！」

そしてスバルはその直後に回転して刀を下斜め右から振り上げようとする。

しかし、シャナは大きくジャンプして回避すると、スバルから15m程離れた場所で着地すると、右腕の襟の部分に少し斬れた後が残された。

シャナ「（見切ったつもりでいたけど…）」

シャナはスバルの剣筋を見切ったつもりで紙一重で交わしたつもりだったのだがスバルが予想以上に速かった為にかわしきれなかったのである。

そしてスバルは反撃するかのように、精製された魔力の剣を20本だす。

その魔力の剣はビリビリと電力に包まれており、かなり強力そうであった。

スバル「エクスキュート・ザ・ソードブリッツ！」

2本ずつ20本の魔力の剣が一斉に放たれ、稲光の閃光の如くの速さでシャナを襲う。

シャナ「だったらこっちも！！」

シャナもそう言うと言を自在に操り空中に灼熱に燃えるスバルと同じように20本もの炎の刀を作り出す。

シャナ「炎魔連刃！！」

炎を纏った20本の炎刀がスバルの放った20本の魔力刀を相殺させた。

スバル「わっ!？」

スバルも自身の技がこうも容易く相殺された事に驚いた。

シャナ「さっきのお返し」

シャナは軽く笑みを見せた顔でスバルにそう言う。

スバル「(やっぱりシャナさん…強い、でも!)」

スバルは再びテイルウィングエアを強く握る。

スバル「まだまだこれからです!」

シャナ「そうこなくちゃね。そうでなきゃ…興奮めする!」

二人は再び凄まじい速さで接近し

スバル「てやあああああああああああ!」

シャナ「はあああああああああああ!」

ガキキキキン!!ガキャン!!ガキキン!!キイイイン!!ガ
キヤキキキキキン!!ガキイイイイン!!

再び神速同士の激しい打ち合いを開始した。

一方、こちらはシグナム対アオヤシャモン

シグナム「ハアアアアアアア！」

シグナムは常人とは思えない速さでアオヤシャモンに斬りかかっている。

しかし、

ヒヨイヒヨイツ！

アオヤシャモンは全て紙一重でシグナムの剣戟を交わしていた。

アオヤシャモン「どうしたよ？全然当たらないぜ？」

シグナム「くっ！ちょこまかと！！」

シグナムはかなりの速さでアオヤシャモンのいる方向に斬りかかる。だがアオヤシャモンはシグナムの剣をジャンプでかわすとレヴァンティンの上に乗りがかった。

シグナム「なっ！？」

これにはシグナムも驚きを隠せなかった。

アオヤシャモン「どうしたよ？まだ本気じゃねえんだろ？本気でこないと痛い目見るぜ？」

アオヤシャモンはそう言つてレヴァンティンの上から飛び掛るとシグナムに刀を向けた。

アオヤシャモン「閃光斬！！」

アオヤシャモンは刀の切っ先から無数の閃光の刃を放った。

シグナム「くっ！」

シグナムはそれを間一髪でかわし再び距離をとった。

一方、遠くで見ているなのは達は、

フェイト「うそ、シグナムの攻撃をかわしてる」

なのは「アオヤシャモン君…すごい」

銀時「やるじゃねえか」

剣心「うむ、やはりアオヤシャモン殿もスバル殿に引けを取らぬ実力の様でござるな」

絢子「思った以上の実力ねスバルもアイツも」

美琴「これなら高REVEAL能力者相手でも十分通用するわね」

フェイトが驚き、なのはと銀時、剣心、絢子、美琴は感心している。

ナギ「私のやった卵からあんな奴が生まれるとは…（あの卵、ガイオウモンのデータを下にしているんなデータ組み合わせで適当に作った奴だったんだけどな…それにスバルのデバイスが原作と全然違うのはどういう事だ？確かスバルの使用デバイスって、原作だと拳装着型アームドデバイスの『リボルバーナックル』とインラインスケット型インテリジェントデバイスの『マッハキャリバー』だよな！？それがどうして日本刀になってるんだ？やはり私たちが関わったせいかな？なのはではなく私や銀時達が助けたから未来が変わったのか？）」

ナギは心の中でこんな事を思っていた。スバルの使用デバイスが原作と全然違うからである。おそらくなのはではなく自分や銀時達がスバルを助けたために御らが変わってしまったのだらうとナギは画

策する。

ナギ「（まあ、いいか。面白いし）」

ナギは考えをすっかり入れ替えたかのようにこんな事を思った。

おいおい……いいのかよ。

まア、とりあえず視点を戦いのほうに戻す。

シグナム（本気ではないといえ、私の攻撃をかわすとは……しかもあの表情からすると奴は本気を出していない）

本気を出さず余裕なアオヤシャモンに対し、シグナムは焦っている。

シグナム「（ここからは本気でいくぞ！）レヴァンティン！カートリッジロード！！」

ガシャン

カートリッジを1つロードする。

直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

アオヤシャモン「うわ！やべっ！」

アオヤシャモンは驚く。おそらくアレを食らえば無事ではすまない。

シグナム「紫電一閃！！！」

シグナムの十八番である紫電一閃を放つが、アオヤシャモンは愛刀・蒼斬丸に強力な気の力を貯めると『紫電一閃』を間一髪で受け流した。

シグナム「何!？」

攻撃を受け流された事にシグナムは驚きを隠せなかった。

そして、アオヤシャモンは足にエネルギーを貯めると爆発的速度でシグナムの目の前に現れた。

シグナム「なっ!？」

アオヤシャモン「ニン♪」

シグナムの目の前に現れたアオヤシャモンは少し憎たらしい笑顔を見せると

アオヤシャモン「おりゃあ!！」

シグナムに向かって蒼斬丸を振り下ろす。

シグナムはそれを何とか受け止める。

しかし、

アオヤシャモン「おりゃッ!」

シグナム「がつ!」

アオヤシャモンはシグナムの顎をけりで打ち上げシグナムを吹き飛ばす。

アオヤシャモン「そらそらそらあっ!！」

ガキキキキキイン!!

シグナム「くうう…」

シグナムはアオヤシャモンの凄まじいまでの速さの連続攻撃に苦戦する。

ヴィータ「マジかよ、シグナムとあそこまでやり合うなんて!!」

信じられないような表情でヴィータは驚く。

シグナムの強さは機動六課に所属している者なら誰もが知っている彼女と接近戦を挑んでまず勝てる者どころか触れる事が出来る者などそうは居ないのだ

だが、今目の前でアオヤシャモンはそんなシグナムの攻撃をかわし、そして今は逆にシグナムを防戦一方に追い込んでいる。

しかも、初見でシグナムの紫電一閃を防いでしまうのだからそれは皆も驚くはずである

そしてはやては感心するかのような感じでアオヤシャモンを高く評価する。

はやて「大した子や。スピードだけはシグナムを上回っとる。」

はやてだけじゃなく、神楽、月詠、未央、セツナ、ナギ、照山もアオヤシャモン、そしてスバルの強さに感心する。

神楽「うおはー!アオツちもスバルも凄いアル!」

未央「ホントすごい!!」

月詠「かなりの鍛錬を包んでおるな、魔法なしでもかなりの実力じや。」

照山「能力も何も使ってねえのにとんでもねえスピードだぜアイツラ!」

セツナ「相当な速さねアレ。私ほどじゃないけどそれでもかなり近い速度よ」

ナギ「さすがは私のやった卵から生まれた言うべきだな」

そして、フォアードの3人はシグナムと互角に戦っているアオヤシヤモンの強さに唖然と驚いている。

特に驚くべきはアオヤシヤモンとスバルの同じ刹那のごとくの瞬間移動であつた。

あれも魔法の一種だと最初はだれもが思ったが、アオヤシヤモンやスバルの刹那の瞬間移動は魔法ではなく独自の運動神経と身体能力によるものである。剣の腕でもアオヤシヤモンはシグナムの僅か上を言っている。

シグナム「くっ！ならば！」

シグナムは、アオヤシヤモンからかなり離れる。

シグナム「レヴァンティン！！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シユランゲフォルム』となった。

アオヤシヤモン「へー、それがアンタの使う連結刃って奴か…」

アオヤシヤモンが興味深そうに見ていると、

シグナム「飛竜一閃！！！！」

炎を纏った連結刃をアオヤシヤモンを襲う。

ドカアアアアン！！

シグナムの飛竜一閃がアオヤシヤモンに命中し大爆発が起きた。

シグナム「…やったか？」

シグナムはアオヤシャモンに飛龍一閃を命中させたことにより自分が勝ったと思い連結刃を戻そうとする。

しかし、

ピンッ！！

シグナム「！？」

連結刃が何かに引っ掛かったかのように伸び戻すことが出来ない。すると煙が晴れてアオヤシャモンの姿が目映ってきた。

シグナム「ま、まさか…」

アオヤシャモン「ふっっ、今のは危なかったぜ」

煙が晴れた所にはアオヤシャモンが蒼斬丸に連結刃を巻きつけて立っているのが見えていた。

シグナム「バ…バカな…私の飛龍一閃を防いだと言うのか！？」

アオヤシャモン「こう言う武器の弱点って知ってるか？確かにこう言う形状の武器は相手をまとめて倒すのには有効だ…けどな、こう言う風に捕まえられたら全く動けなくなっちまうんだよ」

アオヤシャモンは軽い笑みを見せるとそう説明する。

アオヤシャモン「そろそろ決めるぜ！」

アオヤシャモンはそう言うのと連結刃を思いっきり引っ張る。

シグナム「うわあっ!!」

シグナムは空中に投げ出され無防備状態になる。

アオヤシャモン「あんたもいろんな技見せてくれたよな…。お礼に俺の必殺技を見せてやるよ!」

アオヤシャモンは刀身にエネルギーを込める。

シグナム「(何だアレは…凄まじいエネルギーだ)」

シグナムはとつさに持っている鞘で防御しようとするがアオヤシャモンが視界から消えた。

シグナム「なっ!?!」

シグナムは急いでアオヤシャモンを探す。しかし

ズバッ!!

シグナム「ぐあっ!!」

バキィッ!!

シグナム「がはあっ!!」

今までよりもさらに桁違いのスピードでアオヤシャモンはシグナムにラッシュを仕掛ける。

アオヤシャモン「こつち見ろよ！」

シグナム「何！…くっ！」

声のしたほうへ向くが、太陽をバックにしているため見えない。

アオヤシャモン「これで終わりだぜ！奥義、
“夜叉閃光斬”！！！」

オーラをまとった刀を振り、蒼色の真空刃のようなものをシグナムに放つ。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

シグナム「ぐああああああああああああ！！！！！！」

シグナムはよけきれずに直撃を受けてしまい、吹き飛ばされる。そして、煙がはれるとシグナムが倒れている。

アオヤシャモン「俺の勝ちだな。副隊長さんよ」

シグナムが倒れたことにより、この勝負はアオヤシャモンが勝利した。

一方、シャナ対スバルは

スバル「ハアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

シャナ「又アアアアアアアアアアア！！」

ガキキキキン！！ガキヤン！！ガキキン！！キイイイン！！ガキヤキキキキキン！！ガキイイイイイン！！

互いに目にも止まらない神速で剣を振るい、連続にぶつかり合う轟音が次々と響く。

スバルの神速抜刀剣術とシャナの豪快なる神速剣がぶつかり合い、お互いに譲れないような猛攻が続いていた
普通の人間が見ているだけでは、蒼い斬撃と紅いの斬撃が斬り合っている様にしか見えないほどであった。

2人の剣はぶつかり、スバルとシャナは互いにバックしてはなれて着地すると、スバルは『テイルヴィングエア』を右手に持ち替えて上斜め右に持ち上げると、刀身が蒼く光だす。

シャナ「これは!？」

スバルの刀を見てシャナは驚きだと、スバルが素早く『テイルヴィングエア』を振り下ろす。

スバル「天魔御剣流 蒼龍閃!!」

振り下ろされた後、蒼く輝く魔力の斬撃が神速の速さでシャナを襲うと、シャナは回避するのは難しいと判断したのか炎を質を一気に上げ強力な斬撃を繰り出す。

シャナ「甘い! 覇龍烈火斬!!」

まるで炎が舞上がるかのような強烈な一撃にスバルの放った蒼龍閃は完全に押し負けてしまい、スバルは吹き飛ばされる。

スバル「うわ!」

シャナ「驚いている暇はない!」

スバル「!？」

そして素早く、スバルに攻めて来たシャナが刀を振るう。
連続に振るい続けるシャナの剣を、スバルはなんとかして受け流し続ける。

そして、シグナムの攻撃を防ぎ終わると、今度はスバルが神速の速さを振るうと、シャナもまたスバルの刀を受け流すが、スバルの速さに少しシャナが押され、後ろに追いやられる。

シャナ「くっ！」

紙一重で剣撃をかわし、今度は左横にダッシュして避ける。
しかしそれをスバルは逃がさず、刹那の瞬間移動でシャナの手前まで移動し、素早く『テイルヴィングエア』を振るう。

ガキン！！

シャナ「くっ！！」

シャナも『贄殿遮那』でスバルの一撃を防ぐ。
ぶつかり合う2つの剣から火花が出る。
そして互いに薙ぎ払うかのように剣を振り、相手から離れる。

スバルの速さは相当なものでシャナの僅か上を言っている。
だがシャナの剣にはスバルにはない豪傑なる力ある威力を持ち、火炎攻撃の威力はスバルの攻撃力よりも上は行く。

すなわち、総合的な強さを合わせれば互いに互角かシャナの方が僅か有利といった所であった。

スバル「そろそろ決着をつけましょう……シャナさん」
シャナ「良いわ……全力で行く！」

シヤナは凄まじい炎を刀身から作り出す。それはさっきの覇龍烈火斬を上回る勢いだった。

スバル「さっきの技と違うみたいですね…だったらこっちもさっきよりも強い技で行きます！ティルヴィングエア、カートリッジロード！」

ガチャン

スバルもカートリッジロードを2つ使用すると、『ティルヴィングエア』の刀身が蒼い炎に包まれた。

銀時「こっちもこれで勝負が決まるな」

桂「ああ、お互いに次の一撃で決めるつもりでござろう」

銀時と剣心は、これで勝負が決まると確信する。

しばらく間が開き、互いに両手で剣を握って相手を睨む。そして、二十秒後・・・

スバル「はああああああああああああああ！！」

シヤナ「ぬああああああああああああああ！！」

同時に地面を強く蹴り、高速の速さで接近してきて、必殺技を炸裂させる。

スバル「天魔御剣流 魔ノ太刀 蒼波重龍閃！！」

シヤナ「鳳炎断罪！！」

蒼い炎の魔剣と灼熱の鳥を思わせる火炎剣を振るうと、相手に当た

る直前に1人は寸止めした。

スバルの『テイルヴィングエア』はシャナの頭の真ん中の手前にギリギリに寸止めし、シャナの『贅殿遮那』はスバルの右脇の手前にギリギリに寸止めた。

結果的に相打ちになる所であつた。
互いに剣を鞘に収めて握手した。

シャナ「大した者ね。私とここまで渡り合えるなんて、とりあえず合格にしといてあげる」

スバル「いや…そ…それほどでは」

シャナに認められて照れるスバル。

シャナ「またいつか、お前とは手合わせしたい。その時はもう少し本気を出してあげる」

スバル「え？あれ、本気じゃなかったんですか？」

シャナ「最後の一撃だけは本気だったけど、それ以外はまだ様子見。あんまり調子に乗らないでよね」

スバル「そつ、そつなんですか…あつははは……」

シャナの言葉に苦笑いしてスバルは返事をした。

正直言つてシャナの“まだ本気ではない”の言葉を聞いてシャナに勝てる自信がなかったのだ。

剣心「まさかシャナ殿とあそこまで渡り合えるとは」

銀時「ああ、スバルもたいしたもんだ」

新八「凄いですね。スバルさん…」

神楽「ホントアル！私びっくりしたネ！！」

ヴィルヘルミナ「あの方があそこまで押されるとは…」

絢子「相当な実力ね」

セト「剣の腕じゃ勝てそうにないな」

一方通行「結構やるじゃねえかアイツも」

当麻「すげえな…俺全然勝てる気がしねえ……」

セイバー「思った以上の腕でした。私も彼女とは戦ってみたいです
ね」

銀時・剣心・フェイト・桂・なのは・はやて・神楽・エリザベス・
月詠・セイバー、ヤミ・当麻・インデックス・ナギ・ハヤテ・ヴィ
ルヘルミナ・絢子・護・クルス、イヴ、ブレイド、セト、ソルヴァ、
デイスク・セツナ・未央・梶・照山・アリア・一方通行・ヴィータ・
リインはスバルとアオヤシャモンの予想以上の実力に感心する。

エリオとキャラはシグナムと互角に渡り合えたスバルの実力に驚き
だしていた。

エリオ「す…・・・凄いですよ、スバルさんもアオヤシャモンも！」

スバルとアオヤシャモンの見たことが無い魔法剣技と魔法に感心し
たエリオ。

新人魔導士？1と言われたスバルとアオヤシャモンの実力を改めて
知ったのである。

キャラ「唯さえ、リミッターをかけられているシグナムさんとさえ
対等に渡り合える魔導士はそうはいないのに、シグナムさんに勝っ
ちやうなんて…」

キャラも驚きを隠せないまま感心すると、エリオはある事を思い出
した。

エリオ「（そう言えば、スバルさんは4年前に銀時さんや剣心さん

に助けられて、憧れを抱いて剣術を鍛え続けたと聞きましたけど・
・僕もスバルさんを見習って魔法だけじゃなく・・・槍術を鍛えな
いと・・・。」

エリオもスバルを見習って、自分のデバイスの特徴である槍を磨く
事を決意する。

エリオとキャロがスバルの強さに騒いでる中、ティアナは複雑な顔
をしていた。

同じ訓練校の卒業生なのに自分との強さの差がはつきり言って遠
ざる。

ティアナは拳を強く握った。

アリア「……」

アリアはそんなティアナを黙って見つめていた。

第八訓 二面バトルは見るのも大変（後書き）

支配者「いかがでしたか？ 今回のお話」

シャナ「オリジナル性が少ない？」

ヤミ「私もそう思いました」

支配者「すいませんね。ホント、これからはもう少し激しいバトルを書きたいと思っています。出来れば指摘やアイデア提供などをお待ちしております。メッセーじボックスに直接投稿の方が嬉しいですね」

シャナ「次回、『男も女も嫉妬は醜く汚い』テイクオフよ」

第九訓 男も女も嫉妬は醜く汚い（前書き）

支配者「はい、はい、第九話ですよ」

銀時「じゃあ、超リリカル銀魂 S t r i k e r s。始まるぜ」

第九訓 男も女も嫉妬は醜く汚い

エリオ「えっと…確かこの辺で待ってるって言ってたよね。ナギさんは…」

エリオは六課の裏に来ていた。ナギに鍛えてやると言われたからである。

エリオ「でもあの人、自分のことが弱いつていったよね…。どうやって鍛えるつもりなんだろう…？」

エリオは考える。ナギは自分の事をか弱いと言って訓練にも参加しなかった。そんな人がどうやって自分を鍛えるつもりなんだろうとすると

「???「待たせたな」」

ナギがやってきた。

その後ろにはハヤテとヴィルヘルミナと美琴とアリアがいた。

エリオ「あ、ナギさんと…綾崎さんとカルメルさんと美琴さんとアリアさん？」

エリオはナギの後ろになぜ、ハヤテとヴィルヘルミナと美琴とアリアがいるかと言う事に

ナギ「では、特訓を始めるかエリオよ」

美琴「その前に…なんで私達まで呼ばれた訳？」

アリア「ハヤテやカルメルさんがいれば十分なんじゃないの？」

美琴とアリアはナギにそう尋ねる。

ナギ「そりゃあ、まア…ハヤテやヴィルヘルミナにはエリオの体術の訓練につき合わせるつもりで連れてきたんだが、お前らにも役割があるから来てもらったんだ」

美琴「役割って？」

ナギ「お前は電撃技のエキスパートだろ？エリオも電気系だから電気関係の業の訓練にでも付き合ってもらいたいんだよ」

アリア「じゃあ、私は？」

ナギ「お前にはハヤテの凄さをエリオに見せてやりたいと思って連れてきたんだ」

アリア「は？」

ナギの言葉に思わずアリアは啞然となる。

アリア「何それ…？意味わかんないんだけど？」

ナギ「すぐに分かる」

ナギはアリアにそう言つとエリオに向きかえる。

ナギ「では、エリオよ。特訓を始めるぞ。お前の武器は槍型デバイスの『ストラーダ』だったよな？」

エリオ「あ、はい」

ナギ「では、お前に槍術の先生を紹介してやろう」

エリオ「槍術の先生？」

ナギの言葉にエリオはポカンとなる。銀時達の世界から来た人達の中に槍を武器に戦う人は一人もいなかった。それなのに槍術の先生だなんていったどこから連れてくるのだろうか

すると、ナギは懷からクロスローダーを取り出して掲げた。

ナギ「リロード、クレニウムモン」

そして、クロスローダーが光ったかと思うと鏡面な顔つきをした蒼い騎士型のデジモンが現れた。

クレニウムモン「お呼びでしょうか？お嬢様」

ナギ「うむ」

それはナギの切り札デジモンの中でも最強級の強さを誇る騎士型デジモン、クレニウムモンであった。

因みにクレニウムモンを始めて見たエリオの感想は

エリオ「（これがナギさんのデジモンなのか…か、顔が怖いな…）」

エリオはそう思った。まあ、仕方がない。クレニウムモンは最上級の聖騎士型デジモンなのだが、はつきり言ってウィルス種に見えなくも無いほどに顔が怖い。

そして、クレニウムモンがエリオに気づいた。

クレニウムモン「お嬢様。この子供は誰ですか？」

ナギ「こいつの名はエリオだ。今日からお前の弟子だ！」

クレニウムモン・エリオ「ええっ！？」「」

ナギの言葉にエリオだけでなくクレニウムモンまでもが驚いた。

エリオ「あ、あの…ナギさん」

ナギ「何だエリオ？」

エリオ「ひょっとして槍術の先生って…」

ナギ「こいつの事だ」

エリオ「やつぱり…」

ナギの言葉にエリオはそう言った。

ナギ「クレニウムモンは槍術の達人中の達人だぞ。お前の先生にはピッタリではないか」

エリオ「そ、そうなんですか…？」

ナギ「何だ。信用しておらんのか？クレニウムモン、ちょっとエリオに實力を見せてやれ」

クレニウムモン「その前にお嬢様、弟子と言うのは一体…」

ナギ「いいからやるのだ！私の言うことが聞けんのか…！」

クレニウムモン「はっ、はい…！」

クレニウムモンはナギに怒鳴られて少しビクツとなった。

ハヤテ「相変わらずお嬢様は…」

アリア・美琴「無茶苦茶ね…」

ヴィルヘルミナ「お嬢様…」

ハヤテ達四人はナギの勝手な命令口調で命令されているクレニウムモンに軽く同情しナギに軽く呆れた。

クレニウムモン「しかし、お嬢様…、實力を見せると仰られましても…」

ナギ「そこに木がある」

ナギは右の方向にある大きな木を指差した。

ナギ「ハヤテ、その木を折れない位に蹴っ飛ばして葉を落とせ。

お前は落ちてきた葉っぱに“クラウド・ソラス”を使い。後は分かるだろ？」

クレニアムモン「は、はい」

ハヤテ「分かりました、お嬢様」

そして、ハヤテはナギに言われたとおり木の真横に立った。

ハヤテ「行きますよ！クレニアムモン！」

クレニアムモン「ああ、いつでも良い」

クレニアムモンそう言って自分の愛用の魔槍“クラウド・ソラス”を構えた。

ハヤテ「オリヤ！」

ドゴオッ！

ハヤテは木を蹴り飛ばした。もちろん加減したので折ってはいない。ハヤテが本気で蹴ったりしたらどんな大木でも簡単に折れてしまうからね。

そして大量の葉っぱが落ちてきた。

それを見たクレニアムモンは

クレニアムモン「ふん！」

ビュオオオオオオオオオオオオ！！！！

突風が巻き起こるほどの目にも映らないほどの速さで槍を動かした。

エリオ「うわっ！」

その突風にエリオを煽られバランスを崩した。
そして葉っぱは全て縦に割れた状態で地面に落ちていた。

エリオ「すつ、凄い！！」

エリオは驚いた。あれ程の速さで槍を動かしていたと言うのに数百枚以上の葉っぱが全て縦に正確に割れているからだ。それはクレニアムモンの凄まじいまで槍の扱いに対する技術力の高いからである。まさに槍術の超達人的実力である。

エリオ「凄いですよ！クレニアムモンさん！」

ナギ「ハハハ、どうだ凄いだろう」

美琴「あんたが威張ってどーすんのよ」

エリオは凄まじいまでの見事な槍捌きを見せたクレニアムモンに対して感動して目を輝かせていた。そしてなぜか威張ったナギに対して美琴が突っ込んだ。

ナギ「如何だエリオ。こいつに教われれば槍術の腕は間違いなく上達するぞ」

エリオ「はい！！」

エリオは未だに感動し、クレニアムモンの槍術の腕前に惚れ込んでいた。こんな凄い槍術使いに教われれば間違いなくエリオの槍術の腕は上達するだろう。

クレニアムモン「その前に一言良いか？少年」

エリオ「はい、何ですか？」

クレニアムモン「君はどうして強くなりたいのだ？」

クレニアムモンはエリオにそう尋ねる。

エリオ「それは僕を助けて養子にしてくれたフェイトさんに恩を返したいからです」

クレニアムモン「それだけか？」

エリオ「いえ、一番の理由はそれじゃありません。僕も銀時さんや剣心さんみたいに大切な人達を護れる強さと信念を身に付けたいんです。でも、それは魔法だけに頼った力だけでは駄目だと思うんです。それにスバルさんは魔法なしでもあそこまでの実力を持っています。だから僕も魔法だけに頼らずに槍術を学びたいんです。体だけじゃなく、心も鍛えるために。お願いしますクレニアムモンさん。僕に槍術を教えてください！！」

エリオは頭を下げた。クレニアムモンに頼んだ。そして、クレニアムモンは

クレニアムモン「良からう、合格だ」

エリオ「え？」

クレニアムモンの言葉にエリオは少し啞然とした

クレニアムモン「最初の理由だけならば私はおそらくお嬢様の命令と言えど君に槍術を教えるのを断っただろう。そんなただの義務感だけで強くなりたいと言うのであればな。そんな事は助けたものが望むことではない。だが大切なものを護りたいと言う理由で強くなりたいというのであれば話は別だ。真に強い者とはただ力が強いものや、自分自身の為だけに戦う者の事を言うのではない。大切なものを護りたいと言う信念こそが最も人を強くする物だと私は信じている。ただ強くなりたいと言うのであればそれは唯の修羅と同じだ

からな」

エリオ「それじゃあ」

クレニアムモン「うむ、君に槍術を教えよう」

エリオはその言葉を聞いて笑顔になり、

エリオ「ありがとうございます！」

クレニアムモンにお礼を言った。ナギ達はそんなエリオを見て軽く微笑んだ。

ナギ「よし。では、体術や反射神経の特訓に関しては頼むぞ。ハヤテ、ヴィルヘルミナ」

ハヤテ「はい、お嬢様」

ヴィルヘルミナ「了解したのであります」

ナギ「美琴はエリオでも使えそうな電撃技を教えてやってくれ」

美琴「良いわよ」

ナギの言葉にハヤテとヴィルヘルミナ、美琴は了承する。

アリア「で？私は？」

ナギ「ん？…ああ、アリアは……すまん、やっぱりいい」

アリア「はあ！？」

ナギの言葉にアリアは啞然となる。

アリア「アンタねえ！やっぱり良いって如何言う事よ！？」

ナギ「いやあ、お前にはハヤテの凄さを改めてみせる為に、ハヤテに向かって発砲して欲しかったんだが…やっぱり危ないしな。すまん」

ハヤテ「って、お嬢様！そんな危ない事考えてたんですか！？」
ナギ「お前なら出来ん事ないだろう」

ナギは平然とそう言う。まあ、ハヤテはこの物語では半分夜兎である。しかもとんでもなく鍛えているので大砲の弾でも片手で簡単に受け止められる。銃の弾を捌く位なんでもないだろう。…多分

アリア「全く…まあ、それならもう戻るけど…今度やったら風穴！
！」

ナギ「あゝ、はいはい。分かった分かった」

ナギは腕をひらひらさせながらそう言う。

クレニアムモン「では、まず筋力トレーニングからだ。体が出来ていないのでは話にならないからな」

エリオ「はい！」

こうしてエリオの特訓は始まったのであった。

訓練が終わって夕食の時間。

食堂に集まって、みんなで夕食を食べている。

銀時とシャナは、デザートのチョコレートパフェとフルーツパフェやメロンパンを食べていた。

フェイト「剣心。今日の訓練、お疲れ様」

なのは「銀さんもお疲れ様です」

スバル「お疲れ様です！」

銀時「おお」

剣心「うむ」

フェイトとなのはとスバルの言葉に、銀時は短く答えた。

剣心「そう言えば、フェイト殿。アルフ殿とプレシア殿はどうして
いるんでござるか？」

フェイト「母さんは、本局で働いてるんだ。アルフは母さんの仕事
の手伝い」

銀時「そうか。二人とも元気か？」

シャナ「どうなのよ？」

パフェを口に運びながら、銀時とシャナは尋ねた。

フェイト「うん。元気だよ。剣心達の事を教えたら、二人とも嬉し
そうだったよ」

剣心「そうでござるか」

銀時「ふっつ、食った。食った」

シャナ「ごちそうさま」

銀時とシャナはパフェを食べ終えた。
おかわりのパフェを頼もうとした時、

???「剣しいん!!」

声と共に剣心の背中に衝撃が走った。

剣心「おわっ！」

ビックリした剣心は後ろを見た。
そこには、

剣心「アルフ殿！」

人型の姿になつてゐるアルフがいた。

アルフ「剣しいん、久しぶり！会いたかったよ！」

アルフは、剣心に抱き付いた。
周囲の注目が剣心達に集まる。

剣心「ちょっと…離れて欲しいでござるよ、アルフ殿！」
アルフ「素直じゃないな♪」

嬉しそうな顔をしてゐるアルフは、なかなか離れない。

銀時「つーか何でおめエが此処にいるんだ？本局でプレシアの手伝
いしてたんじゃないのかよ？」

アルフ「剣心に会いたくて来たんだよ♪」

フェイトからの知らせを聞いて、本局から来たらしい。

剣心「とりあえず離れるでござるよ、この狼！」

剣心が叫んだ。すると、

ディスク「剣心、その子誰なの？」

ケーキを頬張っているディスクがアルフを見る。

フェイト「紹介するね。私の元使い魔の」

アルフ「アルフだよ！」

元氣よく挨拶するアルフ。

ディスク「そうなの。わたしはディスクよ。よろしくね」

と、いいながらアルフの頭をなでる。

アルフ「／／／／／」

なでられて気持ち良かったのか、顔を赤くする。

ディスク「……お手！」

アルフ「ワン！……はっ！」

ディスクに犬の扱いをされ、はっとなる。

フェイトと剣心は苦笑いを浮かべ、銀時はニヤニヤと笑っている。

アルフ「ちよつとなん「おすわり！」ワン！……」

またもや、つられる。

ディスク「よ～しよいい子ね」

ムツ〇ロウのような口調で、アルフをなでるディスク。

アルフはなでられてるせいか、怒る気もせず、むしろ気持ちいい。

一方通行「…まるつきり犬だな…アイツァ……」
セト「だな」

ソルヴァ「て言うかディスクさんって、あんなに動物の扱いうまく
ったでしたっけ？」

クルス「意外とまあ言うの得意なんですよ、ディスクさんって」

イヴ「そうなのか山田」

クルス「はい、って僕はクルスですってば！」

ディスクがあるふをあやしているのを見て一方通行とセトはアルフ
のことを完全に犬扱いし、ソルヴァはディスクの意外な一面を見て
疑問に思い、それをクルスが説明する。そしてまたしてもクルスの
事を山田扱いするイヴにクルスが突っ込んだ。

一方の桂は、はやてと二人っきりでそばを食べていた。

エリザベスとリインは桂とはやての關係に気づいて、2人っきりに
させる為に銀時達と食事をしていた。

桂「全く、剣心と言い銀時と言い随分と罪な男になったものだ」

笑いながら桂はそう言う、はやても面白がつて笑い出す。

はやて「そうやな。剣ちゃんに銀ちゃんも、あの調子だとジャンジ
ヤンと女に好意を持たされるかもな」

桂「ふ…違うない」

何やら二人っきりで言い雰囲気話す桂とはやて。
そしてはやてはフォワード部隊の事を桂に聞き出す。

はやて「そう言えば、桂さん。桂さんから見て、新人達の訓練はどうや？もちろんスバルは除くけどな」

桂「…そうだな…エリオ殿とキャロ殿ははつきり言って相性が良い相方同士だ。おそらく、2人の力は今後の成長しだいで大きくなるであろう」

桂から見て、スバルと比べれば2人はまだ未熟だが、チームワークとしてはそこら辺よりはかなり良い。

コンビネーション的な実力は間違いなく副隊長級は行くであろう。

桂「だが…訓練と言えば…ティアナ殿には不自然な感じがする」

桂がそう言い、ティアナのほうを向くと、ティアナはあんまり食事を進んでおらず、銀時と剣心とスバルアオヤシャモンを複雑そうな顔で見つめる。

はやて「やつぱりそう思うか？」

桂「ああ、実力は単独的にはエリオ殿とキャロ殿より上である事は分かる。だが…何か無理をしているようだ。…まるで…自分の体を壊すかのような行為のようなその様な…」

2人と比べてティアナには何か不自然を感じる桂だが、1つだけ確信した事がある。

桂「いずれにせよ、今のティアナ殿のやり方では、成長する事はないだろう。」

現実的に言う桂だが、今は放っておいた方が良くと確信する。

夕食を食べ終え、みんなそれぞれの部屋に戻り、眠っていた。ちなみにアルフは、フェイトの部屋と一緒に寝ている。

銀時はベッドに横になっている。

因みに銀時と剣心は同じ部屋なのだが今は剣心はトイレに言っている食堂で元気なアルフの姿が見れて、銀時は安心した。

だが、銀時の中には少し不安があった。

前に新八達と一緒にナギにDVDを貸してもらって『A・S編』を見た。

それを見た銀時達は気付いた。物語にはやはり、魔人王ゾーグなどと言う存在はいない事に。プレシアの時もそうだったが、どうやら銀時達が介入した事で、原作のストーリーとは違う展開になっている。

だとしたら、今回も違う展開になる可能性がある。ナギに話ではスバルの時からかなり違っていているらしい。

やはりここはパラレルワールドと言う事なのであろうか。

まあ原作の内容は知らねーけどな。

いざとなればナギに詳しく聞けばいい。

銀時はため息をついた。

何も問題が起こらなきゃいいが
すると、扉がノックされた。

銀時「開いてるぞ」

軽く返事をする。

なのは「お・・・オジャマ・・・します。」

声がした後、扉が開かれた。

入ってきたのはなのはだった。

銀時は起き上がって、なのはに体を向けた。

銀時「んで？何の用だ？」

銀時が尋ねた。

なのは「できれば・・・外で・・・」

機動六課・展望スペース

銀時となのはは外に出て、お互いを向き合っているが、

なのは「あの……その……」

なのはは顔を赤くし、銀時から目をそらしながら呟く。

え・・・あれ？この展開、どこかで見たような感じがするんだけど？

なのは「銀さん！・・・わ・・・私・・・」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にし、なのははついに銀時に告白をする。

銀時「改めて…もう一度言います…私…銀さんの事が好きです／＼」

銀時の予想が当たり、なのははもう一度銀時に告白をした。

10年前のあの時にも告白されたが大人のなのはからの告白はまた違った感じだった

銀時「…………マジでか？」

沈黙を破って、銀時が尋ねた。

なのは「…………はい／／／」

銀時「…………ユーノに乗り換えたとかはなくて？」

なのは「…………はい／／／」

小さな声で返事をしながらも顔を真っ赤に染めてなのは言う。
もう一度告白した事で吹っ切れたのか、なのは歩き出し、銀時に抱き付いた。

なのはの豊満で柔らかい胸が、銀時に当たる。

なのはもまた、10年たって魅力ある女性へと成長したので、胸もかなりでかいのである。

銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

こういう状況に慣れていない銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

銀時（おいいいいいいい！！何これええええ！！え？何？マジでどうすんの！？ユーノは？ユーノはどうなっちゃうの！？つつか銀さんともない事をしちゃったんだけどおお！！）

自分が一体何をしたのかと考える銀時。

なのは「……………銀さん／／／」

なのは両手を銀時の顔に添えた。

そしてゆっくりと顔を近づけ、自分の唇を銀時の唇に重ねた。
なのはにキスされ、銀時の体は固まった。

なのは「・・・ん／／／」

甘ったるい声を出して、シグナムの時と同じで、長い時間キスをした。

銀時が女性とキスするのはこれで三度目になるであろう。
人生は何が起こるかかわからない事はまさにこの事であった。

なのはは、銀時から唇を離れた。

なのは「にやはは・・・昨日、助けてくれたお礼だよ。このキスは／／／」

なのはは、嬉しそうな笑みを浮かべた。

一方銀時は、キスをされて呆然としている。以前に子供の頃のなのはにキスされたが、今のなのはは大人の為か、あの時のキスとはまた違った感触のキスだった。

なのは「・・・これからよろしくね、銀さん／／／」

こうして、なのはは改めて銀時に告白し、なのはは部屋に戻ろうとしたときだった。

ババアアアアアアアアアアアン！！！！！！

大きな音とともに、何かが出てきた。

なのは「な・・・なにこれ・・・」

なのはは、青い顔をしたが、銀時のほうがもつと顔が青い。その理由は、

新八「……お前ええ……またしてもなのちゃんの唇を……それでも人間かあ？……（怒）」

膨大なる殺意を放つ新八がいるからだ。

なぜかというと、銀時となのはが外へ行こうとする際、新八が目撃し、告白からキスまで一部始終を見てしまったからだ。

銀時（あ……俺死んだかな……）

銀時は死を覚悟した。

新八「お前のかあちゃん何人だアアアアアアアアアア！！！！！！」
 ！！！！（激怒）

再びあのような行為を見せられすでに終わっている恋だと知りつつも新八の怒りは収まらなかった、新八の恐怖を銀時は思い知ることになる。

・ ・ ・ ・ ・ ことはなかった。

[illegible]

なのはが飛び出して、銀時をかばう。

新八「……って、なのはちゃん!？」

新八は驚いて正氣に戻る。

なのは「だめ！だめなの！！」

なのはは銀時をかばって、涙を流す。

新八「！！！？！？」

新八は、泣いているなのはを見て、ショックを受けた。

なのはが銀時をかばって泣いている　なのはちゃんが銀さんを守っている　なのはちゃんはやっぱり銀さんを愛している！？

新八「うっうわああああああああああ！！！！！！（泣）」

新八は泣きながら扉へ向かっていく。

新八（どうして！どうしてなのはちゃんは銀さんなんか選ぶんだ！？
？なのはちゃんがどうしてあんな生活力0の男なんかを！！！！！！
いや、それ以前に僕はなのはちゃんを泣かせてしまった！！僕は・
・僕は・・・・！！）

絶望を抱いた新八は、扉のドアノブに手をかけようとした。
その時

ズガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！

何かの発砲音の様な音が轟いた。

銀時・新八「え？何今の音……」

ショックの余りその場から飛び出て行こうとした新八と銀時は当然

の大きな音に驚き声を出した。因みにその音を出したのは

アリア「れっ／＼／、恋愛なんて……くっだらない！！／＼／」

銀時・新八・なのは「アリア（ちゃん）！？」

そうアリアの銃の発砲音だったのだ。アリアもさっきまでのなのはの告白の一部始終をみてしまったのである。因みにアリアにこういつた系の話は厳禁なのだ。なぜなら、アリアは恋話に関しては物凄いい恥ずかしがり屋なのである。それがもし、あんな告白のシーンやらキスシーンやらを見たものなら

アリア「あんたたち……よく私の前であんな恥ずかしい真似を……！！／＼／」

アリアは顔を真っ赤にしながら銃を構える。

銀時「おっ、おい……お前……」

なのは「ア、アリアちゃん……？」

新八「まっ、まさか……」

三人はそんなアリアを見て冷や汗を流す。

アリア「アンタ達3人共風穴——！！／＼／（激怒）」

ズガガガガガガガガガ！！

銀時・新八・なのは「ギャアアアアアアアア！！！！」

そう、こうなるのだ。

アリアは二丁拳銃を乱射しながら銀時・新八・なのはの追いかけ、

3人は必死でアリアから逃げ回る。

果たして3人に明日は来るのであろうか？

そして、こんな恐怖を味わった新八にいたってはもうなのは告白シーンの事によるショックなどもうすっかり忘れてしまってたのであった。

翌朝。

スバルとアオヤシャモンが新しく加わって、フォワードのみんなは個別訓練を受ける事になった。

ちなみに、スバルとアオヤシャモンはティアナと同じくなのはのスターズ分隊に入り、二人とも実力がすでに副隊長級に入っているため、フォワード部隊の中で唯一シグナムとヴィータと同じく、『能力限定』の魔力リミッターがかかっているが、それでも強さはフォワード部隊の中でも一番強いってぐらいである。まあ、アオヤシャモンにかけられなかったらしいが

それぞれの個性を活かすための訓練に、スバル達は頑張る。

ヴィータがいつもどおりに新人を鍛える中、シグナムもまたエリオの訓練に付き合っている。いつもなら、シグナムが新人の訓練には参加しないのだが、エリオが「銀時さん見たいに大事なものを護れるほど強くなりたい」と言う信念に興味を持って、エリオの特訓を付き合っている。

剣心や銀時の様な強い男になれるのかその眼で確かめたいからである。

最も、エリオには訓練が終わってからのクレニアムモンやハヤテからの槍術や体術の訓練もあるのだが
銀時達は訓練の様子を見守っている。

そこへアルフがやってきた。

アルフ「ここにいたんだ」

銀時「ああ。暇だからな。つーかお前は仕事しなくていいのかよ？」

答えた後、銀時はアルフに言った。

アルフ「ちゃんとプレシアからは、休みを貰ってるもん」

気軽にアルフは答えた。

月詠「ふむ。アルフは天人や妖怪に似ているな」

照山「確かにな」

アルフを見ながら、月詠と照山が言った。

一方の桂は真剣な眼差しでティアナを見ると、隣にいるエリザベスに話しかける。

桂「エリザベス。エリザベスから見て、ティアナ殿はどう見る？」

エリザベス「そうだね・・・何か無理をしている感じがします。時々だけどもキになっているような、なんか分からないけど」

桂は昨日、はやてに新人フォワード部隊の様子を聞かされて以来、ティアナの慌てっぷりを気になっていた。

エリザベス「なんか、強さだけを求めているようにしか見えない」

そう書かれたボードをだしてエリザベスは感想を言い出す。

桂「やはりそうか。・・・武士であろうと魔導士であろうと・・・

人はみな、強さだけを求めても・・・『真の強さ』は得られぬ」

月詠「同感じゃ。」

アリア「私も同感ね」

桂がエリザベスと話していると、隣で煙管を加えて口から煙を吐く月詠とアリアが話しかけてきた。

桂「月詠殿、アリア殿」

月詠「桂の言う通り、ティアナの今の行為は強くなる為じゃなく、強さだけを求めて抗っている行為にしか見えぬ。あれではいくら訓練を続けても強くはなれぬ」

アリア「確かにね。あいつのやっていることは無茶を通り越した半分以上は意味のない行為よ。あれじゃあ、上達するものも上達しないわ」

桂「うむ、・・・このままでは、ティアナ殿の体はいずれ内部から崩壊してしまうであろう」

どうすれば良いか迷ってしまう桂、エリザベス、月詠、アリアの4人。

ナギ「アイツにも訳があるんだよ」

桂「？ナギ殿はティアナ殿が無理をする原因を知っているのか？」

ナギ「まあな……。だがまあ、話すのはまた今度だ。今、あいつに何を言っても無駄だろうからな」

ナギは桂たちにそう言い聞かせた。

ヴィータ「よし。午前の訓練は終わりだ！」

ヴィータがスバル達に告げた。

訓練を終えたスバル達は、それぞれストレッチをした。

銀時「こんな訓練毎日やんのか。大変だな？」

ジャンプを持ちながら、銀時は他人事のように言った。

剣心「まあ、先頭が主軸なのでござるから訓練は当然でござるっ」

剣心もジャンプを読みながらそう言う。

シャナ「私たちにとっては温い訓練だと思うけどね」
ヤミ「はい」

シャナとヤミもジャンプを読みながらそう言った。

昼食を食べるため、銀時達は食堂にいた。

そこでティアナ達は顔をしかめていた。原因は銀時とシャナとヤミとセイバーとなのはとフェイトにある。

六人は、真っ白いご飯の上に『ある物』をかけているのだ。
意を決して、エリオが聞いてみた。

エリオ「あの……皆さんは何をかけてるんですか……？」

銀時「これか？」

銀時とシャナとヤミとセイバーはエリオに顔を向けた。

片手で丼を掴み、顔の前まで持ち上げた。

銀時・シャナ・ヤミ・セイバー「……小豆テンコ盛り」宇治銀時
井『だ（よ）（です）「……」

ご飯に小豆を乗せるという、銀時特製の宇治銀時丼。
ティアナ達は顔を歪め、嫌悪感を露にする。

宇治銀時井自体にも驚いたが、更に驚きなのが、隣に座ってるフェイトとなのはがそれを美味しそうに食べているのだ。フェイトとなのはの意外な食の好みに、ティアナ達はア然とした。シグナム、ヴィータ、リインフォースは、宇治銀時井を始めて見るが、とても好きにはなれないと思った。

銀時「食うか？」

シャナ「食べてみる？」

セイバー「見た目と違って美味しいですよ」

銀時がスバル達に尋ねた。

ティアナ・エリオ・キャロ「え…遠慮します！」

慌ててティアナ達は断った。
だが、スバルは・・・

スバル「じゃあ・・・一口だけ頂いてみます」
アオヤシャモン「俺も…一口だけなら……」

つと箸を掴んで宇治銀時井を近づいた。

スバルとアオヤシャモンはゆっくりと宇治銀時井に箸を伸ばし、少し摘んで口の中に入れた。

もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。
そして……………2人が口にした感想は……

スバル「あ・・・凄く美味しいです！」

アオヤシャモン「美味いぞこれ、全然いけるぞ！」

一発で気に入ったようである。

2人の予想外の感想にティアナ達は……

[illegible]

大声を出して驚きを表した。

小豆が乗っているご飯が見ただけで気味が悪いのにもかかわらず、
2人は気に入ってしまったのだ。

銀時「おお、マジでか!？」

なのは「ホント!？」

「シャナ、美味しいの!？」

フェイト「ほんと！？スバル！」

銀時は少し身を乗り出す。

スバル「はい！凄くおいしいです！」

アオヤシャモン「美味いぜこれ！！全く新しい珍味だ！！」

スバルとアオヤシモンは目を輝かせている。

銀時とシャナとセイバーとフェイトはリンディ以外の同志が見つかって大喜びした。ヤミは普通の反応だったが

ティアナ達「な．．．なんだそりや――――」

だった。

月詠「あんなのを好きになれる物があるなんて・・・」

神楽「世の中は広いネ」

一方通行「あんなキショクワリイもののどこがいいんだア…？」

ブレイド「スバルたん…」

ディスク「あらまあ」

セト「どうかしてるぞアイツラ…」

剣心「どうなってるんでござろつかない…」

剣心達も、銀時の宇治銀時井を気に入る者はそうはいないと考えてたが、フェイトだけじゃなくスバルとなのはも気に入った事に不思議に感じた。

一方の桂とエリザベスは、はやてとリインと一緒にそばを頂いていた。

ヴィータ「おい、ツラ。朝食ぐらいそば以外の物を食べる気が無いのか？」

ナギ「たまには別の食えないのか？」

ソルヴァ「同じのばかり食べてると体に良くないですよ？」

ヴィータとナギとは桂に話しかけると、桂はヴィータにそばの良さ

を話しかける。

桂「ツラじゃない桂だ。それにそばは血圧を下げる効力を持っているぞ。・・・ヴィータ殿やナギ殿やソルヴァ殿も是非試食すると良い」

ヴィータ・ナギ「それはつまり私達が血圧高いと言いたいのかああああ（テメエエエエエエエエ）！！」

桂「グボオオオオオオオオオ！！！！」

ヴィータとナギとソルヴァは額に血管を浮かべて怒鳴りながらツツコみ、ハンマーやハリセンを出して、ソルヴァは磁力の能力で桂を襲おうとするが、シグナムとリインフォースに抑えられる。

第九訓 男も女も嫉妬は醜く汚い（後書き）

支配者「今回のお話はいかがでしたでしょうか？」

銀時「俺は死ぬかと思った…」

新八「僕も…」

なのは「私も…」

支配者「まあ、面白いんだからいいじゃん♪」

銀時・新八・なのは「良くねーよ（ないよ）！！（怒）」

支配者「次回。『悪人達の集まりは脅威の始まり』 テイクオフ♪」

銀時・新八・なのは「無視すんなー！！（怒）」

第十訓 悪人達の集まりは脅威の始まり（前書き）

支配者「今回はケンさんから許可を頂いて悪役キャラを二人ほど出演させたいと思います」

銀時「主人公は出ねえのかよ？」

支配者「それはもっと後です」

新八「そんなんで良いんですか？」

銀時「いい加減だな、おい」

支配者「ちゃんと許可を頂いて書いてるんだからいいでしょうが！
！ああ、それと、今回で『十本刀』のほとんどが登場します、もつとも原作とおりのメンバーも宗次朗だけですけど…」

シヤナ「じゃあ、『超リリカル銀魂 Strikers』始まるわよ」

第十訓 悪人達の集まりは脅威の始まり

そして銀時達がミッドチルダに来て一週間後

ミッドチルダの首都、クラナガンから遠く離れた上空に巨大な戦艦が飛んでいた。

それは、超銀魂世界の鬼兵隊の本拠地。超巨大戦艦“煉獄”であった。

そこにあるとある研究所のような部屋。

そこには、何やら赤紫色に輝く数多くのカプセルの中にはある凶悪な兵器が眠っている。

それを不気味に笑い出す高杉とアークス帝国『トゥエンティガード二十之盾』の一人、強欲のバルバモンが話している。その隣にはもう一人見知らぬ男がいる

バルバモン「おおー、これが高杉が言っていた例の機械兵器か」からくり

高杉「ああ。すでに2本は完成されているからそいつは俺達の部下にやったさ。最もアンタ達の技術力のおかげですでに強化プランは出来ていて、前とは違うタイプの“紅桜”になったがな。いずれお前さんの部下にも使わせてやるよ」

高杉はククク……と不気味な笑い方をすると、バルバモンも面白そうに笑い出す。

バルバモン「ふははははははは！人間が作ったとは言え、ふれた瞬間に凶器を感じるわ！我等天人と手を組んでまで世界を潰すと聞いた事があるが…本当にその様な？」

愉快そうに笑い出すバルバモンに、高杉の顔は獣を狩る脅威の笑顔を浮かぶ。

高杉「ああ、だからアンタんとこの皇帝陛下の計画に手を貸してやったんだ。異次元だろうと元の世界だろうと……俺は……いや、俺達は全てを壊してやるのさ」

世界の全てを憎み、この手で破壊すると誓った黒い獣と地獄の鬼の脅威は収まることはない。

バルバモンは高杉やこの場にはいないが志々雄が宇宙海賊『春雨』より脅威の人物であると改めて知る。

???「ふん、機械などに頼るやり方など、我は好かんがな。真の力とは己の肉体のみで手に入れる事を言うのだ」

真紅のワイシャツを着て下に黒い長ズボンを穿き、両手に黒い生地フィンガーレスグローブ、両足に真紅の足具をそれぞれ身に着けた姿をしている黒髪の男が紅桜の存在を否定するようなことを口走った。

高杉「ククク…確かにお前さんからみりゃあそう見えちまうだろうなア」

バルバモン「まあ…お前の意見も分からんでもないがそう否定してやるな。“覇皇デューク”よ」

デューク「ふん…」

バルバモンの言葉にデュークと呼ばれた人物が軽くムスツとした表情をした後、黙った。

この男こそは『ケン』さんの小説『HERO'S EPISODE ～ヒーローズエピソード～』に出てくる修羅世界を治める覇皇デューク

ークと言う男である。そのデュークがなぜここにいるかというと彼もアークス皇帝の計画に協力し、その次元からこの世界に来たからである。しかし、飽く迄にている世界から来たのだと言うことになっ
ていますので『HERO'S EPISODE』ヒーローズエピソード』本編とこの小説の物語は一切関係ありません。

バルバモン「『春雨』共と手を組んだのも、下らぬ世界を潰す為だけに奴らを利用したと言う訳か？」

高杉「まあな。世界を壊す為なら、『春雨』だろうがなんだろうが邪魔するものは殺すだけさ。まあ、いくら俺達でもアンタ達まで利用しようなんて考えねえよ。アンタとこの皇帝陛下を敵に回す何ざ想像したくもねえ、無駄死にはごめんだからな」

デューク「それについては我も同感だ。あれ程までのとてつもない存在など、我はおるか“あの方”でさえ敵に回したいとは考えられん」

バルバモン「無論だ。我らが偉大なる皇帝陛下は“森羅万象”を司る完全にして全知全能すら超越したお方なのだぞ？いくら貴様らでも妙な考えなど起こすまい」

高杉とデュークの“皇帝”だけは敵に回したくないと言う言葉にバルバモンは“当然だ”と言う言葉を発する。高杉はおるか戦いこそ全てである狂気の存在修羅達を納める王であるデュークでさえ皇帝だけは絶対に敵に回したくないと断言する。…皇帝はそれほどまでに恐ろしい力を持っていると言える。

すると、高杉は周りをふと見て何かを思いだしたのかバルバモンに尋ねる。

高杉「そっぴゃあ…アンタがそのデュークと一緒に連れてきたアイツはどこに行きやがったんだ？姿が見えねえが…」

バルバモン「“イグニス”の事か？奴ならば“志々雄真実”の奴を

見てくると言っていたが？」

高杉の質問にバルバモンはこう答える。どうやらここにはバルバモンがデュークの他にも“イグニス”と言う人物も連れて来た様である。

デューク「ふん…、よくもまあ、あんな人間嫌いな奴までこちらに引き込めたものだな？」

バルバモン「皇帝陛下が説得されたのだ…奴とて愚かな人間共だけではなく下らぬ世界にも恨みを持っている筈…しかし…いくら奴でも一人で全てを滅ぼすことなど出来はしまい。だから今回の皇帝陛下の話しを聞き、奴も我々が計画に協力すると言ったことになったのだ」

バルバモンはデュークにそう説明する。イグニスはかつてこことは別の平行次元の時空管理局に勤めていた男だったが管理局に裏切られ、自分が人間ではないことを知り、復讐に取り付かれ“人類抹殺”と言う狂気に刈られた男なのだが皇帝が何かしらの話をしてこちら側に引き込んだらしい。

高杉「…なるほどな。ああ、そうだ話は変わるが、実は明日の夜にホテル・アグスタで骨董オーディションが行われる。その為、機動六課がそのホテルの警備をするらしく、お前達は大量のガジェットで襲わせるつもりだろ。そいつ等を実験台にさせて例の機械兵器の威力、その眼で確かめて見るといいぜ。それにもう、真実ご自慢の戦闘部隊『十本刀』や俺達の直属の幹部連中も集結する頃だ。あの野郎も変な目に合わされなきゃいいがな」

デューク「それはない…。奴の實力は我と互角か下手をすればそれ以上…その『十本刀』や志々雄真実と言う男がどれ程が知らんが、奴をどうにか出来る筈がないだろう」

高杉「ククク…真実を甘く見ねえ方がいいぜ？何せアイツは攘夷戦争において、『恐怖の象徴』とされ、大妖達でさえ奴の強さに怯えなかった奴らは少なくねえんだからな」

高杉はデュークに向かって凶悪な笑みを浮かべながらそう言う。そして高杉はその兵器を部下に使わせて計画の為に溜めさせる。

バルバモン「元は実験用とはいえ、あれもかなり凶悪な代物はずであらう？」

高杉「ククク…ああ、もしかすればあんな駄作品でも機動六課を全滅させる力はあるだろ？」

バルバモン「ククク…この世界の魔導師共などデバイスと言う道具がなければ何も出来ん唯のゴミに過ぎん。あんなゴミ共の相手など駄作品で十分であらう…所詮は魔力が高いただけでいい気になって”エース・オブ・エース”などと持て囃されている”殺し合い”の”こ”の字も知らん様な馬鹿な小娘共の集まりに過ぎんのだからな。フフフフ…」

強力な兵器を駄作品扱いする程まで、高杉の計画している兵器、新型の紅桜はとんでもなく凶悪で強大といえるであらう。

高杉「しかしよお…いくら改造しているとは言え、あんなガラクタだけで襲わせていいのか？あそこにはアンタ達の欲しい物があるんだろ？」

バルバモン「ふん、問題はない。あのガラクタ共は唯のおとりだ。“あのお方”は別働隊がお連れする事になっているからな。つまりそっちが本命だ。それに“あのお方”も愚かな人間如きに使われるなど我慢ならねん筈だからな」

高杉「そうかい。…ククク…それじゃあ、祭りの始まりだ」

???「そつだよネエ、兄さん」

その隣には背中に緑色のマントをかけている上半身がほぼ裸の目に包帯を巻いている銀髪の男が顎に手を当てて言う。そしてその男の肩の上にいる金髪のマジシャンのような格好をした男の子が相槌を打つ。

???「なんにしてもよオ…とりあえず寝たいんだがね俺は…」

そして、腰に刀を差しているげっそりした感じの浪人風の男が愚痴のようなせりふを喋る。

???「グダグダうるせえぞテメエら…静かに歩けねえのか……」

???「少しくらいは静かにしろよ。うるッせエな…」

更にまた全身にマントで多い顔の半分を隠し後ろから機械仕掛けのサソリの尻尾の様なものを出している男と後ろでおさげの髪形をし上海人の兵士が着る様な服を着ている男が文句を言った。

瀬田「はいはい、皆さん。おしゃべりはその辺で、もうすぐ志々雄さんのいる部屋につきますから静かにしてくださいね」

そして、その様子を宗次朗が宥めるように止める。

???「へいへい、分かってるよ宗ちゃん」

???「じゃ、さつさと大将に挨拶して部屋へ行こうぜ」

そしてまた、その場にいる八人の男は歩き出した

そしてここは鬼兵隊の煉獄のトレーニングルームらしき部屋

そして、その扉が開き一人の男が入ろうとしていた。鬼兵隊の参謀である男、百式の方治である。因みにこの物語の方治は『十本刀』ではなく唯の参謀の地位にいる男です。戦闘が出来る姿が想像できない物ですから…

方治「志々雄様。宗次朗が帰還いたし…」

部屋に入った方治がそう言いかけた瞬間

ヒュン！

ドカーン！！

方治「！？」

方治の頭の上を何かが掠り、それは扉の上で爆発した。

方治「うわっ！」

そして炎を纏いながら方治の真上に落ちてきたので、方治は咄嗟に避けた。

そして、落ちてきたそれは炎に焼かれてボロボロになっているガジエットの残骸だった。

方治「こ、これは…志々雄さ…！！」

そして、方治は視点を前にやり、一瞬言葉を失った。

なんと、目の前には灼熱の炎で焼かれている夥しい数のガジェット
の残骸があつたのだ。その数何と大型も含め五百以上。

まるで地獄絵図のような光景が広がっていた。部屋の温度も尋常じ
やないくらいに上がっている。

そして、炎の中心で立っている全身包帯の男が方治に気付き声をか
けた

それはもちろん志々雄であつた。しかも、志々雄はあれだけのガジ
エットを相手にしていたにも拘らず全くの無傷であつた。

志々雄「方治か？どうした」

方治「あ、はい志々雄さま。宗次朗が『十本刀』を連れて戻ってま
いりましたのでご報告に参りました幸いです。それよりも志々雄
様、これは一体……」

志々雄「これか？ちよつとガラクタ相手に遊んでただけだ。お遊び
にもならなかつたがな」

志々雄はつまらなさそうに方治にそう説明する。
すると

???「うわぁ、やつぱり凄いですね、志々雄さん。今回はど
のくらいまで秘剣使つたんですか？」

あどけない声が聞こえてきた。それは宗次朗であつた。相変わらず
笑顔は絶やしていない。

志々雄「宗次朗、どさくさにまぎれて人の剣の情報聞き出そうとし
てんじゃネエよ」

瀬田「やだな、志々雄さん、軽い冗談ですよ。……そんな事より連
れてきましたよ、十本刀のメンバーほぼ全員。他の幹部の人達は今
う少し遅れますけど」

志々雄「そうか」

そう短く返事をして、志々雄は目に前の男達に目を向ける。

志々雄「久しぶりだな“左天”。修行はうまくいったのか？」

左天「ああ、バッチリだぜ大将」

そう言っただけで返事をした男は左天。Needlessに出てくる敵キヤラだ。この物語では『十本刀』の一人であり、呼び名は“第四波動の左天”である。

志々雄「“右天”、お前の方は如何だ？」

右天「僕の方もバッチリだよ。志々雄様」

そして左天の右肩に座っている金髪の少年は右天。これもNeedlessのキヤラである。十本刀での呼び名は“道化の右天”。ちなみに此方では左天と兄弟でもある。

志々雄「“デイダラ”。お前の爆発の芸術、今回も楽しみにしてるぜ」

デイダラ「おう！任しといってくれ志々雄の旦那！うん！」

そして金髪のポニーテールの男“デイダラ”も返事をした。彼はNARUTOの登場キャラクターでこの物語では『十本刀』の一人、呼び名は“芸術のデイダラ”である。ちなみに彼は爆発系の能力者でREVEALは7である。

志々雄「サソリ、傀儡の腕は錆とらんだろうな？」

サソリ「バカ言え」

そう返事をしたのはサソリ。彼もNARUTOの登場キャラクターで、此方では『十本刀』の一人、“呼び名は”傀儡のサソリ“である。

志々雄「銀閣”。お前は相変わらず眠たそうだな？」

銀閣「実際眠いんだから仕方ねーでしょうが…」

そう言っただけながら返事したのは“宇練銀閣”。刀語のキャラクターで、完成形変体刀・斬刀『鈍』の所有者であり光速の抜刀術『零閃』の使い手である。此方では十本刀の一人で、呼び名は“零閃の銀閣”である。

志々雄「蛇骨”。お前も相変わらず気色の悪い見ためしてやがるな」

蛇骨「そりゃねーだろ、志々雄の兄貴」

そう言っただけ悲しそうに返事するのは“蛇骨”と言う男。犬夜叉の登場人物である七人隊の一人。

此方では十本刀のメンバーで、呼び名は“蛇使の蛇骨”である。

志々雄「そして…」

ガキーン！

ドオォーン！！

おさげ髪の男が身の丈三寸以上はあるかと言うほどの巨大な大矛で志々雄に向かって斬りかかった。

しかし、志々雄はそんな事は何でもないという具合に刀で簡単に大矛を受け止める。

そのときとてつもない衝撃が外へと放たれ暴風が吹かれた。

志々雄「お前も相変わらずだな。“蛮骨”」
蛮骨「そう言うテーマも相変わらず隙がねえな」

そう言うて蛮骨と呼ばれた男は後ろに下がる。彼は、犬夜叉の登場キャラクター七人隊の首領“蛮骨”。この物語では彼もやはり『十本刀』の一人で呼び名は“妖矛の蛮骨”である。
ちなみに彼は隙あらば志々雄に斬りかかって行っても構わないという理由で志々雄の仲間になっていたりする。

志々雄「これではほぼ全員揃ったな…。宗次郎、“夜童丸”の奴もちゃんと連れてきたか？」

瀬田「はい、ちゃんと連れて来てますよ。最もあの人は大きすぎて戦艦の中に入れませんから甲板にいますけど」

志々雄「そうか、ご苦労。アイツを手なずけるのには苦労したからな」

志々雄の言葉に宗次郎が返事をした。そして甲板には数十メートルもの巨大な鎧武者の妖怪が座っていた。これは『十本刀』の新メンバーにして、鬼兵隊の妖怪部隊の司令官『十本刀』最強の秘密兵器、伝説の大妖怪“大妖将・夜童丸”である。

志々雄「それと……」

そして、志々雄は宗次郎達の後ろにいる膝裏まである銀髪に翡翠色の瞳をした整った顔立ちの男に向ける。

志々雄「珍客だな…。アンタは確かバルバモンが連れてきたい異世界の協力者だったか？」

イグニス「ああ、俺の名はイグニス……」

その男、“イグニス”が志々雄に挨拶をした。

志々雄「そうか、で、そのイグニスが俺に何のようだ？」

イグニス「お前がどんな男が見に来た、実際に見てみたが、とても人間の気とは思えんな」

志々雄「そう言うアンタも人間じゃねえんだろ？」

イグニス「分かるのか？」

志々雄「それくれえはな」

志々雄がイグニスに向かってそう言う。

志々雄「アンタも世界に恨みを持つてる口なんだろ？」

イグニス「世界と言うより愚かな人間どもにな」

志々雄「そうかい、んで？」

イグニス「異世界で最強とよばれる剣客である貴様の実力がどれ程のを見せてもらいたくてな…貴様も『人外』なんだろう？」

志々雄「弱え人間の体に何ぞ興味はねえからな…当の昔に捨てたさ、今の俺は“地獄の鬼”だ」

イグニス「そうか…で、返事は？」

志々雄「面しれえ、いいぜ。こんなガラクタ共を潰しただけじゃ物足りねえからな。俺自身としてもアンタの実力には興味がある」

イグニスの申し出を志々雄は了承した。

志々雄「方治、そう言う訳だ。さっさとこのガラクタどもを片付けろ」

方治「しつ、志々雄様。よろしいのですか？」

志々雄「構やしねえよ。国盗り前の余興だ。いいからさっさと準備しろ」

方治「はっ、はは」

志々雄の言葉に方治が頷き、そして兵士たちがその部屋のガジェット達の残骸を片付けた。

1時間後

部屋の中はきれいさっぱり片付けられ巨大なさっぱりとした空間が広がっていた。

そして部屋の中央には志々雄とイグニスが立っていた。
そして、観戦室には『十本刀』と方治がいた。

左天「大将も物好きだな。模擬戦とはよ」
蛇骨「全くだよな」

左天と蛇骨は志々雄の物好きな所にそう言った台詞を吐く

デイダラ「申し出をあんな簡単に受けるって事は旦那もあの野郎のことが気に入ったって事か？サソリの旦那」
サソリ「俺に聞くな……。唯、あの野郎が只者じゃねえっての一目見てわかったがな」

デイダラの質問にサソリは面倒そうに答えるもののイグニスの巨大な威圧感を見て瞬時に只者ではないことを理解した。

蛮骨「確かにな。あの野郎が人外だったのは頷ける。宗次郎、お前は如何見るんだよ？」

瀬田「そうですね…。相当強いですよあの人、志々雄さんでも苦戦するかもしれませんよ。相当別格の実力者みたいですから」

方治「馬鹿なことを言うな宗次郎！志々雄様は無敵なのだ！苦戦などされ様筈がない！」

蛮骨「相手の实力を見る目も大してねえやつがでしゃばってじゃねえよツタンカーメン野郎」

方治「なっ、なんだと！？」

瀬田「まあまあ」

蛮骨の言葉にイグニスの実力を宗次郎が分析する。そして蛮骨の言葉に方治が怒鳴りそれを宗次郎が宥める。

右天「まあ、暇つぶしにゆっくり見せてもらおうっと、銀閣のおじさんもそう思うでしょ「グー、グー」…って…寝てるし……」

右天が試合にまるで興味を示さず呑気に眠っている銀閣を見て軽く呆れた。

そして、イグニスと志々雄のいる中央では

志々雄「アイツラがいろいろと言いつてるみたいだな…」

イグニス「あれはお前の部下か？」

志々雄「そうだが、それがどうした？」

イグニス「俺にも一応部下はいた、最ももう当の昔に袂を別つたがな」

志々雄「そうか」

志々雄はイグニスの言葉に頷く。

イグニス「そろそろお喋りは辞めにして始めるとするか」

志々雄「その前に言っておく事がある」

イグニス「何だ？」

志々雄「所詮この世は弱肉強食。強ければ生き弱ければ死ぬ。アンタが強者なのは見りやあわかるが、実際に戦って見なけりやあくわしい実力はわからねえ、それでもしアンタが弱いってんならアンタも今まで俺が消してきた連中同様…」

そのとき異常すぎるまでの気の放流が放たれ殺気と威圧がその巨大なトレーニングルーム全体を覆った。

志々雄「俺の“糧”^{かて}になるか？」

イグニス「ウ…！」

その邪悪で禍々しく凄まじすぎる威圧と殺気にイグニスが少しだけ押された。

イグニス「（な…なんだこれは…これが人間の気だと……！…やはりこいつは…俺と同じ人外……！！）」

イグニスは志々雄の全身が絶対零度の氷で凍りつくような強大過ぎる殺気を感じてしまいそう考えてしまふ。墮天使ルシファーであるはずのイグニスでさえ少しだけ恐怖を感じてしまった。

そして、トレーニングルームの観戦室では

左天「相変わらずとんでもねえな…」

デイダラ「ああ…」

サソリ「思わず身震いしちまうぜ…」

瀬田「本気になったみたいですね志々雄さん」

蛇骨「本気の志々雄の兄貴を見るといつも思うぜ……」

志々雄の凄まじすぎる威圧と殺気を『十本刀』のメンバーも感じ取っていた。

蛇骨は意味深に言い始める。

蛇骨「俺達とは…全く次元の違う生き物なんじゃねえか、ってよ…」

そして、イグニス対志々雄の戦いは始まった

イグニス「うおおお！」

イグニスはそこから走り出すとても人間とは思えない速さで志々雄に斬りかかった。

しかし、志々雄はなんでもないかのようにその斬撃をかわす。

縦、横、右斜め、左斜めとイグニスは目に留まらぬ速さで志々雄に次々と斬りかかるが志々雄は全て余裕でかわしている。

それを見ていた十本刀は

蛇骨「速え！」

左天「やっぱり相当やるみてえだな、あの銀髪の兄さん」

蛇骨はイグニスの桁違いの速さに驚き左天はイグニスの実力のに感心する

蛮骨「もつとも、志々雄の奴完全に見切ってるみてえだけだな」
サソリ「だな、あれ位じゃあ志々雄には通用しねえだろ」

最もそれを余裕でかわしている志々雄を見て志々雄はまだ余裕を見せていると蛮骨とサソリは画策する。

そして、イグニス自身も

イグニス「（まだ本気など出している覚えはないがこうも容易くかわされているとは…統夜以上の実力は間違いなくあるということか…）」

イグニス自身も志々雄の異常さには驚いていた。まだ本気など出している覚えはないが上位の実力者でも付いていけないほどの動きで攻撃しているのにも拘らず志々雄は自分の全ての攻撃を完全に見切ってたかわれている。それを見たイグニスは志々雄の実力が間違いなくかつての右腕の部下であつたの統夜以上であると考えてる。

志々雄「どうしたよ？この程度じゃ蠅が止まるぜ？」

イグニス「ならば…これは如何だ！」

志々雄の挑発にイグニスは瞬速で刀を振るい連続斬りを行う自身の得意技を繰り出した

イグニス「八刀瞬間！！」

今までの剣速をはるかに上回る桁違いの速さの連続斬りをくらい、志々雄は少しだけ右肩を斬られ後ろに引いた。

志々雄「速えな。やるじゃねえか」

イグニス「今のさえ殆ど見切っていたお前が何を言っている」

志々雄「まあ、速度じゃあ右に出るものがいねえ奴といつも剣を交えてるんでな、目が慣れてんだよ」

そう言つて志々雄は観戦室でこちらの試合を見ている自身の右腕の部下、瀬田宗次朗に視線を向ける。

志々雄「それじゃあ、そろそろこつちも反撃させてもらっぜ」

志々雄はそう言つと愛刀“無限刃”に灼熱の炎と強大な闘気のオーラをともらせた。

志々雄「しゃあっ!!」

志々雄は凄まじい勢いで炎を纏った無限刃をイグニスに向かって振り下ろす。

イグニス「ぐっ!」

イグニスは刀を使つて志々雄の一撃を受け止める。そのとき、破壊の衝撃が地面に伝わり地面が破壊され怪物のように激しく地面を抉り部屋を破壊する。まるで夜王・鳳仙の様な一撃である。

志々雄「ほう、簡単に止めやがるな…だが!」

志々雄はイグニスの刀をはじくとその刹那の瞬間に再びイグニスの

腹に一閃を決める

志々雄「うっしゃあ!!」

ズバッ!

イグニス「ぐっ!」

イグニスはその攻撃を避けきれず思わず食らってしまう。

右天「おおっ!」

方治「さすがは志々雄様!」

サソリ「“壺の秘剣・焰霊”か…」

その光景を見ていた右天は驚き方治は志々雄に対して歓喜の声を上げる。

志々雄「如何だ、イグニス?俺のは焰霊は」

イグニス「似たような技を使う女を俺は知っているがその女のととは比べ物にならない」

イグニスは志々雄の焰霊を見て似た技を使う烈火の将・シグナムの事を思い出す。

しかし、志々雄の焰霊の威力は桁違いでシグナムの紫電一閃を遥かに上回っている。

志々雄「続けていくぜ」

志々雄はそう言い更に強大な炎を刀身に集める

志々雄「参の秘剣…」

志々雄は刀を構えると

志々雄「炎魔斬風”！！”」

凄まじい勢いで無限刃を振るった。

イグニスに危険を感じその場を右に飛んだ。
すると

ズガガガガア！！

イグニス「なっ！？」

なんと壁から遠く離れた位置から刀が振るわれたにも拘らずその剣閃は壁を激しく破壊した。しかもその破壊された後には炎が残っている。

イグニス「今のは…」

志々雄「その剣閃は空域を生み出し灼熱の炎と共に剣圧だけで相手の全てを斬り刻み、そして焼き尽くす」

志々雄は今放った技の説明を始める。

志々雄「それが“参の秘剣・炎魔斬風”」

志々雄は“参の秘剣・炎魔斬風”についてそう言った。

イグニス「成る程な」

志々雄「この程度でびびるテメエじゃねえだろ？」

イグニス「この程度の技……いくらでも見てきた!!」

イグニスはそう言いその場からまるで瞬間移動したかのような瞬速の速さで一気に近づき斬りかかった。

ガキーン!!

志々雄の刀とイグニスの刀が競り合う。

志々雄「たいした速さだな、今のは何だ？縮地か？」

イグニス「縮地ではない……、今の技は『瞬影』……縮地以上の速さで動く体技だ」

志々雄「そうかい（確かに宗次郎の縮地より少し速かったかもな……最もあれ位の動き位本気の宗次郎になら簡単出来るだろうが）」

志々雄はイグニスの技瞬影についてそう分析する。そして本気を出した宗次郎ならばあれ位の動きは容易く出来ると志々雄は思う。そして、イグニスは先程放った瞬速の連続斬りを再び放つ。

イグニス「八刀瞬閃!!」

所が

志々雄「はっ!!」

ガシッ!

イグニス「なっ!?!」

志々雄はそれを片手で止めてしまった。イグニスは目を見開いて驚

く。

イグニス「俺の八刀瞬間を受け止めただと……」
志々雄「一度見た技は俺にはきかねえよ」

イグニス「そうか…ならば!!」

イグニスはそこから上空へと飛び上がり

イグニス「絶牙天衝!!」

イグニスは巨大な斬撃の衝撃波を放った。

ドガアアアアン!!

イグニスの放った絶牙天衝は地面に落ち大爆発を起こした。

絶牙天衝は刀身に高密度の魔力と気力を放出させ斬撃そのものを巨大化させて飛ばすイグニスの大技の一つである。

その威力は桁違いであり間違いないくSSSランク以上は行くかと言う威力である。

その証拠に地面は激しく破壊され決れている。

そして、当たった所には巨大な煙が立ち込める。

左天「何つつ威力だよ、今の技」

蛇骨「あんなのまともに食らっちゃいくら志々雄の兄貴でも唯じゃすまねえぜ」

サソリ「食らったらの話だろうが」

左天と蛇骨はイグニスの放った“絶牙天衝”の凄まじい威力に思わず目を疑った。あんな物をまともに食らえばどんな奴だろうと唯じや済まないだろう。

イグニス「やったか…？」

イグニスは再び剣を構えて一応の警戒を入れておく。

???「こつちだぜ」

イグニス「！？」

イグニスの後ろから声が聞こえた。イグニスを急いで後ろを振り向く

志々雄「大した技だが、当たらなきゃ意味がないぜ」

イグニス「あの瞬間でかわしていたのか…」

志々雄「あれ位造作もねえよ」

志々雄はまた何でも無いかのようにイグニスに向かってそう言う。
志々雄は煙紛れて絶牙天衝をものの見事にかわしていたのである。
イグニス程の男に気配すら感じさせずに後ろに移動していたのだから驚きは隠せない。

志々雄「今度はこいつだ」

志々雄は無限刃を握ると闘気のオーラが集まりそれを高速回転させ
灼熱の炎を灯らせる。

志々雄「五の秘剣…」

そしてそれを一気に振り下ろし

志々雄「“螺旋焰”！！」

ドゴオオオオオッ！！！！

膨大な大きさを誇る竜巻上の巨大な火炎砲撃を放った。

イグニス「ヌッ！」

イグニスはそれを上空に飛んで咄嗟にかわす。

炎の砲撃は壁に当たって弾け飛ぶ

地面は抉れまるで溶岩が通った後の様にドロドロに融けていた。
すると

ズドドドドッ！！

イグニス「何ッ！？」

イグニスに向かって大量の火炎弾が放たれた。

イグニスはそれを体を捻ってかわし、急いで地面に着地する。

イグニス「瞬影！！」

イグニスは再び超瞬速の移動法“瞬影”で移動を始める。
しかし、

志々雄「見えてるぜ！！」

志々雄はイグニスの動きが見えているのかイグニスに向かって火炎弾を左手からまるでガトリングガンの様に超連射して放つ。

イグニス「ちいっ！」

イグニスの瞬影の速度を最大限に利用して火炎弾をかわし、志々雄に斬りかかる。

ズバツ！

イグニスの一閃に志々雄に切り裂かれる。
所が、

ボオオツ

イグニス「なっ！？」

切り裂かれた筈の志々雄は突如炎の塊となりその場から消えた。
そして、

志々雄「どうしたよイグニス」

イグニス「！？」

志々雄「俺はこっちだぜ」

すると志々雄はイグニスの後ろでイグニスの首筋に剣を構えていた。

イグニス「…今のはなんだ？炎を使ってダミーを作り出したと言う所か？」

志々雄「ご名答、瞬時に理解するとは大した洞察力恐れ入る。『幻の秘剣・影炎』かげろう炎の人形を作り出し相手を惑わす為の技さ、最も炎の人形自身も実態があるかの様に攻撃することもできるがな。いわば俺の分身で奴だ」

志々雄はイグニスに今の技、影炎についてそう説明する。

志々雄「さて、もう降参か？」

イグニス「…ッ！舐めるな！！」

ガキイン

イグニスは瞬速の速さで剣を振るい志々雄の刀を振り払い後ろへ下がった。

志々雄「やるねえ…炎魔斬風・紅蓮剣舞！！」

志々雄は刀身に炎を燃え上がらせた無限刃から凄まじい数の炎の斬撃を放つ

イグニス「この程度！」

しかし、イグニスは刀を振るい自分に向かってきた炎の斬撃を全て弾く。

志々雄「しゃあっ！」

イグニス「！！」

そして、イグニスが斬撃の嵐を全て防いだ瞬間に志々雄がイグニスに斬りかかる。

ガキイン！！

しかし、イグニスはそれを難なく受け止める。

イグニス「この程度の攻撃が通ると思ったか？」

イグニスには余裕をこめてこう言う。
しかし、志々雄はニヤリと笑うと

志々雄「はなから通るなんて思ってたねえよ、俺の狙いはコツチさ」
イグニス「何？……！！」

するとイグニスが受け止めている志々雄の無限刃の刀身が赤く光りだした。

志々雄「八の秘剣…『爆魔炎柱』！！」

ズドオオオオオオオオオオ！！！！

その瞬間志々雄の無限刃から大爆発がおき数千度以上とも言える灼熱の火柱天に向かって伸びた。

蛇骨「おわわッ！すげっ！！」

左天「大将の奴…ここまでやるか？」

その凄まじい火柱を見たとき蛇骨は驚き、左天は模擬戦でここまでするかという志々雄に対して軽く呆れた。

そしてその火柱が晴れるとそこには炎に焼かれて服のこげた状態になっているイグニスとほぼ無傷の状態の志々雄がいた。

志々雄「流石だな、あれ食らっても大してダメージはねえか」

イグニス「今のは流石に驚いたぞ…」

イグニスは少し息を切らしながらそういう。流石に今の技は威力が凄まじい。普通の人間なら間違いなく死んでいるだろうと言う威力の技である。墮天使イグニスだからこそ生きていられたと言う物で

ある。

イグニス「貴様の実力がこれほどとはな…」

志々雄「まだ奥の手は幾つかあるぜ、最もそれはアンタも同じだろうがな」

イグニス「無論だ。だがここで全てを見せる気は無い」

志々雄「だろうな」

二人は意味深に会話を続ける。そして

イグニス「うおおっ!!」

志々雄「しゃあっ!!」

そして再び二人は凄まじい速さでダッシュしお互いに刀をぶつけ合う。

互いに目にも見えない超速の剣技が炸裂しまくり、連続にぶつかり合う戦艦の砲撃のような轟音が次々と響く。その凄まじい衝撃音と共に部屋を破壊して行く様に巨大な衝撃波が外へとはじき出される。志々雄とイグニスの人知を圧倒的に超えるほどの豪快過ぎる神速剣がぶつかり合い、お互いに譲れないような猛攻が続く。

ただ見ているだけでは、斬撃と斬撃が大嵐のように振ってぶつかり合っているようにしか見えない。

さらに2人は容赦なく、刀を振り続けてぶつかり合う。

まるで巨大な斬撃が2人を纏っているかのような光景である。それから放たれる衝撃波だけでも部屋を破壊していくかのようにであり、まさに怪物同士が剣を交えているとしか言いようが無い。

デイダラ「おいおい、何だよこの勝負…」

サソリ「志々雄も化け物だが…あのイグニスって奴も十分化け物だな…」

デイダラとサソリは想像を絶する力で剣をぶつけ合い衝撃だけで部屋を破壊していく二人の戦いを見て思わずそう呟く。

方治「志々雄様とあそこまで渡り合うとは…」

左天「どっちも化け物だな…」

右天「凄すぎて分けわかんないよ…」

蛮骨「速さならアイツが力の方は志々雄が僅かに上って所か？」

瀬田「そうですね、あの人の速さは相当ですよ。常に縮地級の速さで動いてますからね。まあ、それに難なくついて行ってる志々雄さんも流石ですけど」

十本刀のメンバーが常に注目するほどの戦い、二人の人外の戦いはまさに怪物同士が剣を振るっているとしか言いようが無いほどである。

そして、志々雄は空気を切り裂く様な速さで蹴りを放つ。背中に強烈な衝撃が来てイグニスはそのまま地面に向かってふっ飛ばされた。地面に激突する寸前で体勢を入れ替えて足から着地する。刀を構えて今度はイグニスが瞬速で接近し刀を振るう。それを志々雄は無限刃で受け止め技を放つ。

志々雄「四の秘剣・『火刃奈』！！」

志々雄は無限刃を薙ぎ払うかのように振るう。すると火花が発生しそれが巨大な爆炎と化してイグニスを襲う。

イグニス「はあっ！！」

イグニスは刀を瞬速の速さで振るい爆炎を打ち消す。

そしてイグニスも負けじと技を放つ。

イグニス「『絶幻斬』！！」

ズドン！！

志々雄「ぐおっ！！」

イグニスは上段から一閃する強力な剣戟を放つ。
その凄まじい威力に地面にクレーターが出来る。その衝撃の重さに
流石の志々雄も苦い顔をする。

志々雄「しゃあっ！！」

志々雄は力を入れてイグニスの剣を弾くと再び二人はぶつかり合う。
イグニスの素早い斬撃が繰り返される。それをは志々雄は自身の刀
で弾き、受け流す。志々雄は炎を纏った回し蹴りがイグニスの頭を
狙って放つ。それを紙一重で回避して再び斬撃を入れる。し化し、
そのイグニスの刀は志々雄に受け止められる。
そして桁違いな剛剣の響きと閃光とも言える速さで刀をぶつけ合い、
そして、後ろへと交代する。

イグニス「ハア、ハア」

志々雄「ハア、ハア」

二人はかなりの体力を消耗している状態にまで来ていた。

イグニス「…そろそろ、決着をつけるか？」

志々雄「ああ、そうだな」

二人は次の一撃で決着をつけようと力を貯める。

そして、

イグニス「うおおおおお!!」

志々雄「しゃああああ!!」

二人は同時に地面を蹴り上げ接近し技を放つ

志々雄「しゃああ!!」

イグニス「うおおお!!」

イグニスは刀に魔力と気力を凝縮させ集める

志々雄も巨大な炎のエネルギーを刀身に集め灼熱の特大刀を作り出す

イグニス「絶幻斬!!」

志々雄「壱の秘剣・改・『巨神焰霊』!!」

そして互いの技が再びぶつかり合う。

ドゴオオオオオン!!!!

凄まじい爆音と共に煙が上がる。その威力の激しさに閃光が走る

『又オオオオオッ!!』

宗次朗「……!!」

その衝撃の激しさにその場にいた全員が思わず目を瞑る。

その破壊力の衝撃に観戦室の強化ガラスが全て砕け散ってしまった。

そして煙が晴れていく

蛇骨「ど…どうなったんだ……?」

方治「志々雄様…」

その場にいた銀閣以外の全員が下にいる二人を見る。
すると、

志々雄「お互い…限界みてえだな」

イグニス「その様だ…」

二人が地面に膝を付けて息切れを起こしていた。
どちらももう体力を相当使ってしまったようである。

志々雄「この勝負…引き分けて言いか？」

イグニス「ああ…俺に依存は無い……」

志々雄「ククク…まだ、アンタ本気じゃねえんだろ？次のアンタの本気がみてえもんだな、そうすりゃ俺も奥の手の技“極意”をいくつか見せられるってもんだ」

イグニス「貴様にも奥の手が幾つかあると言う事か…お互いやはり『人外』だな」

志々雄「ククク…違いねえな」

二人はお互いに“引き分け”と言う決着に同意する。

こうして二人の怪物同士の戦いは引き分けに終わったのであった。
奥の手をいくつか残していると言う言葉を残した後に…

第十訓 悪人達の集まりは脅威の始まり（後書き）

支配者「いかがでしたか？二人の戦いは？」

銀時「二人とも完全に化け物じゃねえか……」

剣心「しかも、あれでまだ奥の手を残しているとは……」

支配者「まあ、そう言う事ですな。…『十本刀』に女がいなくて気になるという方がいたかもしれませんが実際に原作でも女は独りもいませんし、どうかご勘弁を、後、前回は先走りした予告をして申し訳ありませんでした、次回こそ”ホテル・アグスタ”のお話です。後『ケン』さんへ、今回は許可を頂きありがとうございました。いずれ主人公も登場させますのでもうしばらくお待ちください」

なのは「次回。『平行世界では原作が以外のトラブルがつき物』テイクオフなの!!」

「予告」

ナレーション「ホテル・アグスタに危険なロストログアが運び込まれたようです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7848u/>

超リリカル銀魂 Strikers ~大次元鎮魂歌~

2011年11月15日15時48分発行